



愛知大学人文社会学研究所 2016 年度ワークショップ報告書

マテリアリティの政治と「インフラ論的転回」 ー社会の近代性を支えるヒト・モノへの問いー



〈表紙写真〉

写真上：岩手県宮古市田老地区の被災した防潮堤（2015 年 3 月 2 日 撮影：植田剛史）

写真下：工事中の豊洲新市場（2014 年 8 月 15 日 撮影：植田剛史）

はしがき

この報告書は、愛知大学人文社会学研究所主催・「社会と基盤」研究会共催のもと、2016 年 9 月 17 日に開催されたワークショップ「マテリアリティの政治と『インフラ論的転回』——社会の近代性を支えるヒト・モノへの問い」の記録を収録したものである。本ワークショップの企画趣旨や内容については本編に譲り、ここでは、本ワークショップの開催に至る経緯について、若干の補足を述べておきたい。

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に端を発する出来事の連鎖は、ヒト・モノの複合体から成るインフラストラクチュアに一体不可分な形で支えられてきた現代社会の姿を否応なく明らかにした。こうした現実に対峙するなかで、2011 年 4 月に発足した「社会と基盤」研究会（研究代表者：町村敬志、科研費基盤研究 B（課題番号 23330157）および科研費基盤研究 A（課題番号 26245057））では、東日本大震災のもとで生じた出来事の連鎖を総体として記録すべく『東日本大震災クロニクル 2011.3.11-2011.5.11』（発災後 2 ヶ月間に起きた出来事約 11000 件を掲載）を作成するとともに、それを分析しうる社会理論の彫琢が試みられてきた。この理論的作業は、2013 年 12 月～2014 年 2 月に一橋大学にて開催された連続ワークショップ「インフラストラクチュアからみる現代社会の編成／再編成——出来事、風景、統治性」（文部科学省「平成 25 年度卓越した大学院拠点形成支援補助金」平成 25 年度一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程研究活動助成）、および、それを基に企画された「社会と基盤」研究会の英文電子ジャーナル *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* No. 6 の特集：Infrastructure Politics とも連動して進められた。本ワークショップは、当初、こうした一連の理論的作業の延長上に企画され、登壇者は *DIS* No. 6 の原稿を事前資料として共有のうえ当日の議論に臨んだ。本報告書とあわせて *DIS* No. 6 を参照いただければ、当日の議論の文脈がより伝わるものと思う。

本ワークショップにおける議論の焦点のひとつは、〈社会なるもの〉の自明性や人間主体の特権性を排する Actor Network Theory や assemblage アプローチの含意について、社会学、哲学、人類学を含めて領域横断的に検討することにあった。折しも愛知大学では、「内外の研究者を組織し、人文社会学の諸領域に関する基礎研究の推進を可能ならしめる」べく、2015 年 4 月に愛知大学人文社会学研究所が設立され、その設立目的には「これまでの人文社会学研究の方法を批判的に継承しつつ、新しい知の在り処をもとめ、地域や世界に向けてこれを発信」することが掲げられた。もっぱら人間のみから成る社会や世界を想定してきた既存の人文社会学の前提を根源的に問い直し、ヒトとモノの双方を射程に含む領域横断的な知のあり方を構想する本ワークショップの企画趣旨は、この設立目的とも合致するものであった。そこで本ワークショップは、愛知大学人文社会学研究所主催ワークショップとしての位置づけを得るところとなった。

以下に掲載するワークショップの記録は、当日の録音データを文字に起し、それを再構成したものである。ただし、事後的な加筆修正は最小限に留め、登壇者の発言をできる限りそのまま掲載することに努めた。そのため、かえって論旨が分かりにくくなった箇所もあるが、ここではむしろ、当日の議論の臨場感を再現することを優先した。

最後に、登壇者の皆様、また本ワークショップの開催にあたってさまざまにご支援いただきました皆様に、心よりお礼を申し上げます。

2017 年 3 月 編 者

目 次

はしがき.....	1
目 次.....	2
企画趣旨.....	3
タイムテーブルおよび開催概要.....	4

ワークショップ記録

開会挨拶		伊東利勝	7
解題報告	インフラストラクチャの政治を分析するために ——近代性への信憑を支える基盤への問い——.....	植田剛史	8
基調報告①	統治性研究はインフラにいかによりアプローチできるか?.....	西川純司	16
報 告①	介入と都市の物質性 ——東京・水道インフラ危機へ／から——.....	岩 舘 豊	24
質疑応答①			31
基調報告②	3・12以降の具体性の知恵.....	森 元斎	33
報 告②	東日本大震災後の市民社会内部における国家の顕現 ——現代日本における軍事ガヴァメンタリティ——.....	森 啓輔	41
質疑応答②			46
コメント①	「インフラストラクチャの政治」をいかに捉えるのか ——その視点をめぐって——.....	三浦倫平	47
コメント②	Infrastructure as Conceptual Analytical and Empirical Ethnographic Tool.....	難波美芸	53
報告者リプライ			64
全体討論			73
閉会挨拶		町村敬志	76

登壇者一覧.....	78
------------	----

企画趣旨

マテリアリティの政治と「インフラ論的転回」

——社会の近代性を支えるヒト・モノへの問い——

B. Latour や M. Callon らによる Actor Network Theory は、科学技術知の成立過程の記述という当初の応用範囲を超えて、人文社会諸科学の知に地殻変動を引き起こしてきた。〈社会なるもの〉の存在を自明視せず、また、人間主体の特権性を排除して human と nonhuman とを等価に扱い、あらゆるものをそれらの集合 (assemblage) として扱うその基本発想は、これまでの人文社会諸科学の前提に根本的な問い直しを迫っている。そしてそこでは、〈近代なるもの〉や〈社会なるもの〉の存在を実現し、そのあり方を決定する位相として、マテリアリティが（再び）せり出しつつある。一方で、こうしたマテリアリティの政治に切り込むことのできる思考への要請は、資本蓄積の危機だけには還元されない〈危機〉の様相が東日本大震災とともに具現化し、さらに、それを掛金として統治の構造転換が進行しつつある現在の日本社会においては、とりわけ切実性を増している。

「社会と基盤」研究会 (Study Group on Infrastructure and Society) による英文電子ジャーナル *Disaster, Infrastructure and Society* No. 6 では、こうした思想転回と現実社会の状況とをふまえ、哲学・社会学・地理学の諸領域で最先端の研究を進める気鋭の研究者の参加を得て、社会の近代性の基盤をヒト・モノの集合からなるインフラストラクチュアにおいて捉える新たなアプローチ（「インフラ論的転回」）について、理論的水準での議論がなされた。はたして、社会の近代性を可能ならしめる基盤とは何か？ 近代社会のあり方を規定してきたのはヒトか？ モノか？ 本ワークショップは、この特集企画の成果をふまえつつも、さらに広い領域から研究者を招聘し、ヒト・モノの集合から近代社会のあり方をめぐる決定の位相に切り込む新たなアプローチについて理論的検討を試みるとともに、それを可能にする領域横断的な知のプラットフォームの構築を模索する。

タイムテーブルおよび開催概要

開催日時： 2016 年 9 月 17 日（土曜） 13:00～17:00

開催会場： 愛知大学豊橋校舎 本館 5 階 第 3・4 会議室

タイムテーブル：

12:30	受付開始	
13:00	開会挨拶	伊東利勝（愛知大学人文社会学研究所・所長）
13:05～13:25	解題報告	植田剛史
13:30～14:00	基調報告	西川純司
14:00～14:15	報 告	岩 舘 豊
14:15～14:30	報 告	須永 咲 ※都合により報告キャンセル
休	憩	
14:45～15:15	基調報告	森 元斎
15:15～15:30	報 告	森 啓輔
15:35～15:55	コメント	三浦倫平
15:55～16:15	コメント	難波美芸
16:15～17:00	報告者リプライおよび全体討論	
17:00	閉会挨拶	町村敬志（「社会と基盤」研究会・研究代表者）

主 催： 愛知大学人文社会学研究所
<http://taweb.aichi-u.ac.jp/irhs/>

共 催： 「社会と基盤」研究会（科学研究費補助金 基盤研究(A) 課題番号 26245057）
<https://sgis.soc.hit-u.ac.jp/index.ja.html>

ワークショップ記録

愛知大学人文社会学研究所・所長 伊東 利勝

お忙しいところ、お集まりいただきまして、ありがとうございます。本日の会は、愛知大学人文社会学研究所の主催ということでもありますけれども、「社会と基盤」研究会に共催をいただき、実現したものです。

この人文社会学研究所は、発足したばかりの非常に新しい研究所でございます。ただ、全く新しくできたというわけではありません。これには前身があります。本学には、現在、文学部をはじめ、経済学部、法学部など7学部1短大が設置されており、以前は教養部もございましたが、形式的にこういう組織に所属しつつ、人文系の研究に従事している教員が、組織横断的に、文学会という学術団体を作っておりました。これが開学当初から60年以上にわたって続いておりましたが、2015年4月に研究所組織に改編されたというわけです。

文学会は、機関誌『文学論叢』を発行することが主たる活動で、外部から研究者を招聘して講演会を開催することもしておりましたが、どちらかといえば内輪だけの活動に留まっておりました。研究プロジェクトを立ち上げたり、学外の研究者との交流を企図したりすることを可能ならしめる構造にはなっておりませんでした。2011年12月に本学の研究体制・政策検討プロジェクトが答申を出したのを機に、外部に開かれた研究機関としての仕組みを作り上げたということでございます。

発足したばかりですので、開設時に掲げた事業はいまだ展開できてはおりませんが、2年目を迎えるにあたって、他の大学や機関の研究者との共同研究に動きはじめたところです。本日の会は、その2回目にあたるものですが、我が研究所が掲げる基礎研究の推進という観点からすれば事実上初めての研究会になるのではないかと、私は思っております。

現在では、ほとんどの学問分野がそれを目指しているように、愛知大学人文社会学研究所も、物事やこれを支える「言葉」や「知」には自然にできあがったものはひとつもなく、それらが形成されるについては、権力であるとか権威であるとか、必ず何かの力とこれを支える思惑が関わっているという観点にたち、まずはそうした力の在り処を可視化するというのを、ひとつの目標としております。これまでのところは、国民国家であるとかナショナリズムであるとかジェンダーであるとか、そういう分析視角での研究を念頭に置いていたように思えますが、本日は、インフラストラクチュアを変数として、「知」の成り立ちをめぐる問題に切り込まれるようであります。

今日のこの会は、回数からいっても、切り口からいっても、研究所にとりまして非常に新しいものでありますので、その成果におおいに期待をしているところであります。長時間になりますけれども、どうか活発な議論が展開されることを期待しております。どうか、よろしくお願いいたします。

インフラストラクチャの政治を分析するために
——近代性への信憑を支える基盤への問い——

植田 剛史

愛知大学の植田と申します。私は、愛知大学人文社会学研究所の所員と「社会と基盤」研究会のメンバーとを、両方兼ねているということがありまして、まず、今日遠くから来ていただいたゲストの方々にお礼を申し上げます。もうひとつは、こういったチャレンジングな企画をお認めいただきまして、いろいろとサポートをいただきました人文社会学研究所に、「社会と基盤」研究会のメンバーとして、あらためてお礼を申し上げます。

本日はこの後、私の方で司会も務めさせていただきますが、時間も限られていますので、さっそく内容に入りたいと思います。「インフラストラクチャの政治を分析するために」というタイトルで、話を進めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

はじめに

まず、このワークショップの趣旨に関しまして、私の方から若干の説明をさせていただきます。「マテリアリティの政治と『インフラ論的転回』——社会の近代性を支えるヒト・モノへの問い」と題して、今回のワークショップを企画いたしました。人文社会学研究所の設立の経緯や趣旨は、伊東先生の開催挨拶でもご説明がありましたけれども、これまでの学問がいったい何を自明視してきたのか、そのことは結局何に棹差すことになるのかといった、学知の政治性も含めて、学問の成り立ちや効果を再帰的に問い直していくという点は、昨年開催された人文社会学研究所の開設記念シンポジウム¹でも、まさに試みられていたことだと思えます。こうした問題についてさらに深めていくうえで付け加える視角として、このワークショップでは「ヒト・モノ」というものを掲げました。人文学あるいは社会科学の対象としてこれまで前提にされてきたものは、基本的には、人間から成る社会、人間にとっての世界、あるいは人間が創り出してきたものであったと思います。アプローチも力点の置き方も様々だけれども、そこでは基本的に、人間というものが関心の中心に置かれてきたわけです。しかし、人間の世界や人間の社会は、これまで人文学あるいは社会科学が想定してきたほどには、それとして完結していないのではないか。だとしたら、こうした前提を自明視することで見えなくなっているものがあるのではないか。あるいは、そのことが人文学や社会科学の知をさまざまに限界付けているのではないか。このあたりをもう一度考え直しながら、人間だけではなくて、ヒトとモノとを両方を射程に含めることのできるような知のあり方を考えていくことができないかというのが、今回のワークショップの一番広いテーマになろうかと思います。モノの持つ力も含めた形で「問い」を立てられるような、そういった知の形とは何なのかということを、学際的に、また領域横断的に考えることができればということで、この企画を考えた次第です。したがって、

¹ 愛知大学人文社会学研究所編、2016、『人文知の再生に向けて』（愛知大学人文社会学研究所開設記念シンポジウム報告書）、愛知大学人文社会学研究所。

今日のゲストも、私は社会学が専門ですけれども、もちろんそこに限定をせずに、哲学がご専門の方、あるいは人類学がご専門の方も含めてお呼びしておりますので、そうした議論の場にできればと考えております。

東日本大震災と近代性の信憑の〈危機〉1：東京の経験から

このようなワークショップのテーマを構想したきっかけ、その出発点としましては、やはり5年前の東日本大震災の経験があるということです。マテリアリティの問題、あるいはヒトとモノといった問題を、あらためて考えなければならないと我々が思い知らされた出来事が、この震災だったわけですね。

まず、2つのエピソードから話を始めていきたいと思いますが、ひとつは、東日本大震災のときに、東京で何が起きていたのかということです。東北の問題、あるいは福島の問題については、この間いろいろな形で報道がなされたり、研究が積み重ねられたりしてきたかと思いますが、あのときの東京がどうであったのかということは、意外と語られていないように思います。5年経って、記憶が薄れつつある部分もありますので、少し振り返ってみたいと思います。

東日本大震災のときの東京の震度自体は、最大で震度5強ほどであったわけですが、人的な被害ですとか、モノが壊れるといったことは、そこまで深刻な形では起きてはいなかったんですね。地震が起きた当日の3月11日は、電車が止まるとか、帰宅困難者が発生するといった混乱はありましたけれども、それも一晩くらいでいたい解消していった、翌3月12日には、だんだんと落ち着きを取り戻していったように見えました。東京だけを見ていると、少なくともそう見えたわけです。しかし、その後3月14日以降になって、東京はよりいっそう混乱していくことになるわけです。もちろん、スーパーやコンビニから商品がなくなるといったことは地震の当日から起きてはいましたけれども、東京が本当に混乱し始めるのは、計画停電が始まった3月14日以降であったと思います。電車が間引き運転になって移動にかかる時間が読めなくなったり、仕事のスケジュールが立たなくなったり、あるいは、エスカレーターが止まって、電気や信号が全部消えて真っ暗になってしまった街の景色に出会って、我々は今までにないような経験をするようになったわけです。それが3月14日以降、しばらく続くわけですが、さらに混乱に拍車をかける形で起きたのが水道水への放射性物質の混入で、それが発表されたのが、たしか3月23日です。特にお子さんがいる家庭なんかは、水をどのようにするかをめぐって、いろいろ大変なことがあったと聞いていますし、区役所の職員がペットボトルを戸別に配って回るなんていうこともありました。あるいはこの頃には、都内でホットスポットが次々に発見されるようになったこともあって、いろんな場所をガイガーカウンターで測ってまわるといったことが、行政によって行われることもあれば、市民によって自発的に行われることもあったかと思います。こうして、電力が不安定であることに加えて、水をそもそも飲んでよいのか、シャワーを浴びてよいのか、手を洗ってよいのかといったことまでもが怪しくなってくるようななかで生活をしなければいけないということを、東京ではずっと強いられていたわけです。

東京でも、たしかに何人か亡くなった方はいましたけれども、でも、東北に比べたら数としては非常に少なかった。さらに、モノが壊れたかといったら、たしかにスーパーの駐車場が壊れたりホール天井が落ちたりといったことはありましたけれども、でも、モノ自体はそんなに大きくは壊れていなかった。にもかかわらず、東京の生活というのは、当時、ズタボロになっていたということを記憶しています。今まで日常的に行ってきたことのいちいちについて、

本当に大丈夫なのか、できるのか、どうなのかっていうのを、不安に思いながら、あるいは確かめながら、でも確かめたところで必ずしも答えが得られないなかで生活をしていかなければならないということを強いられ、しかも、その判断がいろいろと分かれているにもかかわらず、それを議論できないような空気が醸成され、自分の判断を信じられるかどうか分からないなかで、手探りで生活をしていかなければならないというのが、東京で起きていたことのように思います。たしかにモノは壊れていないし、人もあまり亡くなっていなかったけれども、東京の日常生活は完全に崩壊の危機に瀕していたと、当時のことを振り返れば、言っていいたろうと思います。

東日本大震災と近代性の信憑の〈危機〉2：田老の経験から

もうひとつお話ししたいのは、岩手県の宮古市にある田老というところの例です。以前は田老町でしたが、今は宮古市に編入されて田老地区となっています。ここは津波の常襲地帯で、明治三陸大津波でも甚大な被害が出た場所です。ですので、それをきっかけにしながら、この地域では、防災まちづくりが非常に強く進められてきていたということがあって、「津波防災のまちづくり宣言」の碑なども建っています。たとえば、津波を防ぐための防潮堤を築いていくというだけではなくて、それでも津波が来たときに逃げやすいように、街の十字路の角を切っていくといったような試みもなされていた、そういった蓄積のあるところでした。その田老で、今回どのようなことが起きたのかという話です。

田老では、明治以降、津波防災のインフラ整備をしていくなかで、「万里の長城」などとも呼ばれた、非常に大きな防潮堤が整備されてきました。震災前には、高さ 10m で総延長が 2433m の X 字型の防潮堤が街を囲う、そういう状態になっていました。しかし、皆さんご存知のとおり、津波はこの防潮堤を乗り越えて、乗り越えただけではなく破壊し、街を洗い流してしまっ、今回も非常に甚大な被害が出たということがあります。写真 1 は、防潮堤の X 字のちょうどクロスしていた部分に登って撮ったものですが、奥にコンクリートの塊のようなものが 3 つ 4 つ並んで見えるのが、防潮堤が破壊された跡になります。堤防の内側にはずっと建物が並んでいましたが、津波で流されて、これは 2015 年 3 月に撮ったものですが、このよ



写真1 宮古市田老の被災した防潮堤
撮影：植田剛史(2015年3月2日)。

うな状態になっているということです。田老観光ホテルが写真の奥に映っていますが、窓が抜けているところが4階ほどの高さになりますから、それくらいの高さまで波が来ていたということです。

このように田老では、防潮堤が破壊され、街が津波に飲み込まれ、今まで築いてきた防災インフラが破壊されて再び壊滅的な被害が起きたわけです。しかし、にもかかわらず、住民の方たちが今まで築いてきた防災インフラへの信頼自体を完全に失ってしまったかという点、必ずしもそうではなくて、なかには「防潮堤がなかったら、山の方に逃げても助からなかっただろう」ということをおっしゃる方もいるわけです。もちろん現地には他にもいろいろな意見があって、このようにおっしゃる方だけではなく、防潮堤に対する信頼に疑義を呈する意見もいっぱいあるのだらうと思います。それは田老だけの話ではなくて、津波被災地の多くで、そういう議論が闘わされているものだと思います。しかし、見解の相違があって、いろいろな議論があるにもかかわらず、多くの津波被災地では、やはり、なんだかんだで、これまで以上に高い防潮堤が再建されている。いろいろな意見はあるけれども、最終的には結局、近代的なテクノロジーでもって、インフラでもって、津波とか自然災害をどうにかしていこうというところの発想自体は、やはりずっと残り続けていて、それは必ずしも今回の地震や津波によって破壊しつくされてはいないということがあるわけです。

近代性への信憑を支える基盤への問い

この2つのエピソードから、少し話を展開させていきたいと思います。この東京と田老の経験から、いったい何を浮かび上がらせることができるのかというところですね。東京の経験から浮かび上がるのは、近代社会がいかにもモノの論理に振り回されているのか、ということになるかと思います。そもそも、人間の論理、あるいは近代的な理屈を担保するために、都市の基盤であるとか、いろいろなモノが整備されてきたはずであったにもかかわらず、一度それが崩壊すると、崩壊しないまでもうまくいかない部分が出てくると、今度はそのモノの論理によって生活が本当に規定されて、モノの論理を無視しては動けない状態が生じてくるということです。これが、ひとつ言えることであろうと思います。しかし、モノだけが問題だったかという点、そうではなくて、モノの問題だけには完全に還元してしまうことができないというのが、もう一方で、田老の事例から浮かび上がってくることです。田老の場合は、モノは完全に破壊しつくされてしまったけれども、しかしそこには、なお残った信頼の感覚のようなものもあるということです。ここから考えるべきことは、モノの問題だけでなく社会の問題だけでなく、モノを介して担保されてきたような近代社会の信憑の問題なのであるということです。東日本大震災のもとで危機に瀕していたものは、本当は何であったのかということ振り返ると、モノが壊れた、あるいは人命が失われたという問題だけではなくて、社会の近代性自体に対する信憑が危機に瀕していたのではないかとと思われるわけです。そして、この信憑自体がどのようにモノによって支えられてきたのかということに迫りうるような「問い」の必要性というのが、この2つのエピソードから引き出せるのではないかと思います。

そもそも近代社会というのは、合理性とか予測可能性とか計算可能性を徹底的に追求するというをやってきた社会で、そのことは、これまでも社会学がいろんな角度から明らかにしてきたことでもあると思います。Max Weber であれば、Karl Marx であれば、こういうことを、たとえば官僚制の問題、資本主義の問題などとして、扱ってきたんだろうと思います。ただ、そこには、近代性自体を支える暗黙の前提として、近代性それ自体への信憑があるのではないかと思います。これを、まず、考える必要があるだろうということなんです。しかし、近代社会の背後に

実はそれを支える信憑がある、そうした暗黙の前提があるという議論だけであれば、これもおそらく、社会学がこれまで考えてきたことから、そこまで離れてはいないのだろうと思います。たとえば、契約の前提としての儀礼という問題、つまり契約を守るという暗黙の契約がどのように可能かという、それは反復的で儀礼的なものによって担保されているといったような議論であれば、それは昔から、おそらく Émile Durkheim の頃から、ある意味あったわけです。今回の東日本大震災の経験からさらに深められることがあるとしたら、その近代社会の信憑を担保している次元として、マテリアルな次元があるのではないかという、その部分だろうと思います。近代社会を支えているのは、反復だとか儀礼だとかだけではなくて、モノがそこにあること、あるいはモノが安定的にその形を成していること、あるいは動いているということ、こうした部分に支えられている信憑の基盤というものがあるのではないかということです。そういうわけで、近代社会の信憑を支えているヒト・モノの組み合わせ、集合体を問う必要があるのではないか、その次元に切り込めるような「問い」が出せなければいけないのではないかということを、ひとつ考えていきたいわけです。これが、このワークショップを企画した最初の出発点としてあるわけですね。

インフラストラクチュアの政治のアクチュアリティ

では、なぜ今、こうした「問い」を出すことが必要なのか、そのアクチュアリティはどこにあるのか、というところに話を進めたいと思います。

東日本大震災が発生してより、この間、近代社会の信憑を支えるヒト・モノのあり方をめぐって、さまざまな力のせめぎあいが起きているように思います。これを、この報告では一言で、インフラストラクチュアの政治と称しておきます。このインフラストラクチュアの政治というものを、仮に理論的な対象として設定したとしたら、何か見えてくるものがあるのではないかと。特に、東日本大震災以降の日本社会の「転換」というか、変化の部分に迫る視角として、今、かなり切迫性をもっている見方ではないかと考えているわけです。「転換」というところに括弧がついているのは、もちろん震災研究がこれまでも指摘してきたように、震災によって全てが新しく変わったわけではなくて、むしろ今まであったものが震災を機に加速したり浮上したりしてきているということがありますので、切断面だけが全てではないということへの留保で、括弧をつけています。

このインフラストラクチュアの政治について、今あらためて問うことの意味を考えるにあたって、東日本大震災の前に、このような日常性の切断がいつ起きたのかを振り返ってみたいと思います。海外に眼を向けると 9.11 などいろいろありますが、日本社会に限定するならば、たとえば阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件が起きたのが 1995 年で、直近の経験としては、やはりこれが深刻なもととしてあったように思います。その後の日本社会で何が起きてきたかという、よく指摘されるとおり、いわゆる新自由主義的な動きが一気に席卷していくということがあったわけです。こうした動きが、なぜあれほどまでに滑らかに受け入れられていったのか、そこにはどのような経験的な土台があったのかということを考えると、やはり、「本当に危機的な状況に直面している」だから「とにかくこのままではまずい」ということを、多くの人が実感するような、そういった出来事があったのではないかと思うわけです。では仮に、東日本大震災で経験された日常性の切断が、何かそういった機能をこれから果たしていくのだとしたら、この後いったい何が来るのか。こういった問題を考える必要があるし、その動きが受容される現実的な土台としてこの切断の経験が作用していく可能性について、考えなければいけないと思うわけです。

こうした問題を考えるにあたって、インフラストラクチャーの政治というものは、視角として結構有効なのではないかと思っています。たとえば、この5年間でどういったことが起きてきたかという、防潮堤の再建を含め、国土強靱化法のもとでいろいろなインフラ整備がもう一度進められていたり、オリンピック計画とも連動して東京の都市再編が進められたり、あるいは原発をも含めたインフラ輸出がさらに促進されていたり、機密保護法から武器輸出制限の緩和から安全保障関連法に至るまでのセキュリティ政策の変化があったり、他方で、それらに対するストリートレベルでの抗議が活発化したり、といったことがありました。こうした大きな動きを総体として捉えていくための視角として、インフラストラクチャー、あるいは近代性への信憑を掛け金にした政治というものを考えていくことができるのではないかということ、アイデアとして持っているわけです。もちろん、これは仮説的なものですので、これが何か正解だということではなくて、ひとつのたたき台として考えられないかということです。ただ、いったい、どのようにしたらそれを捉えることができ、理論的に深めていくことができるのか。あるいは、そもそも、そういったことが可能な理論などあり得るのかということ自体は、それとして考えなければいけないし、今日のテーマのひとつでもあらうとも思っています。こうした問題を考えていくときに、まず、都市研究における *assemblage* アプローチを、ひとつのたたき台にしてはどうかというのが、この報告の後半の内容になっています。

都市研究における *Assemblage* アプローチとインフラ研究

もう時間が迫っていますので、少しスピードを上げたいと思いますけれども、都市研究において近年出てきているアプローチに、*assemblage* アプローチというものがあります。日本ではまだあまり導入されていませんが、海外ではここ十数年くらい議論されてきたものです。どういふものかといいますと、Bruno Latour や Michel Callon らによる Actor Network Theory を都市研究に応用していくという発想から出てきたもので、都市というものを、都市的なものを構成している要素の集合体として、*urban assemblage* として、捉え直していくというアプローチで、既にいくつか本²も出ています。こうした観点からの研究のなかに、Stephan Graham らのインフラストラクチャー研究³もあるわけですが、彼らの研究によると、都市の日常性はインフラストラクチャーによって支えられているけれども、それは普段は不可視化されているのだというわけです。しかしそれは、災害とかテロとか、あるいは戦争といった契機によって、可視化されていく。そういったところに注目することで、つまり、インフラストラクチャーから逆に都市とか日常の成り立ちに迫っていくことができるという、そういうアプローチが提唱されています。これが現在、「インフラ論的転回」といった言い方で、都市研究のなかでも市民権を得始めているところがあります。都市はもともとインフラストラクチャーの塊ですから、都市研究においてこうしたアプローチが出てくるのは理由のあることであろうと思いますが、これが、今回我々が考えていきたいインフラストラクチャーの政治に迫っていくための最初の一步として、有効なのではないかと考えているわけです。

² Farías, Ignacio and Thomas Bender eds., 2009, *Urban Assemblages: How Actor-Network Theory Changes Urban Studies*, Abingdon: Routledge; McFarlane, Colin, 2011b, *Learning the City: Knowledge and Translocal Assemblage*, Chichester: Wiley-Blackwell.

³ Graham, Stephen and Simon Marvin, 2001, *Splintering Urbanism: Networked Infrastructures, Technological Mobilities and the Urban Condition*, Abingdon: Routledge; Graham, Stephen, 2010, "When Infrastructures Fail", Stephan Graham ed., *Disrupted Cities: When Infrastructure Fails*, New York: Routledge, 1-26.

こうしたアプローチに対しては、もちろん、これまでの都市研究から、たとえば政治経済学的アプローチから批判があるわけで、そうした論文⁴なども既にいくつかあります。ですので、それをふまえたうえで、先ほど申し上げたようなインフラストラクチャの政治、社会の近代性への信憑を掛け金とした政治の分析に、この *assemblage* アプローチをいかに接続していくことができるのかというのが、ひとつの課題になってくると思っています。そして、こうした課題に取り組むうえでは、*assemblage* アプローチの発想を、都市というもののあり方を左右するような力の分析へと、いかに結びつけていけるのかというところが、おそらく鍵になるのではないかと考えています。

では、都市というもののあり方を決定する力について、*assemblage* アプローチがどのように考えているのかというと、そこでは様々な構成要素からなる集合体として都市なるものを捉えますので、新たな要素が出現したり、そのことが識別されたりすることを起点として、*urban assemblage* の組み替えが連鎖的に引き起こされていくと見るわけです。つまり、この場合、その組み換えがどう起こるのかというところに、事態を変化させていく力が所在しているということになるのだらうと思います。ただ、あらためて考え直してみると、この組み換えを、*assemblage* アプローチで想定されているほどに偶発的なものとして考えてよいのかといえ、おそらくそうではないだらうと。しかし、かといって、これまでの政治経済学的なアプローチで前提されていたように、初期条件としての構成要素の配分というか、政治経済的な構造によって、組み換えの結果が完全に規定されるのかというと、おそらくそうでもないわけで、実際は、その間にあるだらうと思われるわけです。このとき、構成要素の組み換えを水路付けていくような力がいったいどのように作動していくのかということを、*urban assemblage* のなかに分け入って見ていくということが、都市のあり方を左右する力の分析へと *assemblage* アプローチを接続するうえで、おそらく重要になるのだらうと考えています。

このように考えると、*urban assemblage* に何が新しい構成要素として加わったのかとか、新しい構成要素がいかなる変化を引き起こしているのかということについて、*urban assemblage* 内在的に診断したり識別したりすることが可能な構成要素が、理論的にはクリティカルな位置を占めるのではないかということ 아이디어としては持っています。その点で、たとえばインフラストラクチャに関するいろいろな専門知識などは、*urban assemblage* を構成する要素のなかでも、特殊な位置を占めるのではないかということを思うわけです。こういった部分に注目して分析していくことが、*assemblage* アプローチの発想を、都市のあり方を左右する力の分析に結び付けていくやり方として、ありうるのではないかということ、今のところは考えています。

おわりに

これ以上続けると時間をオーバーしますので、報告はいったんここで止めまして、最後に、このワークショップの成り立ち自体について、来場して下さった方々に向けて、少しご説明申し上げたいと思います。今ここに座っているメンバー、特に報告者につきましては、今日に至るまでに何回か会って議論を重ねてきたメンバーでもあります。「社会と基盤」研究会は、2011年にスタートしましたが、その活動のなかで、インフラストラクチャに関する理

⁴ Brenner, Neil, David J. Madden and David Wachsmuth, 2012, "Assemblage, Actor-Networks and the Challenges of Critical Urban Theory," Neil Brenner, Peter Marcuse and Margit Mayer eds., *Cities for People, Not for Profit: Critical Urban Theory and the Right to the City*, Abingdon: Routledge, 117-137; Storper, Michael and Allen Scott, 2016, "Current Debates in Urban Theory: A Critical Assessment," *Urban Studies*, 53(6): 1114-1136.

論的な検討を重ねて参りました。その中間的な議論の場として、2013 年から 2014 年にかけて一橋大学においてワークショップを開催しました。そして、そのときのメンバーが中心となって、「社会と基盤」研究会の英文ジャーナルである *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* の No. 6 において、**Infrastructure Politics** という特集企画に取り組んできたという経緯があります。

この特集企画には、いくつか大きな切り口がありますが、そのひとつが、マテリアルと社会的なものの接続をどう考えるのか、あるいは、そこで統治性の問題をどう考えるのかという点です。今日の報告のなかでは、歴史社会学がご専門ですけれども、ガラスについての研究をしておられる西川純司さんのご報告が、その部分に一番関連が深いものと思います。もちろん、インフラストラクチャーをめぐる政治や統治の問題は、以前から都市研究のなかでも深められてきたということがあります。その点については、今日は岩舘豊さんが、西川さんのご報告を受ける形で、特に **Manuel Castells** の議論を参照しながらご報告をされると思います。都市社会学者と、ここではご紹介しておきたいと思います。

もうひとつの切り口は、さきほど専門知識への着目が鍵になるのではないかなというようにことを私の報告の最後の方で申し上げましたけれども、これとも関連しています。東日本大震災のような危機的な状況のもとでは、今いったい何が起きているのかを定義したり識別したりする知識は大きな力を持っていたように思いますし、こうした機能をこれまで意味独占的に担ってきた科学的な知識は、とりわけ特権的な位置を占めてきたわけです。しかし、こういった知のあり方自体が、いろいろな歪みだとか問題を持っているということについて、*DIS* のなかでは、森元斎さんが、哲学がご専門ですけれども、**Alfred North Whitehead** に依拠しながら議論を展開してくださっています。

次に、森啓輔さんですけれども、沖縄研究、とりわけ基地の問題を専門にしておられます。東日本大震災のときには、救助のために自衛隊が大展開する景色というものが現れたことは、ご記憶の方も多いと思います。インフラストラクチャーというものは、近代社会のインフラストラクチャーでもあるけれど、同時に、国民国家のインフラストラクチャーでもあるわけです。近代社会のインフラストラクチャーが本当に危機に瀕したときには、軍事的なものが一気に姿を現してくる、国家のむき出しの力が現れてくるということを、我々は眼にしてきたわけですが、こうした観点からインフラストラクチャーをどう考えるのかということについて、今日は森啓輔さんにご報告を頂きたいと思っています。

また本日は、コメンテーターとして、都市社会学・地域社会学を専門とされている三浦倫平さんと、人類学がご専門の難波美芸さんにもお越しいただいています。今回の *DIS* の特集企画を出発点としながら、お二人からのコメントをいただきまして、さらにその先へと議論を深めていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

少し時間をオーバーしてしまいましたけれども、これで導入の報告を終わらせていただいて、このまま西川さんの基調報告と岩舘さんの報告に移りたいと思います。

統治性研究はインフラにいかに応用できるか？

西川 純司

はじめに

それでは発表をさせていただきます。神戸松蔭女子学院大学の西川と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

先ほどちょっと紹介していただいたんですけども、もともと私は、今日の議題に直接関係する Michel Foucault を研究している Foucault の専門家では、全然ないんです。もともとは歴史社会学の分野から、簡単にいうと、窓ガラスっていうのがどういうふうにして近代の日本に受容されていったのか、モノに着目しながら社会の編成をみていくっていう、そういう研究をしています。窓ガラスっていうものを考えることは、当然そこから何が入ってくるのかということとも関連してまして、特に、日光というのが近代日本においては重要な要素であって、とりわけ公衆衛生上重要な要素であったというところから、たとえば水のようなものとして日光を捉えられないかと。つまり、日光というのが、街のなかにどういうふうに取り入れられていって、普及していった、家のなかに取り入れられていくのか。そういうインフラを通して日光というものを考えられないかというところから、インフラに興味を持っていたというところがあります。そのなかでも、今日の発表の内容でもありますように、Foucault による、あるいは Foucault を引き継いだ人たちによる統治性研究というアプローチが、ひとつ有効ではないかということで、今日はその内容について発表させていただきます。

本報告の目的

今日の内容自体は、以前発表させてもらった、あるいは *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* No. 6 の方に書いたもの¹をメインにしておりますが、一部ちょっと変更しているところもあります。統治性の観点からインフラストラクチャーにアプローチすることの有効性を明らかにする、考えてみるというのが、この報告の目的です。先に結論めいたことを言っておくと、Foucault、あるいは Foucault を引き継いだ人たちがやっている統治性の議論には、とりわけ非人間、Foucault 自身はこういう言葉は使っていないんですけども、いわゆる人間ではないモノとか、そうした部分を分析できるような射程が実は含まれていたんじゃないかということを、明らかにしたいと思います。Foucault というと、言説分析であるとか、あるいは表象の分析の人っていうところがどうしても大きいと思うんですけども、その著作を読んでいくと、実は、ちゃんとモノについてしっかりと考えているところがあるので、そこを抉り出していこうと。それをどういうふうに活かすことができるか、あるいは、どこに限界があるかというのを、今日はちょっと見ていこうと思います。

¹ Nishikawa, Junji, 2017, "Governmentality and Materiality: A New Approach to the City," *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 12-19.

もうひとつ付け加えて言っておくと、先ほどの植田さんの話にもありましたけれども、日常生活をある物質が支えていく、インフラなりが支えていくというのは、普段は見えなくても、たとえば災害であるとか、何か事故が起こったときに、今までこういうものに支えられていたんだっていうのが、初めて目に見えてくるわけです。けれども、それ以外の方法として、もうひとつ、歴史的に見るという方法論もあるのかなと思っています。今は当たり前だと思っているインフラの形が、歴史的にはある程度偶然によって作られてきたものなんじゃないかと。つまり、そういう歴史的なアプローチも可能じゃないかというところがありまして、そのあたりも実は、Foucault がやってきた歴史研究とも接点があるだろうということで見えていただければと思います。

今日の内容ですけれども、最初に、最近海外で蓄積されている統治性研究をいくつか簡単にレビューしたあとで、Foucault 自身の議論のなかに分け入って、とりわけ環境概念といったものを取り出してきてみようかというのが、報告の見通しということになります。

国内における統治性研究をめぐる動向

ちょっと内容に入る前に、先ほどもありました 2013-2014 年あたりの発表から今回の原稿を書いていく間に、統治性研究っていうのは海外ではどんどん進んでいて、もはや私が書いたものは古くなっているんじゃないかということが、実はあります。それに関連して、たとえば国内の統治性研究でどういうことが起こっているかという、Nikolas Rose という、Foucault の研究をしていた非常に有名な人がいるんですけども、その人が出した本の翻訳が出ています。

『生そのものの政治学』²であるとか、あと、『魂を統治する』³という本が翻訳されました。これが、ここ2年くらいの動きですね。もうひとつ、これも統治性研究で、海外では教科書的に使われるような本だとされている、Williams Walters という人の『統治性』⁴という本、これも今年7月に翻訳されました。こういうことを考えていくと、今までは、統治性ってどういうものだったっていうのを、特に物質性みたいなものと関連付けて見ていくときに、国内ではなかなか参照するものがなかったんですけども、実はちょっと状況は変わりつつあって、もう十分知ることができるんじゃないかというところがあります。もうひとつ、これは国内じゃなくて海外で、今日の報告のなかでも出てきますけれども、Thomas Lemke という人が2015年に書いている論文⁵がありまして、それも今回の原稿とかなり似てしまった部分があるので、ちょっとまずいなというところがあります。いずれにせよ、この翻訳であるとか、そのなかで触れられていない部分というのも当然あるわけですし、そこを見ていきたいと思っています。ちょっと前置きが長くなりましたが、本論に入っていきたいと思っています。

² Rose, Nikolas, 2006, *The Politics of Life Itself: Biomedicine, Power, and Subjectivity in the Twenty-First Century*, Oxford: Princeton University Press. (=2014, 檜垣立哉監訳『生そのものの政治学——二十一世紀の生物医学、権力、主体性』法政大学出版局.)

³ Rose, Nikolas, [1989]1999, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*, second edition, London: Free Association Books. (=2016, 堀内進之介・神代健彦監訳『魂を統治する——私的な自己の形成』以文社.)

⁴ Walters, Williams, 2012, *Governmentality: Critical Encounters*, London: Routledge. (=2016, 阿部潔・清水知子・成実弘至・小笠原博毅訳『統治性——フーコーをめぐる批判的な出会い』月曜社.)

⁵ Lemke, Thomas, 2015, "New Materialisms: Foucault and the 'Government of Things'," *Theory, Culture & Society*, 32(4): 3-25.

統治性研究とは

まず最初に、統治性研究といっても、いったい何のことだということがあるかと思いますが、簡単に確認をしていきましょう。統治性、いわゆる *governmentality* といわれるものですが、これは Foucault によって 1977 年から 1979 年にかけて考察されたひとつの概念でして、とりわけ 1990 年代以降の英米圏で、Foucault の後継者によって、より大きな展開をみせているひとつのアプローチであります。たとえば、Nikolas Rose や Mitchell Dean らが有名ですね。ただ、狭い範囲に限らず、いろんな学問分野に既に取り入れられていて、社会科学はもちろんですが、政治学とか法学とか地理学とか、いろいろな分野でこの統治性というアプローチがとられているので、それも含めるとかなり膨大な量の蓄積が海外ではなされています。

では、統治性の分析っていったいどういうことだということを次に書いておきました。これは本当に一番一般的というか、抽象的にとった定義なんですけれども、「ある行為が他者の行為可能性の領域を構造化する手段・方法」、それを権力ととるわけですが、その権力の行使を分析していく、それが統治性の分析であると一般的には言われています。もちろん一般的な意味っていうものに触れてはいるんですけれども、Foucault 自身は特に近代国家の統治術みたいなものをずっと考えていくわけですね。とりわけ、自由主義がとっている統治術みたいなものを分析しているのが、Foucault 自身ということになります。

英国における統治性研究

先ほども言ったように、統治性研究自体は、Foucault の後継者によって、かなりいろいろ進展しています。いくつか著名な人はいるんですけども、ここでは、Nikolas Rose という人がどうしているのかというのを簡単に紹介しておきます。Rose はこういうふうに統治を定義しています。基本的には、さきほど言ったものと同じですが、「振る舞いの導き」、*conduct of conduct* といわれるものですが、すなわち「ある目的に向かって他者の行動へと働きかけるプログラムであり戦略であり技術」、それが統治であると定義をしています。ある人の振る舞いをどういうふうに導いていくのかという細かな知識、あるいは技術というのを分析していくわけですが、そのなかで Rose が着目している点でより特異性があるのは、都市、あるいは都市のインフラに着目している点かなと思います。具体的にちょっと読むと、近代の支配システムは、「国家と非国家的権威」、あるいは専門家とかですかね、そして「インフラ権力」って彼は使っているんですけども、いわゆるインフラが持っている力ですね、それと「権力の諸ネットワーク、諸機関の活動」、こういったいろいろな要素によって成り立っている。それらに依拠して、実は近代の支配システムというのが作られていったというのが、彼の言っていること、あるいは明らかにしようとしていることです。なので、決して国家だけではなくて、いろいろなアクター、あるいはモノ自体が、何かしらの権力作用を持っているんじゃないかというのが、特徴的なところですかね。それに則って、彼自身はすごく具体的な歴史分析をしていくわけですけども、そのなかで、18-19 世紀あたりのイギリスの統治性のあり方を分析していて、都市インフラに対する介入が、いわゆる自由な、リベラルな社会の可能性条件を構成していったんじゃないかということを、具体的に明らかにしていきました。ここで彼が言っているのは、「自由を通した統治」って書いていますけれども、決して権力が直接的に何か介入していくわけではなくて、一見その社会はリベラルで自由主義っぽく見えるんだけど、実は物質、あるいはインフラなどを通してうまく調節されているんだということを明らかにしたのが、彼の研究です。

それ以外にも、Thomas Osborne という人とかですね。やはり 19 世紀のイギリスの公衆衛生に着目しながら、狭い意味での医学的な実践だけではなくて、都市の存続の条件である下水と

か排水の調整をすることによって、実は都市の公衆衛生っていうのが保たれていくんだと。つまり、インフラへの介入があったことで、社会というのは成り立っていったんだというような分析を、同じように統治性にに基づきながらしていくということがあります。

統治性研究の進展と課題

こういったものを挙げていったらきりがないので、ちょっとこの辺でやめますけれども、このように、国外の統治性研究においては、実は Foucault の議論に基づいたインフラに関する研究というのは、すごく蓄積されています。その特徴をもう一度確認しておくと、都市の統治における物質性、つまりインフラの重要性や役割を強調しているということです。しかし、国内においては、Foucault が物質性とかインフラについてどういうふうに言っていたんだということについて、実はあまり紹介がなされていないんじゃないかというのが、私が思ったことです。だからそれをやろうと思ったんですけど、さっきも言ったように、最近はやっとずつそれがなされているので、このあたりはまたひとつ、新しいことをしていかなければ駄目かなというのがあります。

先ほども言ったように、今日の目的というか、私が書いたものの目的としては、Foucault の議論それ自体に、実は、物質性の萌芽というか、そういうものを分析するための萌芽っていうのがあったんじゃないかというのを見たいということで、以降では、Foucault に限定して話をしていこうと思います。

生権力、人口、安全メカニズム、公衆衛生

Foucault の議論を読まれている方からすると当たり前だけれども、あまり触れたことがない方からすると、ちょっととっつきにくいところがあるかと思いますので、大まかに、本当に簡単な定義をしておきましょう。

Foucault は、18 世紀半ば以降の西欧社会における権力のメカニズムを、彼の有名な言葉だけれども、生権力というもので分析をしようとしていました。その生権力というのは何かというと、とりあえずここでは、生物としての人間の群れを調整・管理する権力だとしておきます。その生権力はいったい何をターゲットにしているのかというと、それは統計学的に把握される人口といわれる概念だということに特徴があります。この人口というのは、たとえば、健康の水準であるとか、寿命であるとか、あるいは死亡率など、統計学的に把握される特徴によって認識されるある対象で、生権力というのは、そこを目指していくものだと考えています。さらに進めていくと、人口という固有の領域がつくられるわけですが、それが、安全メカニズムといわれるものを通して調整され管理されていくんだというのが彼の議論でして、その安全のメカニズム、つまり統治の術なんですけれども、その具体的な表れのひとつが、たとえば公衆衛生だったりします。なので、公衆衛生という安全メカニズムを通じて人口に介入していった調整・管理していくのが生権力であるというのが、Foucault の議論の組み立てです。生権力といっても、実は、言っている箇所によってちょっと定義が変わったりしているので、必ずしも完璧な定義だとかそういうつもりは全然ないんですけども、ひとまず大まかに、そういうことは言うことができるだろうということです。

これが一般的な理解というか、広く知られているようなところなんですけれども、しかし、この人口概念について、Foucault はもうちょっと複雑なことを言っていたんじゃないかというのが私の議論のポイントでして、以降で、それをちょっと見ていきます。

「人口」概念再考

Foucault は、あるテキスト⁶⁾において、こういうことを言っています。17 世紀から 18 世紀にかけてのポリスとは、「社会集合体」を管理する手段、あるいは統治技法 (Foucault 1979=2001: 11) であるという話を、とりわけ、健康政策の話をするときにもってきます。ポイントとしては、社会集合体って何だってことなんですけど、ここで言われている社会集合体について、こういうふうに彼は言っています。「複雑で多様な物質性 (matérialité) であって、それは、個人の『体』を越えて、彼らの生活を保証し、その活動の枠組みや結果を構成し、移動や交換も可能にするような、物質的要素全体を含んでいる」(Foucault 1979=2001: 11) と書いていて、これが社会集合体だというわけです。もう一度言い換えているのが次のところですけども、彼がいうポリスという歴史的に出てきた概念は、「社会集合体の肉体的要素を引き受ける、いわば、この市民社会の物質性をである」(Foucault 1979=2001: 11) という文章が出てきます。ここで言っている肉体的っていうのは、物理的っていう意味も含まれていて、ここに出てくる市民社会の物質性、物質的な側面をである、と考えることができるだろうと思います。この市民社会の物質性という概念に、私はちょっと着目していて、いろいろ考えられるなと思っているんですけど、実はこのテキスト以外では今のところ見てないです。ここでたまたま触れただけなのか、こういう言葉を使っただけなのか、ちょっと分からないですけども、しかし、実は重要な概念じゃないかなと思っています。特に物質性というところは重要なかなと思っていますが、続けていきましょう。そして、話はずっと続いていくんですけど、「この物質性」、つまり市民社会の「物質性の中心にある要素が現れてくるが、その要素の重要性は、17 世紀、18 世紀において常に強化されて高まっていく。それは人口である」(Foucault 1979=2001: 11) というふうに、ここで「人口」という言葉が出てきています。こういうことを読み解いていくと、実は、「人口」という概念は、単に統計学的に把握された集合っていうことよりも、より正確に言うのであれば、物質的な要素の総体、社会集合体って言っているわけですけども、その社会集合体のなかにおいて分節されるひとつの形象という意味じゃないか、figure っていうことじゃないかということです。つまり、分節される形象のあり得るひとつが「人口」というものだということです。これは結構重要なところかなと思います。

「環境」概念

これだけだと、ちょっとよく分からないと思いますので、もうちょっとだけ、Foucault が繰り返してくれているところがあって、それがどこかというところ、次のところです。1977-1978 年講義の『安全・領土・人口』⁷⁾の初回のなかで、やはり安全メカニズムというものの説明をしているんですけども、そこで今度は「環境へと向かう政治技術」という話をしています。これが公衆衛生なんですけれども、ちょっとここをもう一度見ていきましょう。ここで、「環境へと向かう政治技術」って言うときの「環境」っていうことがポイントになってきまして、milieu という言葉を充てているんですけども、これもやはり、Foucault は次のように言ってくれてい

⁶⁾ Foucault, Michel, 1979, “La politique de la sante au 18e siecle,” *Les machines a guerir. Aux origines de l'hôpital moderne*, Bruxelles, Pierre Mardaga, coll. « Architecture-Archives », 7-18. (=2001, 中島ひかる訳「一八世紀における健康政策」小林康夫他編『ミシェル・フーコー思考集成 8 政治／友愛』筑摩書房, 6-22.)

⁷⁾ Foucault, Michel, 2004, *Sécurité, territoire, population: Cours au Collège de France (1977-1978)*, Paris: Gallimard & Seuil. (=2007, 高桑和巳訳『安全・領土・人口——コレージュ・ド・フランス講義一九七七-一九七八年度』筑摩書房.)

ます。「環境とは何か。ある物体が他の物体に距離をおいて及ぼす影響を説明するために必要なものです。つまりそれはある作用の流通の指示体・境位です。つまり、この環境という概念において問題となっているのは流通と因果性という問題です」(Foucault 2004=2007: 25) と彼は言っています。簡単に言うと、「環境」という概念がこの時代に出てきたということを、ここで言っているわけです。「環境」というのはもともとは物理学の用語で、離れた物体同士が影響しあうことを説明するために出てきた物理学の概念が、この時代に初めて生物学的に応用されるようになった。つまり、生物学のなかでも、この「環境」という概念が出てくるようになったということを書いているわけです。距離を置いて影響を及ぼすというのは、英語だと *action at a distance* が充てられているわけですが、これは後々Rose が「遠隔統治」という言葉で呼んでいるものと一緒です。ただ、Rose は、Latour からもってきているらしいので、ちょっとその関係は微妙ですが、同じ言葉ですね。遠隔の統治というのと近いです。

もうひとつ注ですが、そのなかで出てきた「環境」とっていったい何かって言うところですが、「ある作用の指示体・境位です」と書いてあるんです。これもちょっと、日本語だといまいちよくわからないんですけど、英語では *medium* だとして書いてあります。つまりメディアだと、媒体だと書いてくれているわけですね。

もう一度まとめると、「環境」とは、単なる人工物とか、いわゆる我々が普通の言葉で言っている環境という自然環境ではなくて、離れたもの同士がある影響を及ぼすことに媒介の役割を果たしているものが「環境」だということになります。この概念が出てくることによって影響関係を記述できるようになったというのがここでのポイントでして、それを具体的にどういうふうに考えているかという、18 世紀の建築家や都市計画家は、この概念に見合った図式のなかで、つまり環境概念に基づいて都市空間に働きかけ整備するようになったとされていると。具体的にはどういうことかという、「環境とは、河川・沼・丘といった自然的な所与の総体」だけでなく「個人や家の密集といった人工的な所与の総体です。環境とは、そこに住まうすべての者たちに関わる一群の効果」(Foucault 2004=2007: 26) であったとしています。つまり、「環境」に働きかけることによってそこに住まう者たちに何かしら影響をあたえてくれるもの、それが「環境」だということになります。

ということで、こうして「環境」を通して働く安全メカニズム、直接的にダイレクトに身体に関わるんじゃなくて、あるクッションを置いて遠隔統治をするかたちで働く安全メカニズムというのが目指しているのは、いわゆる法権力の主体、つまり主権権力の対象でもなくて、あるいは規律的身体としての諸個人でもなく、つまり規律権力の対象でもなくて、それは「人口」だと。で、「人口」とってというのは何かって言う、「自らが身をおく物質性に根底的・本質的・生物学的に結びつくという形でのみ存在するような個人の集合」(Foucault 2004=2007: 26) で、そこに働きかけていくというのが、この「環境」概念の重要性であると言っています。なので、ここで重要なのは、先ほども出てきた「人口」という概念ですが、あくまでもそれは物質性に根付いているということがポイントかなと思います。だから、物質性に結びつく限りでの個人の集合のことだということですね。なので、「環境」に働きかけることによってその「人口」を管理できるし調節できるんだと。その「環境」とってというのは、その周りにあるような自然的所与であり、あるいは家とか個人だということになっています。ちょっと抽象的で難しいところもあるんですけど、そう考えていくと、実は、「人口」概念というのは、端的に統計的に把握されたデータであるとかって言う言い方はとてもできないということですね。あくまでも、物質性のなかから浮かび上がってくるひとつのかたちである、ということですね。その辺がポイントになってくるかなと思います。

統治性研究の有効性

じゃあ、こうした Foucault 自身の議論から辿っていくと、いったいどういうことが分かってくるのかというのが最後のところですよ。とりわけ、統治性研究の有効性というところを見ていきたいと思います。

最初に、理論的含意ですが、統治性とは、もう一度言うと、統治の合理性や戦略・技術といったものを調査し分析し、歴史化するための「工具箱」だとよく言われます。つまり統治性というのは、それを分析するための工具箱ですよ。今回の議論を見ていくと、Foucault というのは、非人間、つまり自然とか人工物に対して、実は政治的にすごく重要な役割を与えていたということが見えてきます。もう一度言うと、重要なことは、人間と非人間、つまり今回見た範囲でいくと、「人口」とその「環境」を、それぞれ自立した実体として捉えるのではなくて、それらが、いわゆる異種混交的な集合体、つまり、ここでの言葉で言うと、物質性のなかで、それぞれが分節化されていく、そういう歴史的な条件というのは彼は見ようとしているということになってきます。つまり、そういうふうに見ていくと、これは Foucault のこれまでの議論とすごく共通していますが、系譜学的な企てでもあるというわけです。つまり、歴史を超えたある実体とか、環境とか、インフラっていうものを定義するんじゃなくて、あくまでも歴史のなかで、それがどういうふうにして分節化されていったのか、何が自然とされて何が環境と言われて、何がそのターゲットになっていったのかというのは、きわめて、その実践のなかに根付いていることだということになります。

したがって、ここから私たちは、どういうことを引き出すことができるかということ、いつ、どこで、どのような条件のもとで、「社会」や「自然」、「インフラ」が現在のようなかたちで存在するようになったのか、という問いをまず立て、それを実証的に調査・記述する方法として、統治性というものを考えていくことができるんじゃないだろうかということです。これが最初に言ったように、都市生活のある種の自明性というか、物質的なものに支えられているって言ったとき、それを具体的にどう見ていくかというときに使える、ひとつの道具じゃないかなと思います。さらに、もうちょっと踏み込んでみると、「人間／非人間」とか、あるいは「社会／自然」といった区別を予め前提とする議論、これは従来の議論がとっているところが多いんですけども、そうした議論の枠組みとは違う観点から、実はインフラというものに迫れるんじゃないだろうかというのが、こうした統治性の議論から見えてくるものだと思います。

フーコーを超えて？

最後、ちょっと付け足したいものなんですけれども、当然、だからといって、Foucault の議論でなんでもかんでも分析できるっていうわけではおそらくなくて、既にいくつか批判もされていますよっていうのが、最後に書いてあることです。とりわけよく言われるのが、次のことです。

Foucault は、いわゆる非人間にエージェンシーの概念を拡張しているか、つまり、モノのアクター性みたいなものを認めているのかということなんですけれども、おそらくそれはないだろうというのが、私の今のところの考えです。あくまで、「人口」の主体性を議論しているのであって、モノのアクター性それ自体を積極的にとりあげているとまでは言えないように思います。つまり、非人間、自然とか人工物に、実は目を向けているんだという側面はあるけれども、しかし、それはあくまでも「人口」というものが出てくる、その可能性条件としてのみ物質を捉えているというふうに見えてくる。そう考えてくると、Bruno Latour や Jane Bennett の議論、つ

まりこれらは、いわゆる人間じゃないモノに対して、力を持っているんだというのを積極的に認めていく立場だと思うんですけども、Latour や Bennett と違うところは、やっぱりあるんじゃないかなと。これらのどっちがいいかっていうのは、いろいろ考える必要があるかなと思います。つまり、モノに力があるって言ってしまっているのは、なかなか議論が必要かなというところがあるので。

ただし、Foucault の後を継いでいる人たちからすると、次のようなことも言われます。「もし権力が実際にいたるところに拡散し広範にわたるものであり、振る舞いを導くことが分析の原則として重要であるならば、これら統治性の研究がほかの場所から」、つまり、国家ではないということなんですけれども、国家ではない場所から、「ほかの行為者^{アクター}から始めてはいけない理由はない」(Walters 2012=2016: 280)。その分析の出発点は、政府機関ではなくてもいい、つまりモノから始めてもいいんじゃないかということを、言っている人は多いです。あと、最初に見た統治性研究の最近の例のいくつかは、Foucault の影響もあるんだけど、どちらかというと Deleuze=Guattari の影響の方が強くて、そのなかではやはり、非人間にもエージェンシー概念を拡張しているところがあります。ただ、これがいいのかどうかというのは、やはり議論の必要があるかなというのが、私の今のところの結論ということになります。ということで、以上で私の議論を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

介入と都市の物質性 ——東京・水道インフラ危機へ／から——

岩 舘 豊

はじめに

岩舘といいます。一橋大学の博士課程で研究をしている者です。西川さんの報告を受けて、結果的になんですけども、少しリプライする形にできたらなと思っています。

今回のワークショップの冒頭で植田さんが発表してくれたように、この研究を始めたきっかけは、東京での3.11と呼ばれる出来事の実験で、そこからこの研究に着手しました。なので、サブタイトルにあるように、インフラ危機といったものから始まっているし、最終的には、そこにもう一回戻ってくるような、そういう研究を細々としてきています。とりわけ、都市社会学というところで研究をしてきた者としては、これまでの都市社会学とか社会学が人とか集団とか組織みたいなものに着目してきたのに対して、たとえば災害のように、モノの論理というものがどんどん先行して動いていく、そうした事態みたいなものを、既存の概念とか理論的な道具立てではちょっと捉えられないなっているのを、3.11以後ずっと感じ続けています。と同時に、これまでの議論との接続性や、実証的で経験的な研究を、何らかの形で手放さずにやりたいって思っていたなかで、どういう理論的道具立てが必要なのかってところで考えてきました。では、その道具立て自体を作ると、いろいろ試行錯誤しているなかで、インフラ論的転回みたいなものが、ひとつ参考になるのではないかなということで、やってきました。ですが、いきなりインフラ論的転回の議論を導入するというよりも、今までの議論との接続を含めて考えていくと、これまでもインフラみたいなものに着目してきた研究者たちがいたわけですね。その代表的な人物が、1960年代以降、新都市社会学と呼ばれる研究分野をリードしてきたManuel Castellsという人で、集合的消費という概念が、ひとつそれにあたるだろうということです。先に述べたような問題意識のなかで、このCastellsの集合的消費概念を再検討していくことによって、インフラストラクチャの問題構制へ向かう道筋を探ることを、*Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* No. 6に書いた論文¹では課題としています。その課題だけに論点を絞れば、もう少し早く原稿があがったのではないかと今になって反省しているのですが、しかし僕は、インフラ危機といったことをできるだけ具体性の中で考えていきたいと思ってきました。そこで、今回の発表でも、3.11以後の東京における水道インフラ危機の事例を見ていきたいと思っています。

「集合的消費」の再検討

まず、集合的消費という概念について、『都市問題』²を中心にみていきたいと思っています。Castells

¹ Iwade, Yutaka, 2017, “Materiality of Intervention: A Note on the Infrastructure Question,” *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 38-48.

² Castells, Manuel, 1977, *La Question Urbaine*, Paris: Maspero. (=1984, 山田操訳『都市問題——

自身が着目していたのは消費という局面でした。資本主義的な生産様式が再生産されていくうえで重要な局面を、消費、特に集合的な消費過程が占めていることに着眼したのが、Castells でした。Castells が研究していた 1960 年代から 1970 年代にかけて、多くのマルクス主義者が生産過程を重視していたのに対して、消費に着目し、消費過程において社会関係や階級関係を再生産し表現していくうえで、重要な位置を占めているということに着目した点は、よく言われていることですが、やはり優れた点だったと思います。なおかつ、消費という過程が社会化され、何らかの形で管理がなされているところに、労働力の再生産、さらには社会関係の再生産が大きく規定されていくという点で、集合的消費という概念に着目し理論的に位置づけていきます。

Castells は、何らかの内在的な資質ではなくて、資本の利害では生産しないような財の消費のことを集合的消費というふうに定義づけています。この集合的消費が、都市において重要な位置を持っているということでしたが、この研究自体は、もう少し奥行がありました。それは、当時の国家独占資本主義段階において、この集合的消費が重要な局面であり、国家論へと接続しているところに、Castells の議論の広がりや深さがあったわけです。国家独占資本主義段階においては、独占資本自体が消費自体をどんどん合理化していき、保健・衛生、教育など、都市の集合的消費を国家機関がさまざまな形で自ら担っていく。それは、福祉国家という側面でもあるのですが、ここに都市の問題が深く現れてくると Castells は診断していく。Castells が直接念頭にいたのは住宅です。労働者向けの集合住宅を国家が積極的に供給していくことを通じて、消費を通じた労働力の再生産がなされ、そのことが当時の資本主義的な生産様式の再生産にとって決定的に重要だったのであるということを描き出した。そして、この集合的消費過程が、都市における権利要求や紛争になっていくとして、都市における運動や闘争を理論的に位置づけていった。つまり、Castells の集合的消費概念は、独占資本主義段階における資本制が再生産されていく過程を、集合的消費財の供給を通じた国家の介入から論じているわけです。集合的消費をめぐる理論的な位置づけや定式化をしながら、かつ経験的な研究を切り開いたという点で、今なお読むべき仕事として評価されているのだと思います。

新自由主義国家と「新しい介入主義」

実を言うと、僕は大学院に入ったばかりの頃にこの『都市問題』を読んだのですが、さして面白くなかったんです。さっぱり入ってこなかった。もちろん勉強不足だったことが大きかったと思うのですが、それが 3.11 後に集合的消費のことを考えるために読み直してみたら、なんだかとっても面白かったです。ぐいぐいと引き込まれました。それはなぜかという、その時代その時代のアクチュアルな問題と Castells という人が格闘した仕事であることが伝わってきて、その熱が今読んでも面白いというか、迫力があるなと思うんです。

しかし、やはり乗り越えるべき点はあるんだろうと思います。ひとつはやはり、独占資本主義段階における集合的消費がもっている理論的背景や時代的な背景にもとづく、さまざまな制約を乗り越える必要があると思います。とりわけ新自由主義段階に入った後では、おそらく国家の介入による資源配分を通じた統治や正統性の調達といったものは、少し論点がずれつつある。あるいは、もう一回ぐるっと戻ってきているのかもしれませんが、ずれつつある。もうひとつは、集合的消費とその過程の内部に立ち入った分析がない。Castells 自身、その必要があるといった記述はあるのですが、十分に展開されていない。特に、集合的消費財のモノ性に着目したときに何が見えてくるのかってことがあるんじゃないかということです。

科学的理論と分析』恒星社厚生閣。）

では、新自由主義国家における介入ってものをどう捉えるかが、ひとつポイントになってきている。このことは、「社会と基盤」研究会の前身である別の研究プロジェクトとして、今日最後にコメントしてもらう町村先生やここにいる植田さんたちと「新しい介入主義」に関する共同研究³をやってきました。それは従来のように資源分配を通じて正統性を調達するのではなくて、認証とか評価といった形で、資源分配とその決定の様式を通じて諸アクターをコントロールする、あるいは影響力を行使していくような権力のあり方みたいなものであるという議論です。こうした、一見とすると「小さい政府」と呼ばれるような形で権力・影響力は小さいかのように見えて、実は非常に強力な介入が行われているということは、David Harvey が、それ自体が新自由主義のパラドックスであると論じています。新自由主義国家というのは、一見、非介入主義であるかのようにみえて、エリートや専門家たちによる介入が行われていると指摘しています。この各行為者たちが、さまざまな公的機関・国家機関だけに限らず、認証とか評価とかいうことにさらされることによって、自己を査定し評価する主体へと変容していくことを通じて、距離を置いた形で統治が行使され影響力が行使される、そのメカニズムを「新しい介入主義」という形で捉えようとしてきました。

統治の物質性

この「新しい介入主義」みたいなものを捉えていくときに、統治性の議論が参考になってくるのだと思います。Peter Miller や Nicolas Rose たちが述べているように、単一の国家介入といったものは、単一の様式ってというのは、とりえないだろうと。さまざまな形で、さまざまなアクターが、それぞれの役割をこなしながら何らかの形で影響力が行使されていく、そのプロセスや布置連関を見ていく必要があるということで、government at distance という影響力の行使のされ方自体を議論していきました。こうした統治性研究について近年の研究をみていくと、統治性を経験的・具体的に研究していこうとすると実はなかなか難しいという議論が出ています。Vahghan Higgins の標準化研究⁴や、Ross Beveridge によるベルリンの水道民営化の研究⁵などは、ともすれば統治性研究の焦点がプログラムや言説へと偏りがちであり、あるプログラムや言説の意図や影響力が実現・行使されていくプロセスを、ある意味で楽観的に、あるいはプログラム調和的に描いていると批判しています。実際に統治の影響力が及ぼされる過程は、物質的であり偶発的であって、もう少し細かく丁寧に見る必要があります、そのときに Actor Network Theory が重要になると。そこから Higgins や Beveridge などは、統治性研究と Actor Network Theory との接続を試みていきます。

この点が、3.11 後の東京における水道インフラ危機を見ていくにあたっても、ひとつ参考になるかなと思っています。インフラを通じた国家の介入と統治の物質性とを切り離さずにみていくことができないかというところに辿りついています。そこまで辿りついたうえで、最後に残った時間で、実際にインフラが危機に陥ったときに、どのような介入があるのか。そして、そのような事象をどのように捉えていけばいいのか。こうした問いについて、具体的な事例を

³ 町村敬志編, 2011, 『評価国家の構造と動態——「新しい介入主義」分析の構想』(2009~2010 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究) 研究成果報告書), 一橋大学大学院社会学研究科。

⁴ Higgins, Vaughan and Wendy Larnier eds., 2010, *Calculating the Social: Standards and the Reconfiguration of Governing*, New York: Palgrave Macmillan.

⁵ Beveridge, Ross, 2012, *A Politics of Inevitability: The Privatisation of the Berlin Water Company, the Global City Discourse, and Governance in 1990s Berlin*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

もとの、残りの時間で少しだけご紹介したいと思います。

東日本大震災と「介入の政治」

近年、さまざまな災害や非常事態に対し、国家や公的機関なりがどのように対応し介入するかということが、正統性や秩序形成において重要なイシューとなっているということを、Andrew Lakoff という人が、その編著⁶のなかで「介入の政治」という言葉を使って述べています。その言葉をひとまず借りるとすると、東日本大震災におけるインフラ危機をめぐる「介入の政治」をどのように捉えることができるのかということが、本研究の目的となってきます。今回、僕が着目したのは、東京の水道危機という出来事です。

それまで問題なく機能することによって、都市に暮らす人々によって意識されることのあまりなかった水道というインフラが、突如として社会で意識される対象となったのが、東日本大震災後の東京でした。水道は、山に雨が降ったものが都市に届くまでに無数の機械や装置やモノなんかが絡み合いながら機能しているわけですが、これ自体が、ひとつブラックボックス化することによって、都市の日常生活っていうのは滞りなく動いているということです。たとえば、東京の都市空間の下には多くの配水管が通っています。そんなことを普段我々は意識もしないわけですが、この配水管が問題になり意識化されたのが東日本大震災です。東京の東端にある金町浄水場で基準値以上の放射性物質が検出されたことにより、金町浄水場の水はどこまで流れるのかっていうことが大きく問題となり、どこの配水がどこと繋がっているのかと意識され始めたわけです。いわば、不可視化されていた水道インフラが、災害を契機としたさまざまな介入によって可視化されていき、そして再び不可視化されていくプロセスが、東京水道インフラ危機の一側面だったと思います。

東京・水道インフラ危機への介入過程

お手元にある表1「東日本大震災・東京水道クロニクル」をご覧ください。これは東日本大震災の後、東京の水道に関して新聞やメディアなどでとりあげられた出来事を集めて時系列上に並べたものです。これは「社会と基盤」研究会で作成した『東日本大震災クロニクル 2011.3.11-2011.5.11』を元のデータとして、独自に、日本水道新聞と水道産業新聞という水道の業界紙から抽出したデータを加えたものです。それと、もう1つお配りしている図1を見てください。これは、今述べた「東日本大震災・東京水道クロニクル」から、東京の水道水から放射性物質が検出された出来事に関して、ヒトやモノや知識・言説といったものがどういうふうに見えてきたのかを図で示したものになっています。黒色がヒトとか団体・組織で、赤がモノ、青が言説や知識となっていて、分かりやすい図ではないのですが、水道インフラ危機をめぐるヒトやモノや知識が相互に関連していく様態を視覚的にとらえるために、試行錯誤的に作っているものです。

この図をどう読み解いていけるのかについては、まだ考察が十分ではないのですが、不可視化されていたネットワークが、可視化されて不安定になってバラバラになったものが、もう一回再統合されていくプロセスといったものを、この水道インフラに即して見ていきたいと思います。大きくは4つくらいのモメント（契機）によって見ていきます。まずモメント1として、モノそれ自体が可視化されていくプロセスです。水道水とか金町浄水場とか、そういったもの

⁶ Lakoff, Andrew ed., 2010, *Disaster and the Politics of Intervention*, New York: Columbia University Press.

表1 東日本大震災・東京水道クロニクル2011.3.11-2011.5.11(一部)

月	日	時	分	出来事の要約	情報源・媒体 (発行年月日)
3	11	16	15	東京都水道局によると足立区や葛飾区など23区東部を中心に計45カ所で水道管が破裂し漏水発生。	読売新聞110312
3	11			東京都、地震発生と同時に危機管理監をトップとする災害即応対策本部を設置。災害時協定を結ぶコンビニやファミリーレストランに水道水・トイレ・休憩場所の提供を要請。	朝日新聞110312
3	11			「平成23年東北地方太平洋沖地震」は、相次ぐ余震、12日の「長野県北部を震源とする地震」とに、東日本の広範囲で水道施設に甚大な被害をもたらした。北海道から徳島県まで16道県で、少なくとも140万戸が断水、日本近代水道始まって以来と言える広域災害の様相を見せ始めている。	日本水道新聞110314
3	11			厚生労働省が、協定にもとづき日本水道協会(日水協)に協力を要請。	日本水道新聞110314
3	11			厚生労働省の要請にもとづき、日本水道協会が東北、関東、中部地方の支部長都市などと連絡し、全国から約220台の給水車を確保。準備が整い次第、現地へ出発、応急給水活動を実施。	日本水道新聞110314
3	11			日本水道協会が水道救援対策本部を立ち上げ、厚生労働省健康局水道課や各支部との情報連絡、被災状況の収集を開始。	日本水道新聞110314
3	11			日本水道協会を含む6団体の先遣隊が現地調査、調整を開始。	日本水道新聞110314
3	11			日本水道協会が首相官邸へ応急給水の対応状況を伝達。	日本水道新聞110314
3	11			「東北地方太平洋沖地震」により、金町浄水場のスクレーパーが破損したが、浄水処理には影響なく処理を継続。	日本水道新聞110314
3	11			首相官邸から、日本水道協会に対し、給水を要望する現地病院などの情報にもとづき、応急給水車の行き先について考慮するよう指示。	日本水道新聞110314
3	11			町田市での停電にともなう断水が発生。	日本水道新聞110314
3	11			稲城市の向陽台給水所の緊急遮断弁作動により市内2/3で断水が発生。	日本水道新聞110314
3	11			日本水道協会工務部規格課長が仙台入り、東北地方支と日本水道協会との調整、情報収集を開始。	日本水道新聞110314
3	11			日本水道協会本部および東京都の先遣隊とともに職員が被災地へ向かう。2時、淀橋給水所前で出発式。	日本水道新聞110314
3	11			日本水道工業団体連合会は、厚労省や日本水道協会からの情報を会員へ提供開始。	日本水道新聞110314
3	11			厚生労働省が、日本水道工業団体連合会(水団連)に対し、水道施設の復旧に向けて、水道機材の提供に配慮するよう事務連絡。水団連も会員企業に同様の趣旨の文書を発送。2つの文書を察照に提示することで、緊急用車両の認定が得られるようになる。	日本水道新聞110314
3	11			全国管工事業共同組合連合会が、日水協との災害協定にもとづき、今後本格化する復旧工事に備え、会員企業に厚労省からの情報を提供するとともに、派遣体制を整えるよう会員企業に呼びかけ。	日本水道新聞110314
3	11			全国上下水道コンサルタント協会が、災害対策本部を立ち上げ情報収集を行うとともに、国土交通省の「下水道支援調査チーム」の会合に参加。	日本水道新聞110314
3	11			日本ダクタイル鉄管協会は、日水協を通じた被災事業体からの復旧資材の調達依頼について、員企業との連絡窓口として、対応状況リストを作成し日水協に報告。会員各社には在庫を問い合せ、異種管継手や伸縮可とう管、バルブ類、鉄蓋・弁きょう類の資材要望について各協会等に情報伝達。	日本水道新聞110314
3	11			塩化ビニル管・継手協会は、今後の復旧需要の拡大を見据え、会員企業に製品供給に支障がない体制を整備するよう要請。	日本水道新聞110314
3	11			配水用ポリエチレンパイプシステム協会は、被害情報の収集を行うとともに、会員企業に水道用機材の円滑な提供を依頼。	日本水道新聞110314
3	11			20の国・地域・団体から日本水道協会に対してお見舞いのメールおよび支援の申し入れ(世界水協会IWA、米国・オーストラリア・インド・台湾・中国の水道協会、ブノンベン水道公社、シアトル水道、タイ地方水道公社、南アフリカ・オーストラリア・ポルトガル・ベトナム政府)。	日本水道新聞110317
3	11			水コン協が災害対策本部を設置。	日本水道新聞110317
3	11			管路協本部に災害対策本部を設置。国交省から提供できるポンプ、管内TVカメラ、バキューム吸引車などの資機材や一斉調査要因の人数の確認があり、各支部を通じて全会員に情報提供求めた。	日本水道新聞110317
3	11			施設協が地震発生直後から連絡体制を構築し、12日より国交省からの情報を会員に伝達。	日本水道新聞110317
3	11	16		砧下浄水所で原水濁度が高まったため取水量を減少。	水道産業新聞110328
3	11	16		東京都水道局によると、浄水処理に必要な浄水薬品の購入が一時滞った。薬品業者の被災や搬入するローリー車の燃料不足のため。	水道産業新聞110328

が可視化されていくプロセス。それから、それに対応する形で、モノが再配置されていく2つ目の契機みたいなものがモメント2としてあって、もう一度、壊れたり計測されたりするものが、再配置されていくと。モメント3は、知ですね。そういったモノの布置、連関みたいなものを再定義していくさまざまな専門家や機関の動きです。放射性物質は、どれくらいの数値以下であれば安全かといった事柄について、専門家自身がさまざまな形でこの状況に介入し、言説を発していく。乳幼児だったらどれくらいの基準値なのかっていうこと自体をめぐって、さまざまな知がここに介入していくプロセスがあって、それ自体がこの状況自体を大きくコントロールしていく。最後にモメント4として、水道統治をめぐって様々な業界団体、政府機関・団体、それから労働組合等々、水道インフラの実際の運用を担う団体たちが、これまで

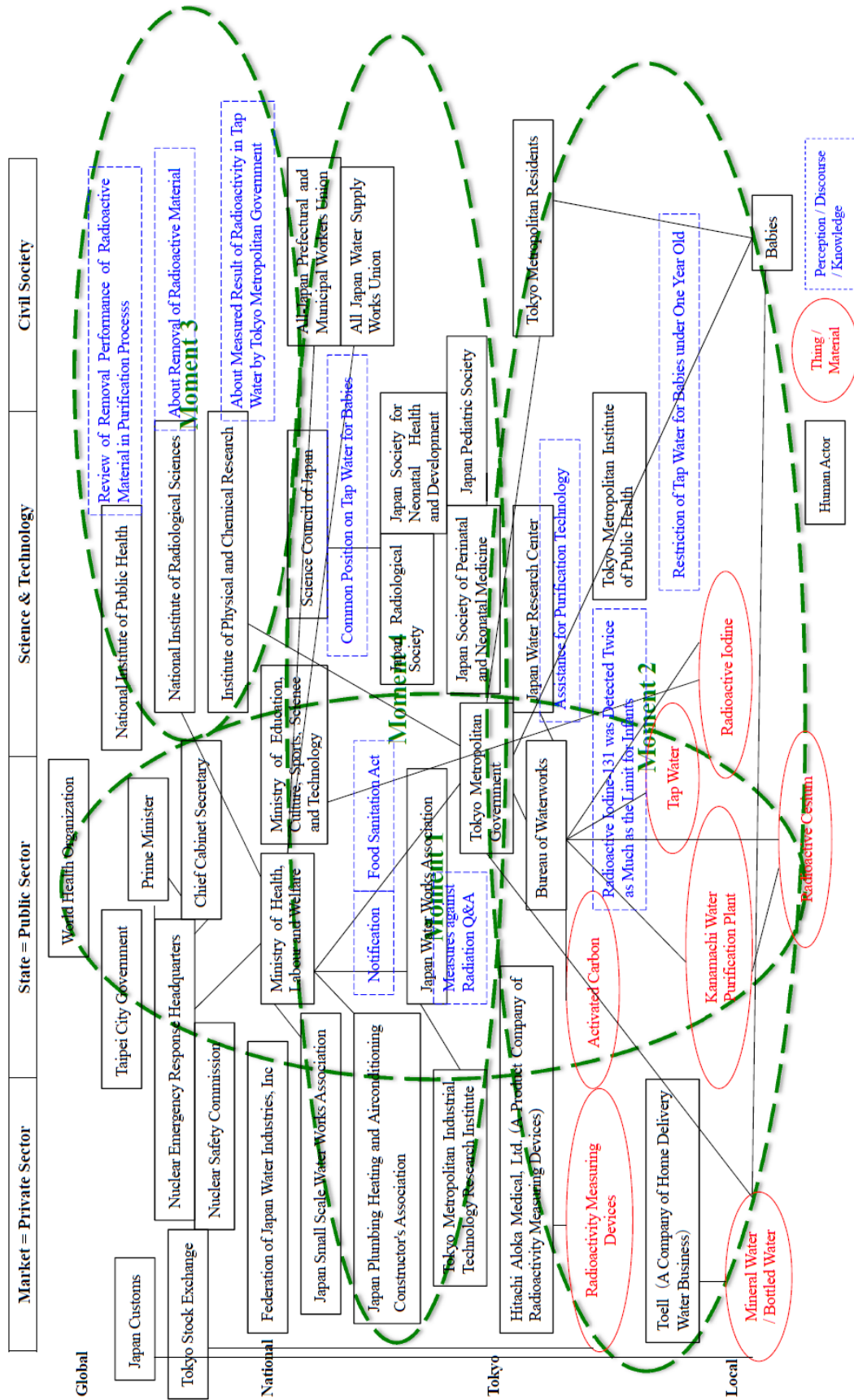


図1 東日本大震災下の東京・水道インフラ危機

と違った形で連携を組んでいく。これらのモメント1から4に至る一連のプロセスが展開することによって、不可視化されていた水道インフラのネットワークが不安定化・可視化した後、介入を通じてもう一度安定化し、不可視化されていったわけです。かなり粗い把握ですが、東京・水道インフラ危機という出来事の、ひとつの捉え方としてありうると思っています。

インフラストラクチャの政治

このように、東京の水道インフラ危機という事態に対して、さまざまな団体や専門機関が介入していく事態をみると、モノの次元、知識の次元、制度の次元が重層的に連結しながら、再安定化させていく。こうしたインフラの回復プロセスがあったわけですが、水道インフラが回復して終わりというわけではありません。地震の前、水道水の安全性に対する人々の信頼は揺るぎないものだったのが、水道水は大丈夫かという形で不安定化した。水道水は、他のインフラと比べれば復旧自体は早かったのも、東京で水道水について意識化されることは、どんどん減っていくわけです。でも、この水道インフラというネットワークが安定したからといって、もう誰も疑問を持たないかといったら、一回疑問を受けてしまったこのネットワークが、単純に元に戻るわけではない。たとえば、水道水や食品中の放射性物質測定にとり組む市民活動などが起こり、独自に計測し始めてモノを可視化させるという動きがあります。だから、インフラが回復したからといって、何も疑問に付されなくなるわけではなく、常に疑問にさらされて不安定化されていく側面がある。では、このモノ自体をどう計測するか、どう可視化させていき、それをどう社会的に定義するか、そのこと自体が、インフラストラクチャの政治をめぐるひとつの論点になっていると思います。

さらなる課題

最後に、ワークショップのテーマである「マテリアリティの政治」にひきつけて、さらなる課題を考えてみたいと思います。介入主義分析なり権力作動メカニズムの分析なりを考えたときに、マテリアリティがどういうポテンシャルをもっているのかってということだと思います。ひとつは、先に述べたかたちで、市民や運動する側からモノを可視化させていく、測っていく実践です。生活世界や労働世界、市民社会から、マテリアリティを可視化させ顕在化させていく。対抗的な「計算の中心」みたいなものは考えられないだろうかということです。

もうひとつは、モノの統治不可能性です。東京の金町浄水場で放射性物質が検出された後、金町浄水場の水がどこからどこへ流れているかってことが問題になって、水道局が「ここから先は大丈夫です」といった声明を出したりしました。しかし、事後に明らかになったのは、水道水っていうのは、水系や配水管が複雑に入り組み混ざり合っていて、実際のところはどこまで行っているのかは分からないということでした。つまり、モノっていうのは、最後のところは、ヒトの意識や合理性によってはコントロールされざる部分を含み込んでいる。完全には人間の意識とか行為に包摂され切れない部分をもっているのが、たぶんモノの大きな特徴なのだと思うんです。福島第一原子力発電所の汚染水問題が象徴的です。では、そのコントロールできないところがもつ政治性、権力性、あるいは抵抗の契機みたいなものに接続していくような学知や実践みたいなものに可能性はないか。そこにマテリアリティの政治を議論していく点があるのではないかと考えています。以上、簡単な報告にしたいと思います。ありがとうございました。

質疑応答 ①

植田：ありがとうございました。お二人のご報告をふまえて、今の時点で少し確認をしておきたいことなどがあれば、出していただければと思います。いかがでしょうか。

森（元）：なんか全然コメントとかじゃなくて申し訳ないのですが、さっきの岩舘さんの *government at distance* とか、西川さんの *action at distance* について。私の中のわずかな記憶力のせいで、Foucault 先生の記憶が、あまりないのですが、この語自体は、物理学の比喻なんですよ。だから、環境というよりも、場として理解するとすんなりわかったりするのかな、と思いました。あと、指示体・境位とかも、*medium*、媒介とかで、*action at distance* も、物理学で遠隔作用。そう呼んだ方が、なんかもっと物理的にその場所を、因果的法則関係でもってそれを見ている、みたいなふうに分かるのかなと。

植田：ありがとうございます。訳語でだいぶ印象が変わってきますね・・・

あと、これを本当にやり始めたら後半の総括討論が始まってしまうので、少し頭出しだけお願いできればと思うんですが、西川さんが、モノに主体性を見るにはいろいろと問題があって、簡単に認めるのもどうかっていうようなことを最後におっしゃっていた一方で、岩舘さんの報告の最後の方のニュアンスだと、やっぱり人がコントロールできないところにモノがあるというお話で、モノの主体性をどちらかという強くとっている、そういう印象があります。実は僕の報告でも、そこは煮え切らないままで、この数年間ぐずぐずと考えているところがありますが、今日のテーマを考えるうえで、モノの主体性をどれくらい受け止めたり引き受けるのかということは、結構大きな論点であろうと思います。後半の議論でも深めていきたいと思うんですけど、現時点で、論点として出していただければと思います。いかがでしょうか。

西川：じゃあ、ちょっと手短かにですが、これ、いまだに私自身もあまり深くは考えられていないところですけども、さっき、最後の方にちょっと言った、モノが力を持つて、モノのアクター性があるって言うってしまうのもちょっとどうなんだろうかというのがその辺でして、*Actor Network Theory* にしても、その最近の議論にしても、モノが力を持つて言うってしまったときに、逆にそこから見えてくるのは、モノが主体性を持たない方っていうか。そっちの方が、なんか私は気になる部分が正直出てきて、統治性とか *Actor Network Theory* を使ってしまうと、モノに力があるとか、モノに権力性があると言うってしまう方に入れてしまうことにはなると思うので、そうじゃない方。だから、特に歴史研究をやっていると思うのは、かつて使われたけど今はもう使われていないものとかがあって、実は、そこにこそモノ性が備わるっていうか、生々しいモノ性っていうのが出てくるのかなと。今回の災害の例でいくと、今まで使われていたものが急に機能を停止してしまったときに、今まで見えなかったものに急にモノ性が現れるっていうか、そういうところが実は重要じゃないかなと思っていて、具体的にどういうものかという、たとえば今思いついた例でいうと、廃墟とか空き家とか、ローカル鉄道の廃線とか。私がやっているところでいくとサナトリウムなんですけど、昔使われていた病院とかなん

ですけど、逆に今は打ち捨てられたもののなかにこそモノ性が宿るといえるのかなというところも見えてきていて、それをたとえば、統治性とか Actor Network Theory で分析してしまうと、その辺がもしかして見えなくなってくるのかなというところは、ちょっと思いますね。

植田：ありがとうございます。岩館さんはいかがですか。

岩館：僕も、最初は、モノのエージェンシーっていうのは面白いなと思っていて、それと見ていこうと思っていました。ただ、介入や権力といった議論を重ねたうえでモノ性に着目すると、モノっていうのには、人間によっては統治しきれない部分、意識によっては捉えきれない部分、その部分がやっぱりあるのではないかなと思うようになりました。水道水とかにしてもそうだし、うまく言えないんですけど、人間の意識の外部みたいなものが常にあり続けていて、それ自体が、人間の意識とか意図とかを超えたところで何らかの働きを発するとき、それを人間が勝手にエージェンシーと呼ぶのかなというふうに思うと、その点はやっぱり面白いかなと思っています。そして、フィールドワークの経験を思い返しても、モノとの出会いというか、モノの動きや働きはすごく興味深い対象だと思っています。なので、インフラみたいなものを見るときにも、その意味でのモノのエージェンシーに着目したいかなと思っています。なんか、人間の意図だったり、プログラムだとかっていうところと違う、場合によっては思いもよらない動きや働きをしてしまうわけですね。そこがモノ性の面白さだなと思うので、その意味におけるエージェンシーは、僕はちょっと積極的に注目していきたいと思っています。

植田：ありがとうございます。実はプログラムに変更があったんですが、時間が今ちょうどびつたりになっています。ご来場の方々には最初に申し上げるべきだったんですけども、登壇予定だった須永咲さんのご報告が、ご都合で今日はキャンセルということになりました。もうひとつ、お配りしたタイムテーブルに誤植がありまして、時間が明らかにずれてしまっていたんですけども、今、結果的にタイムテーブルどおりの時間になっています。ここでいったん休憩にさせていただいて、2時45分に再開したいと思います。

3・12以降の具体性の知恵

森 元斎

森です。「3・12以降の具体性の知恵」というタイトルで文章¹を書きました。具体的な知恵の話までは、あまり辿り着いてはいないのですが、Whitehead 哲学に即しては、それなりに書きました。ここでは書いたことを、さらっとおさらいしつつ、それと関わることや、関わってないことなどざっくばらんに、お話をしたいと思います。

今まで、Alfred North Whitehead という哲学者を研究していました。2015 年の末に、拙著²を刊行しました。もしかしたら、Whitehead に関して書いた文章は、この *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* No. 6 で最後になるかもしれませんし、そうではないかもしれません。最近、100 年前のアナキズムや戦後の思想史をお勉強しています。アナキズムについてはこの前 (2016 年の 8 月末)、スイスのアナキズム文献センターというところに行ってきた、大変充実した資料収集を行ってきました。戦後の思想については、特に福岡を中心に刊行されていた「サークル村」やその界隈を調べています。主に谷川雁さんや上野英信さんについてです。だから、ここ 100 年前のいろんな思想史と、50-60 年前の日本の思想史が、最近の関心です。自分がやっているのが哲学なのか何なのかは、もはや、謎です。

大学非常勤講師を一応やっていますが、それだけでは現金収入はほとんどないので、造園業や百姓をしています。造園業といっても、おしゃれな造園などではなく、国道沿いの植え込みの剪定だったり、公園の木を切ったり、掃除したりしています。いわゆる肉体労働です。だから、全身毛虫に刺されて、夜中痒くてのたうちまわったりしています。この前、犬鳴峠という怖い都市伝説で有名なところがあるんですが、そこでお化けを見ました。あ、嘘です。

はじめる前に

では、始めます。これまた嘘です。始めません。始める前に、ちょっといい言葉を、紹介したいと思います。9 月 13 日に、皆さん、ご存知の方がここには多いと思うのですが、道場親信さんという大変尊敬している方がお亡くなりになりました。僕は数回しかお会いしてないのですが、ご本人とのお話はもちろん、著作から大いに刺激を受けておりました。戦後の思想史をやるようになったのは、この方の著作の影響が確実にあります。この間、道場さんの『抵抗の同時代史』³をあらためてめくっていたら、一番最後の文章に強烈なことが書いてありました。こんな文章です。『『抵抗』はしばしば単独者個人、強い個人による良心的行為と考えられている。しかし、実際には『抵抗』はそれを支える可視／不可視の多様な『つながり』の質に多く

¹ Mori, Motonao, 2017, “The Wisdom of Concreteness after the 12th of March,” *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 49-55.

² 森元斎, 2015, 『具体性の哲学——ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考』以文社。

³ 道場親信, 2008, 『抵抗の同時代史——軍事化とネオリベリズムに抗して』人文書院。

を負っている。ネオリベラルなグローバル化と軍事化とが並行して進む今日の世界／社会再編に対し、『個』と『共同性』がせめぎ合いながらも、両者を同時に押し流していく巨大な力に抵抗し、異なる個性／共同性の模索を進めること。希望の要素は同時代経験の中に隠されたそうした模索の中にある」（道場 2008: 285-286）と。こんなカッコいい文章がこの本の締めくくりなのです。とはいえ、どういうことを言っているのか、非常に抽象的だし難しい。そうでありながらも、ビシビシ刺激してくれます。それぞれが、それぞれの仕方、しかも具体的な仕方、抽象的であり表象的な選挙とか国家レベルの話じゃなく、抵抗を試みる。そのときに、私たちが具体的な位相で、何か希望を、それこそ知恵を見出すことができるんじゃないのかなというふうに、僕は受け取りました。僕なりに解釈してみると、日々の生活に学び、もちろん歴史にも学んでいかなきゃいけない。そういうことだと思います。この間、すごくいろんな領域の人たちと話しているのですが、僕の知らないことだらけだなあと自分の至らないことを確認する一方で、いろんな大切な過去の事柄がぶった切られている感じがしています。ものすごく豊かな歴史が、日本だけではなく、世界中に散らばっている。たくさんあるのにもかかわらず、それらを学ばずに、すぐに新しい社会運動だとか、そういう言葉を発してしまっている状況が、ちょっと嫌だなと思っています。僕の場合は思想史、といっても 100 年前なので最近の現代思想ですけども、思想にもっと学ばないといけない。国家にはもちろん絶望しつつも、抵抗には希望を持てたらいい。もう、絶望しっぱなしなんですけども、まあ、やっぱりでも、もしかしたら希望が持てるのかもしれない。道場さんは、この希望という言葉を選んでるわけですから、やっぱり、その言葉に僕も乗っかりたいなという気持ちを新たにしました。それともうひとつですね、道場さんは永遠だぞということです。すみません、これちょっと個人的な「始める前に」でした。本編に入ります。

3・12 以降の具体性の知恵

本題に入ります。「3・12 以降の具体性の知恵」ですね。これ、3・12 っていうのは、矢部史郎さんという方が、『3・12 の思想』⁴という本を書いていらっしゃいます。その言葉です。3・12、その言葉に乗っかって、ちょっと書きました。先ほどの道場さんの言葉ですけども、「異なる個性／共同性の模索を進めること。希望の要素は同時代経験の中に隠されたそうした模索の中にある」と。一応、拙論でも、共同的なものと個体的なものとは、それぞれ別々でありながらも瞬間的に共鳴して、それがいつなのかは、もちろんわからないのですが、出来事なるものを生ぜしめることについて、検討しています。それが一応、拙論の内容です。DIS で僕が書かせてもらったのは、Bruno Latour と Isabelle Stengers の、Whitehead の理論に基づきながら語られた出来事論です。Stengers は、よく発音されるのはイザベル・スタンジェールですが、彼女は一応フラマン語圏の人間なので、スタンジェールじゃなくてステンゲルスと発音するのが正しいようです。哲学畑の人って、こういう言葉の発音の仕方とか、いちいちチクチク言うので、一応お伝えしておきます。で、私はどんなこと書いてたのか。

事例としては、1 個目は、Louis Pasteur の実験ですね。乳酸菌の発見。先ほど、主体性をモノに認めるのか、それ以外のものにも認めるのかという点だと、Latour の場合は、先ほど参照されてた論文だと思うんですけども、酵母とか乳酸菌にも認めています。たとえば、面白い文章として、こんな Latour の文章⁵があります。「もし Pasteur が戸惑うならば、乳酸菌もまた戸惑う

⁴ 矢部史郎, 2012, 『3・12 の思想』以文社。

⁵ Latour, Bruno, 1994, “Les objets ont-ils une histoire? Rencontre de Pasteur et de Whitehead dans un bain

のだ」(Latour 1994: 208) と言っています。要するに、乳酸菌もまた主体だし、Pasteur も主体というか主観というか、Subject をもっていて、Pasteur はもちろん一応人間なので主体をもっている。それ全体で、Pasteur と乳酸菌が一緒になったある種の何か、つまりラボそのものも主体だったりするんですね。全てが主体なんです。ま、どげん意味やろか、と。Pasteur も乳酸菌も、そのほか乳酸菌を発見するために使用された器具も、カゼインも、乳清も、リン酸塩も、全部モノだと。で、乳酸菌の発見という出来事、ないし、Whitehead の言葉だと他には現実的存在、actual entity とか actual occasion なんていう言葉があります。出来事とほぼ同義です。細かく言うとは違いますが、ここでは同義でいいです。で、乳酸菌の発見という出来事は、これらモノのある種奇跡的な出会いによる、複合的な、これまたひとつのモノです。monadology という Gottfried Wilhelm Leibniz という人が言っている面倒な議論があるのですが、その monad みたいなものです。monad とは、あらゆる精神的実体で、なおかつ、あらゆるユニット、単位が、全部ひとつの monad なんだという言い方がなされています。それと同じように、今この場も出来事だし、私っていう主体も出来事だし、このマイクも出来事なんですね。全部、出来事で、モノで、主体をもっている。いずれにせよ、抽象的で純粋培養されたモノじゃなくて、いろいろなモノが混ざり合って、それによってこそ出来事っていうのは生じるんだと。

これはおそらく、今まで何となく話していたような Latour の Actor Network Theory、実は詳しくは知らないのですが、そのことなのかなと思ってます。Pasteur の発見自体も、彼の科学的探究心だけで、それが成り立っているわけじゃありません。Pasteur 自身は、これ、そんなにやりたくない仕事だったそうです。いろんな奴らの思惑ですね、いい奴もいたし悪い奴もいたわけです。Pasteur、お前実験できんだろと、やれやと言われて、Pasteur はやったわけです。そして、なんとなく乳酸菌を発見しちゃった。何が言いたいのかというと、科学的な発見、しかも、これはもっと言うと、非常に我々の手の届かぬ与り知らぬような抽象的な位相におけるレベルではなくて、むしろ具体的なレベルにおける、ある種のハイブリッド性による科学的発見なんだということです。要するに、生活に密接な仕方での有用性という観点での発見だったと。具体的な知恵の創出は、ハイブリッドなんじゃないの、ということですね。まあ、もちろん抽象的な方もおそらくハイブリッドなんでしょう。先の発表を拝聴していたら、そうなんだと思いました。ハイブリッドなものの発見は、やっぱり時間がかかります。たとえば、大学とか研究室とかが、スタッフ細胞早く発見しなさいと要請して、すぐ「ありまーす」と答えちゃうようなものではない。もっともっと喧々諤々の議論があり、何回も何回も実験をやり直すし、これはやっぱり、大学のいわゆる理系といわれるところの現場でも、それはそうだと思います。他にもいろいろあるんですけども、拙論の前半の面倒な議論は、こげん感じのことが言いたかったわけです。で、正直申し上げると、前半はどうでもいいです。個人的には、あまり関心が、もはや、ない。それに加えて、Latour と Stengers がぐだぐだ言ってるのに、私もちょっと引きずられちゃって、自分もちょっとぐだぐだ書きちゃった感じも否めない。これはちょっとよろしくない。

「この状況は危機的だ。」

そう、言いたいことを言っているのは、むしろ後半です。そこからちょっとジャンプして、Whitehead の言葉⁶が素敵すぎるので、みんなこれを読んで、今日、暗記して帰ってください

d'acide lactique,” Isabelle Stengers ed., *L'effet Whitehead*, Paris: Vrin, 196-217.

⁶ Whitehead, Alfred North, 1967, *Science and the Modern World*, New York: The Free Press. (=1981,

さい。「この状況は危機的だ」(Whitehead 1967: 197) と。これは要するに、科学が専門化してしまっただけに対する状況です。こうした専門化は、だいたい 17 世紀ぐらいから始まってはいたようですが、産官学連携でいわゆるものすごい専門化が始まったのが、およそ 100 年ぐらい前から。産業界も含めて、それはもちろん第二次産業革命以降から、ずっとあったのはあったんだけど、それが制度化されて、大手をふるっていったのがだいたい 100 年ぐらい前。で、「この状況は危機的だ」と。これは、なんだかやばそう。それは溝にはまっちゃった精神を生み出しちゃう。「どの専門も皆進歩するが、それはそれ自身の溝での前進」だと言っています。「ところで、精神的に溝にはまっているということは、与えられた一組の抽象を眺めて暮らすことである」。要するに、溝にはまっちゃうということは、その抽象だけですね、要するに非常に純粋なピュアな、それだけの、専門的な領域を、何かいろいろぐちゃぐちゃやってるだけなんだと Whitehead は言っている。そうではなくて、溝にはまってない私たちが常に生きてる場所というのはむしろ、もっともっと広い。溝だけではない。平地もあるし、川もあるだろうし、海もあるだろうし。溝にはまっていれば、「広い天地を見渡すことを妨げ、抽象は、私たちがもはや注意を払わないものを捨象してしまう」。「無論、人生を包むに至る抽象の溝などはないだろう」。私たちの生は、考えている以上に領域が広い。そうであるにもかかわらず、溝に全部押し込んでしまうのはおかしいでしょと Whitehead 先生はおっしゃっております。「現代世界において、中世の知識階級の禁欲的な独身生活は、完全に事実を具体的に眺めることとは縁を切ることになって」しまう。本当は、もっといろんな楽しいこととかあるのに、すごい禁欲ばかりして、人生楽しくないじゃん、ということですよ。「もちろん、数学者とか法律家だけに終始する人生などは、誰もいないだろう」と。数学者だって糞するわけですよ。法律家だって飯食うわけですよ。要するに、ずっと法律だけやってるわけじゃないし、ずっと数学だけやってるわけじゃないだろうと。「人々は、その専門の職業や事業の外で生活を営んでいる」。「しかし問題は、真剣な思索が溝の中に限定されてしまうことにあるだろう」。「専門外の生活は、専門家に引き出された不完全カテゴリーによって、浅はかに取り扱われてしまう」。こうした議論を Whitehead は「置き換えられた具体性の誤謬」っていう言葉で批判します。要するに、具体的な私たちの今の生に対して、抽象的に語ることで事足りるとしてしまい、勘違いしちゃってるよね、ということです。the fallacy of misplaced concreteness という言葉です。で、抽象的なだけの探求なんちゅうのは、糞くらえ、ふざけんな、と。Whitehead 先生の言う通り、そもそも私たちには、人生上の問題も含めて、数え切れないくらいいっぱいあるにもかかわらず、溝のすごい狭い問題に押し込められちゃう、あるいは抽象的な語り方のなかに限定されてしまう。もちろん溝の中や、抽象的なものを否定するのではなく、それだけでもって人生を語ってしまうとかね、それはなんか、よろしくないんじゃないの、ということですね。

「知恵は、平衡を保った発達から生じる。」

もう一文、お土産に持って帰っていただきたい言葉があります。これも長いんですが、Whitehead の言葉です。都市論とかでも使って欲しい文言です。「現代生活への批判は、共同体の意味をどのように解釈するとしても、どこにでも適用される。これは、国民国家、都市、地方、研究機関、家族、さらには個人のいずれに適用してもかまわない。特殊な抽象的理念は発達していても、具体的な鋭い目は萎縮してきている。全体はそれが持つ諸相のひとつに没し去っている。19 世紀におけるさまざまな発見は、専門化の方向において行われ、その結果、現代

上田泰治・村上至孝訳『科学と近代世界』松籟社.)

の私たちは、知恵をより豊かにしているどころか、ますますそれを必要とする状態に置かれているということが問題だ。知恵は、平衡を保った発達から生じる。個性のこうした平衡を保った発達こそ、教育によって獲得されるべきものである。近い将来に対して、最も有益な発見は、進まざるを得ない知的専門化を損なわずに、上述した目的を推進することに関係する」

(Whitehead 1967: 197-198)。ちょっと難しかったでしょうか。何て言ってるんでしょうか。要するに、専門家の知が発達していったって、私は哲学の人ですとか、歴史社会学の人ですとか、都市社会学の人ですとか、人類学の人ですでもいいんですけども、個別具体的に学知が成立していったって、なんかあんまり実は、領域横断的に議論する場ってなかったりするわけですよ。哲学なんて、なんかもうオタクの巣窟みたくなっています。哲学の学会なんて怖いんですよ。僕は Kant 学者じゃないから良かったのですが、学会とかで Kant 学者とかが発表すると、どうもその中身の議論じゃなくて、これは Immanuel Kant の『純粋理性批判』の α 版の該当箇所と β 版の該当箇所の異同からどういうふうに導き出されたものであって、かつ Keimp Smith の解釈がどーのこーので、あーだこーだを批判してるのかどうなのかとか、そういうことをずっと永遠とやってるんですよ。怖ろしいです。そういうふうになっちゃって、だんだんタコツボ化していったって。個人的には、あんまり Kant 自体が好きじゃないんですが、おそらく、Kant だってもっと中身で良いこと言っているはずなんです。それも、人生に使えるようなことだと言ってはいるはずなんです。もっと人生に使える知恵とかね、そういったものを哲学から引き出せるはずにもかかわらず、19 世紀以降は、そういうのができなくなっちゃった。それが問題だ、と Whitehead は言っています。で、もっと平衡を保った発達がいいんじゃないの、と。要するに、Whitehead は、抽象的なものとか、科学とかっていうものを完全には否定はせず、そういうのもありだし、もっと具体的な生活に根付いたうえで科学をもう一度思考できるようにしていかなくちゃいけないし、もっと感性的なものも磨いていかなくちゃいけないし、平衡を保って、ちょっとずつ進展したらいいじゃないのと、言ってます。

これは、Whitehead が影響を受けた、18 世紀から 19 世紀にかけてのイギリスの教育ってのが、バックグラウンドにあると思います。ものすごい教養に裏打ちされている。教養教育によってこそ、平衡を保った知恵の進展がありうるのだと、彼は信じてました。僕は、この今の日本の状況下において、全面的に同意するわけじゃないけど、やっぱ教養教育はすごいもちろん重要だと思っています。一応教師ですし、やはり教養教育によって、平衡を保った知恵の進展の様は伝えていくことができると思っています。もちろん今もイギリスなんかはそうですけども、本当に教養教育っていうのがすごい。今以上に 19 世紀なんかはもっとすごい。Whitehead はもともと数学者だったのに、物理学者にもなって世界的業績をたたき出してしまふ。それに加えて、哲学者にもなって、今私たちにも残るような文章を残している。当時は教養教育とその精度がものすごいんです。たとえば Whitehead の弟子に John Maynard Keynes がいたりする。経済学者ですよ。だけどイギリスには、モラル・サイエンスの伝統の枠のなかから、いろいろなものが出てくる。いわゆる教養教育でしかない。他にもたとえば今、アメリカなんかもそうですけども、専門課程は専門課程であるけど、ハーバードとか、4 年間ずっと教養教育だけをやる。専門は大学院行ってからやるわけですよ。Whitehead のこの言葉は、日本の教育機関への批判としても、使えるんじゃないかな。僕が前に非常勤やっていたある大学では、入ってから卒業するまで同じ 20 人の学生だけと知り合って、そのまま卒業しちゃう。で、何が問題になるかといったら、便所飯。要するに、友達作れなくなっちゃう。もし、最初にあぶれちゃったら、友達作れないんですよ。さらに、学校側は予算がどうのこうの言って、どんどんサークル潰してるんですよ。業績のあげられるサークルしかサークルとして認めませんか。じゃあ、

天文部とかどうするんだって話ですよ。星見てるだけです。業績もへったくれもないわけですよ。だけど、そういうサークル潰すわけですよ。で、本当は天体観測に興味あったかもしれない学生が学校に行けなくなってしまう。サークルにも行けない。で、一人で問題を抱え込んで。で、どうなるか。つうと、人に飯食われてる姿見られたくない、トイレで飯食う、でも拒食だから飯食えない、流す、便所飯で詰まる、それが教授会で問題になる。馬鹿かと。学生の生命を救えない大学なんて要りません。そんなんじゃない。で、教育の現場でも、もっといろんな、縦横ぐちゃぐちゃしていった方が面白いんじゃないのってことは、ここからも言える。実は、Whitehead 自身、ロンドンの教育行政にもすごく深く携わって、その行政教育の長みたいなのをやってたんですよ。だから、実は、Whitehead は教育学者としての側面もあったりもするんですが、いずれにせよ、知恵の探求って意味でも、専門だけずっとやってりゃよろしいってんじゃない。で、なんかいろいろやったら、ということですよ。で、そうしないと、どんどん知恵ってのは骨太には発展していかないでしょと、言います。

生活の知恵

で、何をもってインフラと考えるかっていうのは、ちょっといまいち、まだ、ここでの共通見解は分かりませんが、なんか今まで、ない頭使ってなんとなく話を聴いていて、ちょっと今ここでインフラっていうふうに言っちゃうのは違うなと思ったんですけど、ひとまず私にとって、生活の知恵がインフラかなと思いました。基盤かな。だから、皆さんのインフラの概念と違うかもしれない。だから、さっきの水、水道のお話もありましたが、僕、田舎に住んでいて、結構みんな井戸掘って水飲んでるんですよ。なので、水欲しいなら井戸掘りゃいいじゃん。田舎に来い。で、掘り方もいろいろある。自分で5m くらい掘ったら出てくる場合もあるし、あと10m くらい掘ると、酸素足りなくてガスとか出てきちゃうから、やっぱ器具使わなくちゃいけないとか。で、器具もいくつかあるんですよ。だから掘り方もいろいろある。それ、知恵なんだと思いますよ、昔から田舎に住んでる人たちの知恵。食べ物欲しいんだったら、流通に頼る云々ではなく、田んぼ、畑、やったほうが早い。オカルトっぽいけど自然農もあるし、有機もあるし、減農薬もあるし、いっぱいあるよ。これも生活の知恵だよ。田舎いいよ。ロハスな生活で金かかるとか言っている馬鹿がいますが、お金かかりません。『天然生活』しか知らないんでしょうか。無知ですよ。実は僕自身東京出身で、しかも西の郊外で、なんかすごい殺伐として、3ヶ月にいったん誰か自殺するとか、若い人はドラッグやってたような、そういうところで育ったんで、以前はそう思ってた。思っていたというか、全く今のような生活があることすら知らなかった。だから、こういう生活が新鮮で楽しくてしょうがないんですよ。で、この歳になって初めて、鶏を杀しました。多分、僕らの世代とか、よほど田舎に住んでなかったら、ほとんどそういうことした経験ないと思うんですよ。でも、僕ね、牛と豚食えないんで鶏だけ唯一食える肉なんですけど、それぐらいは、ちゃんとして捌けるようになりたいと思って、やりました。で、しめ方もいっぱいある。でも、だいたい首ちょん切るだけなんですけど。でも、やっぱほら、怖いじゃん、目見るの。で、捌き方も、知恵。たんぱく質ほかに欲しかったら、魚釣りゃいいじゃないかと。釣りが趣味の方もいるかもしれないですけど、釣り方いっぱいありますよね。楽しいよ。こういう生活の知恵、食の知恵でもいいんですけど、意外に豊富だよ。

「地元をディグると革命が起こる」

最近の話ですけど、この糞みたいな世の中を変えたかったら、まず、歴史を学んだらいいん

じゃないかと思ってます。将来の夢は、地元の郷土史家です。僕のここ数年の金言に Peter Lamborn Wilson、Hakim Bey さんの言葉があります。「地元をディグると革命が起こる」。地元を掘れば、革命が生じる。で、その言葉通り実行して、地元を掘りだしたら、自分のなかで、革命が生じちゃったんですよ。オタクのやる哲学なんて、いらねえやと。むしろ自分こそが哲学だ、歴史だと、そう思えるようになったんです。今は、たまたま福岡に住んでいて、じゃ、地元掘ろうよということで、なんか面白いことないかなと探していたら、だいたい2つ、なんとなく見当つけました。ひとつは、玄洋社ですね。で、もうひとつはサークル村です。で、玄洋社は、一時期ちょっと調べたりしていたのですが、玄洋社の残党みたいなおっさんたちが立ち寄りがたい。台湾行ったら国賓級みたいな人たち。ちょっとこれはもう無理だなと。しかも、やっぱり右翼だし。だから僕、やっぱり左派の方がいいよなと思って、サークル村について、いろいろ炭鉱労働しておじさんたちとか、谷川雁のこと大っ嫌いなおじさんとか、上野英信さん大好きっていうおじさんとかお婆さんとか、そういった人に話を聴いたりとか、あと、いろんな資料をディグったりするようになりました。で、そうすると、そのなかに、いろんなことが書かれている。ちょっと 50-60 年前のことであるにもかかわらず、知らないことばかり。たとえば、最初に座り込みをしたのとかも、実はこの頃だったりする。じゃあ、座り込みで長時間いる。特に冬だと寒い。どうするか。酒飲むんですよ。そうすると体もあつたまるし、長時間一緒にずっと座り込みできるでしょ。それも、すごい知恵ですよ。あと、警察が来たらどうするか。追い出したい。犬のウンコとか、昔だからいっぱい落ちている。それを棒の先にくっつけて、警察にこうやって、うえーっうえーってやるわけですよ。それで警察を蹴散らす。まさに知恵です。

加えて、コミュンめいたものやってみようと思っています。100 年前のアナキストたちは、コミュンを作って実際に活動していたし、その残滓っていうのは今もなお、たとえばスイスやフランスにはある。スイスだったらジュラ地域ですね。時計職人の間で残っています。なので、最近スイスに行ったりして、話を聞きに行ったりしています。集中的に調べているのは、Élisée Reclus という思想家です。この人は地理学者で、活動家です。Élisée Reclus のいろんな言説、地理学はなんかちょっと難しいし、膨大な量あって、読んでもさっぱり訳わかんないのですが、Reclus の書いたアジビラとか、哲学ないし社会思想系の文章とかをディグったりして、なおかつ、この人のやってたコミュンの実践活動とか、どうやってたんだろう、どうすればうまくやってたのかなということを、調べたりしています。あと、石川三四郎もです。石川は、この Reclus に影響受けて、それこそ東京だったら千歳烏山ですね、そのあたりで、なんちゃってコミュンを作ってやっていました。これも数年しか続いてないのですが、彼は彼なりに東京で、東京っていても当時の千歳烏山なんぞど田舎ですけども、やっぱり、やってた人はいらる。こういう人たちから学ぼうと思っています。なにもこれ、今自分がやろうとしていることは新しいことでも何でもなし、ちょっと 100 年前にやっていた人はいたし、それで成功した人、失敗した人、いっぱいいたわけですね。で、いっぱい学べるやないかと。じゃあ、歴史に学んで、それでなおかつ現在を生きよう。コミュンやろうとかいうと、やったこともないおっさんたちとかは、コミュンなんか失敗するに決まってるみたいなこと言うんですよ。けども、こう返したい。お前やったことあんのか、ふざけんな。俺はやるぞと。やって失敗してから俺はいろいろ言いたい。もうすでに、今自分のなかで革命がおきまくってるわけです。超楽しいです。で、あとは、政府を転覆して国家を廃絶するっていう、これはアナキストとしてのユートピアかもしれません。理念かもしれません。理想かもしれません。けども、それを胸に生きています。これ、Reclus が言っていたいい言葉なんですけども、「ユート

ピアを持ってなかったら人は死んだも同然だ」っていう言葉があって、これ、すごい言葉だなと思っています。だから、絶望している一方で、どっかで希望を持っている。もしかしたら、良くなるんじゃないかなと思ってないと、やっぱ、やってらんないですね。

おわりに

あらためてなんですけども、歴史をディグりまくってた道場さん、彼もやっぱりサークルですね、詩をすごいディグってたわけですよ。で、これはすごいなと。僕は全然、道場さんののはるか足元にも及びません。だってもう、訳のわかんない、これ絶対読まねーだろみたいな、ほんと他人から見たらゴミみたいなもん、いっぱい集めているんですね。で、彼の言葉ですね。やっぱ響くなど、改めて思います。「異なる個性性／共同性の模索を進めること」。もう、みんなばらばらでいいと思います。で、たまに、なんか一緒にやれる瞬間が、たまに奇跡的に起こる。それはもう、待ってるしかないです。ユートピアを胸に抱いて、待っていくしかない。革命が起きちゃうかもしれないわけですね。「潜伏を続けて時期を待て」(DJ KENSEI feat. Stillichimiya) ですね。もういつなのかは、わかんない。「希望の要素は同時代経験の中に隠されたそうした模索の中にある」。それをもう一度、胸に秘めながら、頑張っていきたいなと思っています。僕はこの言葉で、昨日はご飯3杯ぐらいお代わりしました。

東日本大震災後の市民社会内部における国家の顕現 ——現代日本における軍事ガヴァメンタリティ——

森 啓輔

はじめに

森です、こんにちは。この森元斎さんの報告の後にやるの辛いんですけど、順番なのでしょうがないかなと思いつつ、でも、いろんな意味でハードルを下げてくれたので、ありがとうございます。じゃ、始めていききたいと思います。

僕は、「東日本大震災後の市民社会内部における国家の顕現——現代日本における軍事ガヴァメンタリティ」と題して書きました¹。さらっと話をすると、博論までの研究では、沖縄本島の北部の東海岸地域の高江ってところが——いろんな意味で今すごく有名になってしまったんですけど——、そこが僕がフィールドとしてたところなんです。今は、機動隊とかが来たり、自衛隊が建築資材を運んだりしていると。そのような諸々の行為の法的根拠は全然ないんですけど、でも、そういうことが、どんどんなしくずしになりながら事後的に正当化されて進んでいくっていうのが、基本的にはあります。だから、「森君は沖縄のことばかりやってていいよね」みたいな話をたまに聞いたりするんですけど、いやいや違いますよ、みたいな。むしろ沖縄を見ることで世界史が見れるんだと、今の世界の現状が見れるという自負を一応持っている。それは、先ほどの西川さんの話にもありましたけども、現代、特にいわゆる先進国と呼ばれる地域が自由主義的な統治体制の下にあったとすれば、そのなかで見えなくなっている主権の問題ですよ。つまり主権をめぐる統治、あるいは統治性のなかで主権が果たしている機能というのが、グローバルな規模で地理的に差異を自ら分節化しながら展開しているっていうことを思っているからで、そういうことは東京にいたらなかなか実は見えてこない。東京の歴史を掘ってみたら実はいろいろ見えてくるんですが、普通に生きてみると、経済的な主体の方が主体編成において強調される磁場ですから、なかなか見えない部分があると。このような問題意識を抱えながら、ずっとやってきたんですけども、そういう自分自身の系譜のなかで、僕は震災を経験することになるわけです。

沖縄における東日本大震災

僕は、3月19日に引越しがあって、その日、小雨が降ってたんですよ。でも、その日引越さないで引越せなくて、でも、その日に撮った写真を来る前に見返したんですけども、雲がすごい紫で、今考えるとすごいメタル臭がするんですよ。メタルっていうか、金属臭がしてたっていうのがあって、そのなかで引越しをしてしまった私、みたいな感じなんですけど。今、笑うところですけど。3月11日は、僕は沖縄にいて、友達とバーベキューしてて、砂浜で

¹ Mori, Keisuke, 2017, “The Emergence of the State in Civil Society after the Earthquake: Military Governmentality in Japan,” *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 56-65.

すね。沖縄はもうバーベキューできるんで、3月。そしたら、アナウンスで、津波が来る、震災の後の津波が来ますと。なので、浜からちょっとどいてください、という話をうけたのを覚えています。沖縄における震災経験って、多くはそんなもんなんですけども、そういう差異の言説とかです、地理的な差異のなかから震災について考えると、こういうことが見えてきたっていうのが私の報告になります。

大枠でいうと、震災後に、軍隊あるいは軍事的なものをめぐる統治性っていうのが、どういうふうに再編成されていくのかというところの考察です。結論から述べると、国家のインフラ形成、あるいは維持装置、あるいは国家の独占的な暴力装置としての軍隊が、とりわけ近代日本において、どういうプロセスで登場して、それが市民社会に浸透し、現在に至ったのかっていうのを考察していく内容です。

グローバル統治性における国民国家と軍隊

それをどう考えるかっていうところなんですけども、統治性のなかで、特に東アジア規模で考察しているもので非常に多く参照されているのが、Aihwa Ong の本²で、Ong は、新自由主義的な統治性が、どういうふうに東アジアのなかで顕現してくるのかということに関して、いわゆる経済的なインフラの再編成を中心に考察していく。で、その具体的な対象が経済特区というもので、それがあある種の例外状態として確立されていくというところに注目しています。そういう空間のなかで、どういうふうにグローバルな労働力が階層構造を伴いながら再編成されているかっていうことを論じているわけですが、一言でいえば、国家による資本空間の創出あるいは再創出というモメントとして見るができる。他方で、僕の関心事である、東アジアにおける国民国家の暴力装置としての軍隊の役割は何かというと、これは一言で言うと、国家による軍隊を介した「安全」空間の創出である。これ、Michel Foucault が言うところの3つの権力機能というもので³、詳しくない人には伝わりにくいと思うんですけども、「法は禁止する。規律は命令する。それに対して、安全は本質的に言って禁止も命令もせず——しかし実際には禁止と命令の側にあるいくつかの道具を手にし——、ある現実に応答する」(Foucault 2004 = 2007: 57) という部分で、西川さんが述べたような、いわゆる生権力の力もこれら権力機能の歴史的組み合わせとして存在します。今の間断なき国家の統治性ってものは、これらが混合されながら編成されているっていう話をするんですけども、そのなかでは、国家が常に統治性化されるプロセスにおいて、軍隊機構を通して安全空間というものが創出されていく、と見るができる。じゃあ、こういうものが震災後の日本社会をどういうふうに決定していったかっていうところを見ていくために、軍隊の役割を、とりわけ軍隊のレスキュー・エージェンツ化という側面から考察していきたいと思います。

軍隊は基本的には、他国の人口として指定されたものを殲滅する装置としてあるわけで、レスキューというよりはアタック、いわゆる戦争エージェンツです。戦争を作っていく、war making エージェンツと英語圏でよく言われます。国家が独占する暴力についての社会学的ある

² Ong, Aihwa, 2006, *Neoliberalism as Exception: Mutations in Citizenship and Sovereignty*, Durham: Duke University Press. (=2013, 加藤敦典・新ヶ江章友・高原幸子訳『《アジア》、例外としての新自由主義——経済成長は、いかに統治と人々に突然変異をもたらすのか?』作品社。)

³ Foucault, Michel, 2004, *Sécurité, territoire, population: Cours au Collège de France (1977-1978)*, Paris: Gallimard & Seuil. (=2007, 高桑和巳訳『安全・領土・人口——コレージュ・ド・フランス講義一九七七-一九七八年度』筑摩書房。)

いは歴史的分析に関しては、Charles Tilly の著作⁴が今においても示唆的なんですけど、そういう側面がひとつある。他方で、もし何か自然災害や外国からの攻撃があった場合に、そのネーションをレスキューする主体として登場してくるのが、レスキュー・エージェントとしての軍隊の役割。このレスキュー・エージェントとしての軍隊の役割っていうものは、ネーションというものの相互関係において、近代国家においては登場してくるんですが、そのモメントのメカニズムがどうなっているのかっていうのを見ていきたいと思います。これが理論的視座ですが、次に行きます。

近代日本における災害と軍隊

そもそも近代日本において、軍隊にレスキュー・エージェントとしての役割が制度的に与えられたのは、日露戦争以後。国防を主としていた帝国軍隊が、日露戦争の後に、軍事予算が高いついていう世論の高まりに対して軍隊の存在意義を示すために、災害救助の役割が付与されていくわけです。なので、レスキュー・エージェントとしての軍隊の誕生っていうものは、ネーション、あるいは世論と言ってもいいと思うんですけども、ネーションの *discourse* の創出っていうものと対になっているものである。その後、第二次世界大戦を経ながらも、自衛隊が復活、まあ軍隊ですね、日本軍が復活し、その後、近代化を伴いながら展開していくと。

阪神大震災以降は、自衛隊の災害派遣が世論になり、自衛隊法の 83 条の 2 項と記憶していますが、自衛隊の自主派遣の権限がその後強まっていく契機になっていくと。そして、東日本大震災による破壊の後には、自衛隊法の 83 条の 2 ですが、災害あるいは地震派遣で、各都道府県知事の要請に基づき、災害救助隊を派遣していくと。さらには、首相の原子力緊急事態宣言発令後、自衛隊法 83 条の 3 ですね、原子力災害派遣に基づいて原子力災害に派遣されていく。

軍隊をめぐる言説圏の地理的差異

同時に、米軍も災害支援を日本政府に伝達し、了承後、派遣していきます。その際に、在日駐留の米軍基地が「効果的」に、括弧つきですけども、使用されていくようになっていく。こうして 4 月中、2011 年 4 月 6 日～30 日まで、米軍は救助活動を行っていくわけです。その後、米軍は、原子力災害の支援の方のみに移行していくわけです。同時に、オーストラリアや韓国、タイ、イスラエルなどの軍隊も、自衛隊の活動を支援していくわけです。結局、3 月 11 日から 5 月 11 日にかけて、およそ 10 万人の自衛隊員が災害救助に動員されていく。人数で絶対数が多い陸上自衛隊は、予備役を含めて大半、動員されていくと。5 月 12 日から動員が徐々に減少していきますが、総動員数は延べ 980 万、およそ 1,000 万人が災害救助に派遣されていくという、すごい動員構造になっていくわけですね。そのなかで、レスキュー・エージェントとしての軍隊の表象っていうものが、どんどん強まっていくわけです。他方で、さまざまな国の災害支援があったものの、アメリカのトモダチ作戦が最もメディアで報道されていくわけです。60 億円ぐらいしか使われてないんですけど、「60 億も使った」という報道がすごくなされていくんですね。

そういう災害救助エージェントとしての軍隊の役割が定着していった後に、一方で、地理的言説圏の差異のなかで、沖縄では暴力装置としての米軍が表象され続けていったわけです。被

⁴ Tilly, Charles, 1985, "War Making and State Making as Organized Crime," Peter Evans, Dietrich Rueschemeyer and Theda Skocpol eds., *Bringing the State Back In*, Cambridge: Cambridge University Press.

災地から地理的に遠い沖縄では、戦争遂行エージェント、war making エージェントとしての軍隊の役割をめぐる表象というものが、基本的にはそのまま継続していくわけです。新聞等のいろんな記事分析もしましたが、これはかなり違いが見られることが分かっています。東アジアの米軍と自衛隊の実像が、ここから明らかになっていくわけですが、そこから帰結していくのは、国内と国外での軍隊役割と表象が、かなり明確な形で地理的な差異を伴いながら生じているということです。それが本土社会と沖縄の間の軍隊をめぐる言説圏の差異を形成していくことになります。自衛隊の役割に関する内閣府の調査⁵ですけれども、災害救助役割を重視する回答というものが、特に 1995 年の阪神大震災以降、国防をずっと上回る現象が続いている（内閣府 2014）。2014 年の調査でも、自衛隊役割を評価する傾向というものが、全体的には高まっていくんですが、レスキュー・エージェントとしての自衛隊役割を期待する回答の優勢というものが、ずっと続いているわけです。

市民社会に浸透する軍事的合理性

結論ですけれども、レスキュー・エージェントとしての軍隊役割というものは、ネーション形成とともに展開していったと。戦後も災害救助役割は継続し、阪神大震災を機に、自衛隊の災害救助権限が、特に自主派遣の権限が、強化される傾向にあるのが現状でしょう。東日本大震災では、自衛隊の大規模な災害動員がなされ、同時に、レスキュー・エージェントとしての自衛隊の表象というものが、どんどん高まっていく。他方で、昨今ですね、とりわけ 2014 年以降、軍隊をめぐる法改正や国外情勢は、国内向けのレスキュー・エージェントと国外向けの戦争遂行エージェントという軍隊役割のますますの言説的乖離を形成していくと。被災地では、レスキュー・エージェントとしての軍隊が、基地問題に直面する地域では、とりわけ沖縄が中心ですけども、戦争遂行エージェントとしての軍隊が焦点化されていくわけです。しかし、重要な側面というものは、どちらの形式であっても、現代日本では、軍事的合理性がどんどん市民社会のなかに浸透してきている、ということだと思います。軍事機構のナショナルな性格は、その本質的な機能としての war making エージェントとしての機能を、ナショナルな言説においては後景化させます。その一方で、自由主義的な統治基盤に基づいた日本社会において、災害により生命財産が脅かされた際に、国民が「社会は防衛しなければならない」という文脈において、言い換えれば、自らの生を向上させる媒介として国家軍隊のレスキュー・エージェント役割に期待します。「社会は防衛しなければならない」という言葉は、1975-76 年に『安全・領土・人口』に先駆けて行われた、Michel Foucault のコレージュ・ド・フランスでの講義のタイトルです。『社会は防衛しなければならない』⁶において Foucault は、西欧の国家理性が人種主義を統治の戦略に結びつけていく過程を、18 世紀後半から 20 世紀にかけて系譜学的に追っていきます。生物学的な「平均人」（Adolphe Quetelet）としての国民身体の向上という生政治的技術は、国家の統治性化において重要な役割を果たすと同時に、国民内部の異質性を排除するという間断無き国民化実践により、「平均人」の全体的向上を目指すというテクノロジーとして近代社会に登場する。このような近代統治性の延長線上に軍事的合理性の市民社会化が見られ、

⁵ 内閣府、2014、「自衛隊・防衛問題に関する世論調査 平成 26 年度」（2015 年 7 月 19 日取得、<http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-bouei/zh/z10.html>）。

⁶ Foucault, Michel, 1997, *Il faut defendre la societe: Cours au College de France (1975-1976)*, Paris: Gallimard & Seuil. (=2007, 石田英敬・小野正嗣訳『社会は防衛しなければならない——コレージュ・ド・フランス講義 一九七五 - 一九七六年度』筑摩書房。)

その帰結は、軍事的合理性を市民社会に招聘していくというパラドクスとなるわけです。これにより、国民国家内部と外部の線がより強化される事態となったわけです。それは国民と措置される内部の異質性を排除するという方向にも進んでいくことになります。つまり「社会は防衛しなければならない」という市民社会の統治実践は、「国家も防衛しなければならない」という国家統治実践と不可避的に結びついていくわけです。

おわりに

今までのことをふまえて、最後に、これは問いでもあるんですけども、しかしその次の段階にあるのは、資本システムのフローの必然的な帰結への考察であると考えています。David Harvey が Karl Marx の『資本論』を1巻から3巻まで統合した形で論じる『都市の資本論』⁷という本があります。以下はそこで Harvey が展開している議論ですが、資本自体というものが、資本システムの内部が、そのなかに必然的に恐慌を抱えながら、自らを再生産し拡大していく。これが『資本論』第1巻と第2巻の話だと思うんですけど、恐慌を回避するために軍事に投資したり、あるいは福祉に投資したりする。福祉に投資することによって労働者が蜂起することを抑制したり、軍事に投資することによって軍事的に抹殺できたりするわけですから、そういう『資本論』第3巻に書かれている、第3次循環としての軍事的投資っていうものに、どのように市民社会は直面していくのかっていう問いが、ひとりひとりがこれから直面していく問いであろうと考えます。

この軍事的投資っていうものが何かというと、要するに、一方で軍事的商品を生産していくというフローのなかで、他方では資本が恐慌を回避していくプロセスが存在するということです。資本は軍事的商品を競争関係のなかで生産します。しかし資本は、継続的な生産競争関係のなかで、自分が創りだした軍事商品自体の減価を必要とする。どういうことかと言うと、今まで作った商品の価値を、今作られている商品の価値が上回らない限り、商品は売れません。例えば iPhone7 が iPhone6s よりも性能が良くないと iPhone7 は売れませんよね。これは、今まで製造した商品の減価を通してからでしか新しい商品が売れないということの具体的な例ですが、今まで製造した軍事商品よりも高性能な軍事商品を生産しない限り市場で売れないとすれば、この減価というものは、軍事商品が使われなければ達成されないということなんです。つまり、日本国内で作られた軍事商品がどこかで使われない限り、新たな軍事商品の生産 - 消費サイクルというものは生じないという論理ですけども、このような論理に、どのようにそれぞれが直面していくのだろうかというのが、これからの切実な問いになると考えています。以上で報告を終わります。ありがとうございました。

⁷ Harvey, David, 1985, *The Urbanization of Capital: Studies in the History and Theory of Capitalist Urbanization*, Baltimore and Oxford: The Johns Hopkins University Press and Basil Blackwell. (=1991, 水岡不二雄監訳『都市の資本論——都市空間形成の歴史と理論』青木書店.)

質疑応答②

植田：ありがとうございました。お二人のご報告をうけて、ひとまず今のところまでで事実確認等をおきたいと思います。まずは登壇者のなかでご質問等あればと思います。いかがでしょうか。

特に出ないようですので、時間が少し押していることもあるので、コメントの方に移りたいと思います。ただ、その前にちょっとだけ補足をさせていただくと、今回、ヒトとモノっていうふうに変化して話を進めてきたんですけども、これまでの経緯を振り返ると、ヒトとモノに加えて、もうひとつ知識っていうものを、実は含めて考えてきたように思います。インフラというものを考えるときに、ヒトとモノと、それからモノを使ったり運用するための知識を加えて、それらが組み合わさった複合体のようなものとしてインフラを考えられないかということも議論してきました。今回、ワークショップのタイトルや趣旨のところでは、ヒトとモノしか出てきませんけれども、そこは少し広く考えていけたらなと思います。

もうひとつは、最後に森啓輔さんが触れられた Harvey の話ですね。資本の3次循環としての軍事的なものというところですけども、インフラの輸出や開発・研究といった話も、基本的にはこういった枠組みに乗せることもできると思います。ただ一方で、Harvey のような議論の立て方自体が、インフラとか、モノの力とか、ヒト・モノっていうところで考えていくときに、乗り越えるべきひとつの仮想敵として考えられてきたようにも思います。つまり、3次循環というか、Harvey のような議論の立て方で考えていくと、モノというものは、結局は資源や材料に置き換えてしまうことができる。そうすると、資本蓄積のメカニズムのなかでそれが果たす機能の問題に全て還元されてしまう。だが、本当にそれでいいのかっていうのは、この間ずっと考えてきたことでもあったように思います。これに対してどう向き合うのか。接合するのか、切り離して考えるのか、あるいは、といったところは、後半の議論にも関係してくるかと思います。補足はここで止めて、コメントの方に移らせていただければと思います。

コメントは、目安として20分くらいとしておりますけれども、ここから先は少し自由な形で進めさせていただきたいと思います。コメントはどちらからでもよいかと思いますが、もし、そのままということであれば、三浦さんからお願いできればと思います。

「インフラストラクチュアの政治」をいかに捉えるのか
——その視点をめぐって——

三浦 倫平

三浦です、よろしくお願いします。今回、このような貴重な場に呼んでいただきありがとうございます。どの報告も、事前にいただいた論文も、非常に興味深いもので、とても勉強になりました。

なぜ私が呼ばれたのかは、まだちょっと分かってないところもあるんですけども、考えてみると、自分は世田谷区における都市計画をめぐる反対運動を研究¹してきていて、都市計画っていうのはある意味インフラストラクチュアみたいなものなのかなって思うんですね。私の事例で争点となったのは、単純に「都市計画を推進する行政、資本 VS 住民」みたいな、よくある二項対立的な単純な図式じゃなくて、一定数の人たちが、インフラストラクチュアを利便性とか安全性っていう観点から受け入れる部分があって、そういう状況下で、反対運動をやっている人たちも一部、そういうインフラの利点を理解している。そういう状況下で、どういうふうに運動が行政や開発資本に対抗していくことができるのか、みたいなことが、自分のなかでひとつテーマだったように思うんですね、思い出してみると。

ブラックボックス化されたままのインフラをいかに問題化するか

これは全然関係ない話なんですけども、最近、都市の景観みたいなものが、どこにでもあるような、均質化しているんじゃないかって思うんですね。今日、豊橋駅に初めて降りたんですけども、自分の地元の川崎の溝の口駅と全く同じだなと思ってびっくりしたんです。すぐ Suica でぱっと入ってぱっと出て、なんか本当にインフラストラクチュアってすごいなって、衝撃でした。景観だけでなく、人の動き方までも均質化しているというか何というか。これまでは、「ファスト風土化」みたいな形でそのような状況を批判する言説が出てきたけれども、それに対抗する形で、「でもそれは人々が受け入れているから問題じゃない」みたいな形の言説が出てきていて、今度はそうした言説に対抗することがなかなか出来なくなってきちゃっているような気がするんですね。「今の都市の景観や風景をどう問題化するか」っていう本の企画があってですね、私が編集者の一人なんですけれども、工学の人達と学際的にやろうと思っていて、いろんな人にお話をして、何かご自身で批判的な視点を確保して、今ある都市の景観を問題化するような、もしくはそのきっかけになるような論考を作ってくれませんかという形でお願いはしているんですけど、お願いしている私が全く書けないっていう状況です。

なぜ書けないかというと、多くの人が消費社会のインフラっていうものを問題化せずに受け入れていく部分が少なからずあると思うんですね。たとえば、ショッピングモールって、どこにでもあって、つまらないなとは思っただけけれども、同時に、便利だなんていう部分もあって、どこ行っても安心してサイゼリヤに行けるとか、安心してどこのお店にも行けるみたいな

¹ 三浦倫平，2016，『「共生」の都市社会学——下北沢再開発問題のなかで考える』新曜社。

ところがあると思うんですね。これまでの都市社会学だと、そういうことに対する反対運動みたいなものが起きた場合に、そうした運動を拠点に研究者が分析するといったやり方が、ひとつの主流だったかなと思うんですけど、それが無い場合に、そのインフラをどうやって問題化すればいいんだろうっていうことを最近考えています。つまり、今回のテーマでいえば、災害現場で、日常性が切断されて、ある種インフラが問題化するわけですけど、そういう場合だったら、いろんなものが出てきて問題化しやすいんだけど、逆にそうではなくて、ブラックボックスのままの状況のなかのインフラを問題化しようと思ったときに、どういうふうに問題化すればいいんだろうっていうことを最近ちょっと考えていて、何かアイデアをいただけたらいいなと思って、今日、私は楽しみに来ました。

半分雑談なんですけど、先ほどの森元齋先生の話聞いていて、自分が用意してきたコメントっていうのが本当に溝にはまっていて、ちょっとマズイなと思ってます。用意してきたコメントは、なんか抽象的な話ばかりだになって、ちょっと今反省してるんです。だから、かなり即興的にやっていこうかなとは思いますが、学問的にすごく興味があることだけは、ちょっとつまらない質問になるかもしれないんですけど、聴いていこうかなという形で、各先生にコメントをさせていただければと思います。

阪神淡路大震災をめぐる研究と比較して

全体的な印象ですけども、学問的には、自分は都市社会学とか地域社会学っていうものを研究しているので、空間っていうものを都市社会学・地域社会学がいかに扱うことができるのかっていうことは、すごく重要なテーマだとずっと思っています。それはまた、学問の世界だけじゃなくて、現実の世界においても、たとえば東日本大震災っていう現実においても、インフラが破壊されて人びとの生活を支える空間そのものが危機に瀕して、それこそさまざまな問題が噴出してきただけという点でも、すごく重要な問題として具体的に出てきてるんだなと思うんですね。

自分の話をすると、阪神淡路大震災の時っていうのは、まだ高1とか中3とかで、テレビなどでしかその状況を見てないんですよね。その時、私は東京に住んでたので、好きだった女の子がその時神戸にいたんですけど、すごい心配だったんです。当時、ネットとかもないので。そのことは、いつもフラッシュバックして思い出します。それはどうでもいいんですけど。なので、被災の生々しい現実っていうのを初めて目の当たりにしたのは、今回の東日本大震災が、私にとっては初めてでした。新潟県中越地震とかもあったと思うんですけど、その時は行けなかった。で、今回は、登壇者の方々、比較的な同じ世代の方が多いのかなと思うんですね。ある意味、第二世代というか、阪神淡路に直面して研究をされてきた第一世代の次の世代なのかなって勝手に思っています。そうすると、今回のインフラストラクチャーの政治っていう理論的枠組は、「第一世代の理論枠組みでは、うまく東日本大震災の現実を捉えきれない」という違和感みたいなものがあって提示されたのかなって、読んで推測したんですね。そうじゃないのかもしれないですけど。その辺がどうなのかなっていうことを知りたいというのが第一の、皆さん全員への質問っていう感じですね。どなたでもいいんですけど、考えがあれば、後でお聞かせいただければと思います。

エージェント性は関係的にのみ存在するのではないか

あとですね、各先生ということなんですけど、植田先生へのコメントです。植田先生っていうのもなんか恥ずかしいので、植田さんという普段の呼び方にさせていただきたいんですけど、

植田さんに質問したいのは、まず、これが基本的には全体的なまとめという位置づけになっているのかなっていう気はするんですけど、そのまとめ方に他のみなさんがそもそも合意しているのかってというのは、また後で余裕があれば聴きたいなって思いがあります。で、細かな質問は飛ばして、大きなところでいうと、先ほどもご自身でおっしゃられたように、知をすごく問題視されていますよね。それがずっと、植田さんの問題設定だったと思うんですね。で、変革の潜勢力として知っていうものを想定するというようなことだと思うんです。それはすごく分かるんですけど、ただ、やっぱ、Actor Network 論とか、Michel Foucault の統治性の議論とは、それはちょっとずれる部分があるんじゃないかという気がしています。つまり、Foucault とか Actor Network 論というのは、知とか権力とか主体っていうものが複合的に絡み合っている、作動している様子っていうものを捉えようとしていて、何か特定の要素を特権的に扱うというよりは、要素間の関係性を見ようとしてるんじゃないかなと思うんですね。つまり、そのエージェント性ってというのは、関係的にのみ存在するっていう議論じゃないかなと思っていて、「知です、知が大事です」っていうふうに予め前提に置いちゃうってというのはどうなんだろうかっていうところが、ひとつの疑問点でした。

これはおそらく、「urban assemblage 研究が批判的都市研究たりえない」という批判を受けていて、それを乗り越えるために何か変革の潜勢力っていう論点を出さなきゃいけないっていうふうに考えて、それを出してるんじゃないかなって思うんですけど、私が思うに、敢えて変革の潜勢力がこれです、みたいな感じで出さなくても、Actor Network 論みたいなものに最後までこだわって、現象の複雑な相互関係性みたいなものをとにかく記述すると。とにかく具体的に記述していったら、そうすることによって、単純な因果関係では捉えることができないような現象が見えてくると。そうすることで結果的に、何かオルタナティブみたいなものを提示することができのかもしれないんじゃないかなという印象があります。なんか、安易に David Harvey の議論とかと結び付けちゃうと、結局、資本主義体制みたいなところに落とし込まれちゃいそうな気もするっていう点ですね。その点についてどう思うかっていうことが、ひとつ聞きたいことです。

Foucault の研究をいかに都市研究に活かすことができるか

西川先生へのコメントとしてですね、自分もあんまり Foucault とか詳しくなくて、教科書的なことしか知らなかったのので、すごく勉強になったってことがまず第一にあって、やっぱり、Foucault の研究をいかに都市研究に活かしていくことができるかっていうのが、自分にとってのひとつ大きな問題関心で読んでたんですね。今日の発表ではなかったですけども、事前にいただいた論文では、都市社会学についてもすごく研究されていて、これまでの都市社会学が都市生活を支えるインフラや自然環境の側面を十分に論じてなかったとか、また新都市社会学にしても、資本主義システムに従属するある種の技術としてしか扱ってこなかったという主張は良く分かりますし、この後の岩館先生の話ともつながってくる論点だなと思って、すごく共感しました。

で、質問っていうか、自分の考えたことなんですけど、いかにこれから Foucault の議論を我々が活かしていくことができるのかってことが、試されているんだろうなって思うんですね。日本だとやはり、Foucault の権力論とか統治性の議論って、都市研究においては、あまりうまく展開されてないんじゃないかなって印象があって、もしご存知だったら教えていただきたいんですけど。本当に、吉見俊哉先生とか、ぐらいじゃないかなという気がしていて、なかなかないんじゃないかなと。やっぱりそれは、ある種の難しさみたいなものがあるんだろうな

って思うんですね。もし、自分がやるのであれば、やっぱり Foucault がやったように、相当歴史的な研究にならざるを得ないのかなと。その歴史的っていうのも、本当に、かなり歴史的な厚みがないと、モノがヒトに与える影響みたいなものって、なかなか見えてこないかなと思います。5年10年のスパンじゃ、なかなか見えづらいものがあるんだろうなという気がしていて、この辺、何かアイデアがあれば教えていただきたいというのが1点目です。

「モノが力を持つ」と「モノが主体性を持つ」は違うのではないか

もう1点は、さっきの話で、モノの主体性をどう考えるかっていうことです。お話をうかがって、岩舘さんの話にもつながってくるんですけど、「やっぱりモノっていうのは、人間が制御できない部分があって、モノが力を持つっていう部分があるんじゃないか」っていう話があったと思うんですね。そこは、言葉遣いの問題なんだとは思いますが、「モノが力を持つ」っていうことと、「モノの主体性」って、同じようで違うんじゃないかって思っていて。あと、「モノ性」とかも出てきたと思うんですけど、この辺をちょっと後で整理したほうが、みんなで議論しやすいかなって気がしていて、これは西川先生についていうことでもないんですけど、みなさんに、その辺どう考えるのかっていうことですね。

マテリアルなものは統治性にどう効いてくるのか

時間がないので次に行きますと、岩舘先生の研究ですけど、すごく興味深いなって思っ拝見してたんです。集合的消費っていう概念をもう一回現代に生まれかわらせようっていうのは、とても野心的な研究だなって思いました。特に、Manuel Castells の集合的消費の消費のあり方が、ある種一面的っていうか、集合的消費手段の存立のあり方を十分に議論できてないっていうことは、すごくその通りだと思いますし、その集合的消費手段と知識、さらに人々の身体っていうものの相互の関係性をみていこうっていうのは、すごく面白かったです。本当に、面白かったとしか言いようがないんですけど、時間の関係上多分言えなかったんだと思うんですけど、具体的な分析の部分が省略されていて、Actor Network 論ってどう展開されるんだろうかっていうのが、自分は全然専門じゃないんで、ちょっと分かりづかったので、もし余裕があれば、もうちょっと説明していただきたいなっていうのがあります。特にモメント4っていうのは、すごく重要な局面だと思うんですけど、頂いた論文でも事実関係が淡々とあって、どうアクターの動員が可能になったんだろうかっていうところが、ちょっと分かりにくかったんで、余裕があれば後で説明していただきたいなと思います。

あと、分析においても、マテリアルなものっていうのが、どう統治性に効いてくるのか、ちょっとまだ良く分からないっていうか、やっぱり、あくまでも要素に過ぎないのかなっていうようにも見えるんですね。「コントロールできない物質性」っていう意味では、たしかにそうなんですけど、それもある種の要素だって考えて、モノに主体性はなくて、人間にしか主体性がないっていう考えで議論しようと思えばできるかなって気もするので、その辺、どうお考えかなっていうことですね。

あと、これは細かい話なんですけど、前半にネオリベリズムの体制下における新しい介入のあり方として、自らを査定する主体が出てくるという話があって、それ、すごく面白いなと思ったんですけど、後半の水道の分析では、それは出てきますか。自らを査定する主体っていう論点は、どこで出てくるのかなっていうのも、後で教えていただけたらということですね。

WhiteheadとLatourのActor Network論のつながりについて

森元齋先生へのコメントですけれども、私はもう、Alfred North Whiteheadのことは全然知らなかったもので、御本²も買いましたけど、すごく難しくて（笑）、難しいのに英語の論文が送られてきて、さらに難しいっていう、何重にも難しかったんですけど（笑）、ちょっと読んで、それなりに理解できたかなという気もするんですけど、それでもすごく難しかったです。自分で分かった範囲で言うならば、既存の理論とか概念みたいなものを、そのままもってきて現実を捉えるんじゃないくて、具体的なナマの現実から知恵を引き出していこうっていう研究姿勢を、彼は持っていたのかなと思いました。それは、私が興味を持って見てきたLouis Althusserも、わりと近い考え方だったと思うので、すごく共感できる部分があったんですね。この本のなかにも出てくる、常に変化していく対象っていうものをどういうふうに記述することができるのかっていう話、記述した瞬間に対象の具体性みたいなものが零れ落ちてしまうみたいな話っていうのは、実証研究でもぶつかる課題で、自分もすごく悩んだことがあったので、すごく共感できました。で、森先生にうかがいたいのは、もう、ほとんど言いがかりなんですけど、WhiteheadとBruno Latourのつながりについて、もしご自身のお考えがある部分があったら、教えていただきたいなって思うんですね。論文とか今日のお話だと、そこまで具体的に明示的にはお話しされていないかと思うんですけど、やっぱりLatourっていうのは、結構Whiteheadに影響されているんじゃないかなと思います。個人的に思うのは、両者の共通点として、自然と人間と分けて考えるのではなく、それらを全て包括して捉えていこうとする点、物体のような非人間も潜在的なものを開花させようとするという意味で主体性があるとする形而上学的な仮定など、基本的な点はかなり共通点がある。

Whiteheadを研究されてきた森先生からすると、LatourのActor Network論っていうのは、Whiteheadのアイデアを実証研究につなげていくうえで評価できるものなのか、何か課題があるとしたらどういうところに課題があるのかっていうことについて、もし何かお考えがあれば、教えていただけると、今日、みなさんも共有できる部分があるんじゃないか、ためになる部分じゃないかなと思います。

自分が思うに、モノじゃなくて、主体の捉え方が、WhiteheadとLatourだと、ちょっと違うのかなって印象があります。あんまりうまく言えないんですけど、Latourの場合は、やっぱりLatour本人の研究主体が、具体性から見ているわけではないし、研究対象となる主体も、具体性から立ち上げているわけではないのかなっていう気がしています。さっきも出たかもしれないですけど、Whiteheadの「抱握」は原因と結果というふうに分けずに、現象全体を直観と科学的認識の両方で捉えるもので、科学的認識も大事にするけど直感も大事にするみたいな、そういう主体の捉え方だったと思うんですけど、Latourの主体っていうのは、本人も対象者もかなり理性的というか、そういう部分があるんだろうなという気がして。でも、それは実証研究に落とし込むうえでは、しょうがなかったのかもしれないんですけど、その辺、どう考えるのかなっていうのを、お話をうかがえたらなと思います。

軍事的合理性の市民社会への侵入は何をもたらすのか

あんまり時間ないですね。森啓輔先生へのコメントですけれども、安全な空間を作り出すために、警察とか軍隊が規律権力を行使し始めているっていう話はすごく興味深くて、特に震災が起きた時の自衛隊の支援活動をめぐる報道とか、メディアだけじゃなくて、人びとの流す

² 森元齋、2015、『具体性の哲学——ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考』以文社。

Twitter でのつぶやきとかを見ている、結構うすら寒い感じがしたので、とても共感する部分があって、何か気持ち悪いなと思っていたことをやってくれていたのも、すごく面白かったです。たぶん今回は、基本的に、自衛隊的なるものというか、自衛隊が市民社会のなかで受け入れられるようになったプロセスっていうのを、歴史的にも、実際に 3.11 以降からも、かなり詳細に描きだしているんだろうとは思いますが、これは今後の課題なのかもしれないですけど、結局、自衛隊がどういう新しいインフラストラクチャを作上げたのかっていうことに関しては、十分には分からなかったかなっていう感じがしています。レスキュー・エージェントとしての軍隊のイメージが強まったとか、軍事的合理性が市民社会のなかに侵入していったっていうことは、すごく分かるんですけど、そこからどういう変化や影響が起きたのかっていうことが、ちょっとまだ分からなかった。それは多分、最後の Harvey の話がそこにつながってくるんだろうとは思いますが、もう少し何か具体例があれば、教えていただきたいなっていうことです。やっぱり、軍事的合理性は、単に軍隊だけじゃなくて他にもいろいろありえるのかもしれないなと思っていて、それこそ警察とかもあると思うし、もしかして、資本もあるかもしれないし、その辺、どうなっているのかなっていうのを、聴かせていただけたらと思います。ということで、すみません、長くなりました。

コメント ②

Infrastructure as Conceptual Analytical and Empirical Ethnographic Tool

難波 美芸

はじめに

よろしくお願いします。難波美芸と申します。一橋の大学院社会学研究科の博士課程で学振DC です。今日お呼びいただいてすごく嬉しいんですけど、ほとんどの方にとってあんた誰っていう感じだと思うんで、簡単な自己紹介を兼ねて私の研究の話からコメントに移っていきたいと思います。一応、コメントのタイトルとして、Infrastructure as Conceptual Analytical and Empirical Ethnographic Tool と付けさせていただきました。

私の専門は STS 系の人類学と一応言っておきます。ラオスの首都ヴィエンチャンで、2012 年 6 月から合計 25 カ月ほど調査しておりました。で、補足調査で 1 カ月半行って、この月曜日に帰って来たばかりで、ちょっとテンションがおかしいです。インフラ整備を通してヴィエンチャンの都市化がどういうふうに進んでいるのかといったことを研究しています。

ヴィエンチャンの近代化と断絶したインフラ

ラオスは、タイ、カンボジア、ベトナム、中国、ミャンマーに囲まれていて、東南アジアでは唯一の内陸国で海へのアクセスがない国です。1975 年の社会主義革命を経て、現在もラオス人民革命党の一党独裁の国家となっています。加えて後発開発途上国ってこともあって、いかにも人類学者が好んで行きそうな場所です。ラオスは一応、フランス植民地だったこともあって凱旋門が街の中にありまして、これはその凱旋門の上から撮った首都の街並みの写真です(写真1)。人口は、ラオス全体でおよそ 700 万人で、首都ヴィエンチャンも 75 万人程度しかいません。お隣のバンコクで 820 万人、プノンペンで 300 万人っていうのを考えると、かなり人口が少ないです。調べたら人口密度は 206.8 人/km²でした。これ、日本の市町村で言うと、全 790 市町村のうち 551 位の東かがわ市とだいたい同じだそうです。そもそも人口が少ないので、首都とはいえど、「解決すべき都市問題」っていうようなものがあるんじゃないんですね。あと、社会



写真1 ヴィエンチャン市
撮影：難波美芸。

主義国にありがちな、極限まで区画整理された土地に整列する集合住宅がズラーみたいな、そういう街というわけでもない。

そんなヴィエンチャンでも近代化と呼べそうな変化が非常に多くみられまして、近年ではさまざまな国際援助とかが入ってきていて、国際機関とか先進国からの支援と投資が本格化して、インフラ整備が進められています。今回の *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* No. 6 の特集でも、東京オリンピックについて言及している方がいましたけれども、ヴィエンチャンにおいてもやはり、2004 年に ASEAN 会議が開かれたり、あと 2012 年の ASEM とか、そういう国際会議の開催地とかになるたびに、外国からの援助を受けて、インフラ整備が随所で行われてきました。こういう状況を見ると、複数の国とか国際機関による援助でヴィエンチャンっていう街自体が作られていっているんで、ある意味、異なるモダニティっていうのが、しばしば競合しあいながら隣りあっているっていう状況があったりするわけです。で、それを見ていこうというような研究をしています。

ただ、2009 年にタイとラオスの間にラオス史上初の国際鉄道ってのが走ったんですけど、そこからさらに中国の雲南省まで 420km にわたってラオスを南北に貫く鉄道の計画がありまして、もともと、ラオスに行った当初はそれについてやろうと思っていたんですね。修士課程の頃から、鉄道の発展史みたいなことに興味をもっていて、鉄道ができることによって、人間の移動経験がどう変わるのかとか、あるいは時間とか空間の認識の仕方がどう変わるのかとか、そういう話をやろうと思って、ラオスに行ったんです。けれども、実際行ってみると、国際鉄道とは名ばかりで、3.5km しか通っていないし、ラオス側に国境を超えたところで線路が止まっている。で、実際、利用者もほとんどいないんですね。これは、実際に運行しているときの写真なんですけど、誰も乗ってないわけです (写真 2)。フィールドに行ってみると実際期待外れだったっていうのは、人類学ではよくある話でして、私の場合もそうだったんで、移動している人がいないから移動経験みたいな話はとりあえず置いといて、交通インフラ、特に断絶した交通ネットワーク、*disconnected network* についてちょっと考えてみようじゃないかという問題意識を、フィールドに行ってから考えたわけです。

そこで、ヴィエンチャンー帯を見渡してみますと、こういう断絶したインフラ、インフラの定義であるモノとか



写真2 ラオスータイ国際鉄道の車内
撮影：難波美芸。



写真3 ヴィエンチャン市タラートサオ・モール内
撮影：難波美芸。

ヒトとかを運ぶっていう基本的な機能自体が備わってないようなハコモノっていうのが、たくさんあることに気付くわけです。鉄道が3kmで途切れているだけでなく、たとえば外国資本で作られたデパートはテナントが入っていないくてガラガラだったりとか（写真3）。ラオスは産業も流通も発達していないんで、店っていうかブランドショップとかがないわけですね。っていうか、商品がない。

あと、舗装道路が途中で切れていて、車の通行が不可能になっていたりとかですね。あるいは、この写真は街



写真4 ヴィエンチャン市中心部乾季のメコン川沿い
撮影：難波美芸。

の中心部で、右側がメコン川で、この河川の護岸工事を韓国政府の支援でやっているんですけど（写真4）、ここ、要は外国人が一番来る場所で、ここしか護岸工事してないんですよ。12kmだけ作って。しかも、川って当然右岸と左岸があるわけで、護岸工事って基本的に両側やらなきゃいけないはずなのに、タイ側と一緒にやっているわけではない。もし氾濫したら、タイ側が氾濫したりとか、このヴィエンチャンの12kmのそこだけが守られるっていう、そういうこともありうる。こういうある種の断絶したインフラっていうのを見て、これを *infrastructure fetishism* という形で理解して、このあいだ論文書きました。宣伝なんですけど、*Infrastructure and Social Complexity* っていう論集¹が来月の半ばぐらいに Routledge から出版予定です。私も書いているんで、ぜひ、高いんで所属機関の図書館とかに入れていただければと思うんですけど、ここでは“Becoming a City: Infrastructural Fetishism and Scattered Urbanization in Vientiane, Laos”という論文²を書かせてもらいました。

Infrastructure Fetishism

この *infrastructure fetishism* っていうアイデアですけど、これは Dimitris Dalakoglou っていう人類学者の研究から得ました。彼は、社会主義政権下のアルバニアでの道路建設に注目して、アルバニアで作られた高速道路についての民族誌³を書いています。Dalakoglou (2010) によると、アルバニアでは、1990年まで自動車の所有が一般人には認められていなかったんで、人びとの移動っていうのは激しく規制されていたわけですが、にもかかわらず、社会主義政権下では、人びとによる有志の労働、ボランティア・ワークによって、全長4000kmもの高速道路が建設されたと。当時、普通乗用車は国内に2700台しかなくて、トラックとか輸送用の車両も7700台しかなかったと。4000kmの高速道路があるのに、それを走る車がない。だけど高速道路を作

¹ Harvey, Penny, Casper Bruun Jensen and Atsuro Morita eds., 2016, *Infrastructure and Social Complexity: A Companion*, Abingdon: Routledge.

² Namba, Miki, 2016, “Becoming a City: Infrastructural Fetishism and Scattered Urbanization in Vientiane, Laos,” Penny Harvey, Casper Bruun Jensen and Atsuro Morita eds., 2016, *Infrastructure and Social Complexity: A Companion*, Abingdon: Routledge, 76-90.

³ Dalakoglou, Dimitris, 2010, “The Road: An Ethnography of the Albanian-Greek Cross-Border Motorway,” *American Ethnologist*, 37(1): 132-149.

ると。完全に、ほんと気持ちがいいまでのハコモノなわけですが、この舗装道路の建設に人々がボランティアに参加すること自体が、社会主義国における革命達成のための重要なシンボルだったわけですね。

こうした研究、Dalakoglou 以外にも結構あって、社会主義国に限らず、パキスタンの研究⁴とか、いろんな事例があります。こういった研究では、インフラが持つモダニティのシンボルとしての働きに注目していて、その働きが、必ずしも人々の間では有効ではなくて、実は人びとの間では近代化とか発展とか前進としては理解されなくて、結果、むしろそれを進めようとしている国家への不信へとつながっていく、そういった事例として描かれています。ただ一方で、じゃあ、なんで国家ってのは *infrastructure fetishism* へと駆られるのかっていうとこまでは問われていないわけです。アルバニアの舗装道路とかヴィエンチャンの堤防がフェティッシュだと指摘したとしても、そこではある意味、本物のインフラの機能っていうのがまずあって、その上にシンボルが乗っかっているっていう、モノとシンボルの関係はそのままなわけですね。その関係自体が問われることはない。こういう高速道路とかは、近代化っていう仮面を被った悪い模倣、あるいは粗悪な模倣っていう位置づけになるわけです。こういう話をするだけだったら——開発の裏に潜む問題みたいな感じで単に暴露するっていうだけだったら——、ジャーナリストとかで優秀な人はいくらでもいるんで、人類学者じゃなくてもやれるわけです。問題になっているのは、やっぱり、まがい物だろうが、見せかけのものだろうが、それでも作るというところですよ。車がないのに高速道路を作るとか、実際には護岸機能がないのに堤防を作るとか、とにかく近代化したい、どうやったら近代化できるのか、どうやったらインフラを通して近代化できるのかって考えて奮闘している開発者側っていうのがいるわけで、この人たちの論理をいったん考えてみようじゃないかと。

もうひとつ、その結果、いたるところに現れる機能してないインフラ、初めからブレイクダウン状態のインフラと人々が、どういう関係を結んでいるのか、そこが私の研究の中心になっています。インフラ自体が断絶しているの、それを補完するための実践が人々の生活のなかで現れてくるわけですね。この点については、今回の *DIS No. 6* の特集のなかで西成のことをやっている原口剛さんの論文をちょっと参照させていただきながら、コメントしたいと思います。

近代化のマジックとしてのインフラ開発

そもそも、なんで私たちは新幹線とか高速道路ができると近代化したって思うのか。理論的な問題じゃなくて、一般の人のレベルで、なんで大きなビルが建つと近代化したって言われるのか。インフラ研究は、インフラそれ自体が単線的な発展と近代化の座標軸として機能すること、あるいは、今日引用している人もいましたけど、Stephen Graham と Simon Marvin による研究⁵も、インフラ開発というのは時間をコントロールするメカニズムなんだということを指摘してきました。開発の人類学の文脈で言いますと、そもそもインフラ開発っていうものの自体が啓蒙思想に端を発していて——とりわけ植民地においては宗主国がインフラ整備を大々的に進めてきた文脈があるわけですけど——、そこではインフラ整備を通して近代化を進めるっていうよりも、インフラの建設自体が近代化を意味するようになっていく、そういう過程があるわけです。だから、本当にフェティッシュ化していくわけですよ。第二次世界大戦以降も、イン

⁴ Khan, Naveeda, 2006, “Flaws in the Flow: Roads and their Modernity in Pakistan,” *Social Text*, 24(4 89): 87-113.

⁵ Graham, Stephen and Simon Marvin, 2001, *Splintering Urbanism: Networked Infrastructures, Technological Mobilities and the Urban Condition*, London and New York: Routledge.

フラの開発は途上国支援にとって不可欠なものとして正当化されてきました。ものすごく強力な近代化のマジックなわけです。そのため、植民地期におけるインフラ整備とか、現在の開発援助の文脈においても、道路とか鉄道の建設といった事業は、単に技術的發展をもたらすものってだけではなくて、近代化っていうのは何なのかっていうことを端的に示すもの、言い方によっては、押し付けるものと言ってもいいのかもしれませんが。しかもですね、誰もが極めてリニアルな発展っていうのをインフラそれ自体に期待しているし、信じているわけです。先ほど、三浦さんもコメントで、都市景観の均質化っていうことをおっしゃっていましたが、やっぱり近代化と画一化・均質化っていうのがセットで語られるのは、途上国の場合は、インフラ自体が先進国の支援によるコピーだからなわけですね。なので、植田さんの発表にあったように、インフラの定義を、社会の近代性への信憑を下支えする基盤とするスタートポイントというのは、有効というか、嫌な言い方をすると当たり前だと思うんですね。で、今話した植民地状況っていうのを考えると、インフラが統治のツールっていうことも、いわば自明なことなわけですね。都市を考えるうえで、インフラを通してその統治のあり方を見るっていうのは、普通に有効だろうと思います。

Infrastructure and Social Complexity の序論⁶でも紹介されてる、2015 年に行われた“Manchester Group of Debate in Anthropological Theory”っていうワークショップで、Laura Bear っていう人が、印象的な発言をしています。インフラって言うとき、いろんな人がいろんなものを指して使うわけで、概念規定が非常に曖昧だとする批判が会場に出るわけですが、Bear は、この批判への応答として、何だってインフラって呼ぶことは別にできるんだよと言った一方で、ただやっぱり、何かをインフラって呼ぶことっていうのは、「統治の場の形成」に関わることであり、その統治の場に影響することでもあるんだと言っています (Harvey et al. 2016: 6-7)。私もインフラっていうものが何なのかっていう定義を引っ張りやろうとは思わないんですが、こういう統治の問題と絡めたところに注目している部分もあります。今回の *DIS No. 6* の特集は、日本で暮らす私たちの生活そのものを、極めて基本的なところで支えているインフラに注目して、そこに完全に依存していた生活っていうのがあって、それがいかに統治されて、がんじがらめになっていたかを示してくれていると思います。

3. 11 と近代科学への不信と信頼

岩館さんの論文⁷では、3.11 以降に一度不安定化した水道水の安全のネットワークが再び安定化して、水質汚染問題そのものは収束していったけれども、完全なる信頼回復には至ってなくて、汚染値を測る測定器が市民団体によって設置されて、現在もそういう測定が続いているっていった報告がされていました。「この水が安全かどうかを誰がどうやって決定するのかと問う市民的な科学実践であり、インフラを再び人々が取り戻す過程である」と述べられていたわけですが、Actor Network Theory (ANT) に則って考えるならば、これらの市民っていうのも、水道水の安全ネットワークの再安定化を促すアクターとして参入しているわけですね。安全基準をどこに設定するかっていう問題で、誰が決めるのかっていう問題で、市民団体と水道局と政府は、ある意味、科学的知識を動員するっていう同じ美学を共有しちゃっているわけです。

⁶ Harvey, Penny, Casper Bruun Jensen and Atsuro Morita, 2016, “Introduction: Infrastructural Complications,” Penny Harvey, Casper Bruun Jensen and Atsuro Morita eds., *Infrastructure and Social Complexity: A Companion*, Abingdon: Routledge, 1-22.

⁷ Iwade, Yutaka, 2017, “Materiality of Intervention: A Note on the Infrastructure Question,” *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 38-48.

3.11 以前のアレンジメントとは当然異なったものだと思いますが。ここを基に考えると、3.11 を契機に近代科学への信頼が失われていると植田さんの論文⁸でも書かれていたと思うんですけども、一方で、実際には、正しい科学的真実っていうのが権力によって隠されていて、それを暴こうっていう動きがすごく熱くなったっていうことで、その科学的知識への信頼が減じたとは全く思えない部分もあります。人々がガイガーカウンターによって自分達の行動を方向づけられたり、ガイガーカウンターっていう科学技術の、モノのエージェンシーっていうのが、いまだかつてないほど顕在化したのも、3.11 以降なわけですね。東京において、インフラのブレイクダウンを契機に科学への信頼が崩壊したっていうところまでは言えないんじゃないかと思うわけです。

植田さんの論文のなかでも、「社会の近代性への信憑が危機に直面するとき、それを支えるインフラについての事態を診断・把握する知というのは大きな力を持つ」と。「それゆえどのような知が事態の把握にとって適切であるかは、infrastructure politics の焦点となる」と言っているわけなんですけど、大事だと思うんですけども、先ほど森元斎さんが述べられていたような、Alfred North Whitehead が言う Wisdom っていうのは、市民がガイガーカウンターを持つことによって得ることができるとは、あんまり思えないわけです。そういう意味で、原発とか水道とかガイガーカウンターとか、あとは癌検査とかに使う機材とかっていうモノを通して、我々は相変わらず自然科学っていうものによって支えられる知識、それによって支えられる安定したネットワークに安住しているんじゃないでしょうか、って思いました。

インフラを飼いならす狡知

ブレイクダウンによってインフラが可視化されるっていう前提も、そもそも先進国の都市部のごく一部の階級の集団においてだけなわけですね。たいしてブラックボックス化されてないラオスでは、温水シャワー機が壊れたよとかっていうと、大家さん自身が来て、そのまま修理してくれたりするわけです。温水シャワー機ってよく壊れるものなんですけど、あそこのだれそれさん、このあいだ温水シャワー機直してて感電して死んだよとか、そういう話もよく聞くんですね。あるいは、これは私が住んでいた長屋のすぐ横ですけど（写真5）、この排水溝も大家さんがベトナム人雇って勝手に作ってしまし、あるいは舗装されてない道、雨期になると水たまりがすごくできて、それによって穴がたくさんできるんですけども、この穴っていうのも、近隣住民が建築用の煉瓦を砕いて——煉瓦には使えないものが当然出てくるので——、それで勝手に穴埋めしたりとかする（写真6、写真7）。こういったことが行われているわけですね。あるいは、我が家でもそうでしたが、いつ水が止まっても大丈夫のように、巨大なバケツに水を溜めておくっていうのが常識なわけ



写真5 ヴィエンチャン市の路地裏
撮影：難波美芸。

⁸ Ueda, Takefumi, 2017, “Infrastructure Politics: Questioning Reliability of Modernity and Its Basis,” *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 5-11.

ですね。こんなバケツ、日本で売られているのはあんまり見ないんですけども、ラオスではこれが普通だと。

なので、Graham と Marvin が言っているところのインフラの不可視性って、基本的にうまくいっているってことを想定した前提なわけです。加えて、可視か不可視かっていうのは、インフラを利用する人によって全く異なるわけです。誰かにとってのインフラは、誰かにとってのガラクタとか、あるいは弊害かもしれないわけです。

たとえばテレビって、私たちにとってほぼ当然の通信インフラの一部なわけですけど、ホームレスの人たちにとっては違うわけです。1964年に、西成の三角公園に地元の福祉団体が街頭テレビを設置したんですけど、2011年の地デジ化によって見られなくなっちゃうという事態が起きました。地デジ化っていうのは、完全にGrahamらが言うところの *splintering urbanization* の *splintering* な効果の典型だと思うんです。つまり、新たにテレビとかチューナーとか買うことができない人は完全に排除されるわけです。結局、西成の場合は、支援者らによって新しい薄型テレビが設置されることになりました。不完全なインフラを補う社会関係とか狡知とか、DIS No. 6の原口さんの論文⁹でいうところの *people's infrastructure* っていうのが、*splintering* なインフラの状態

を補完するっていう構図は、普通に考えられるだろうなって思うわけですね。AbdouMalig Simoneが、“People as infrastructure”という論文¹⁰を書いていますけど、この論文はヨハネスブルグの事例について論じているんですけど、ご存知のとおりヨハネスブルグという街は、人種とか階級によって構成自体が非常に露骨に分けられて作られていて、しかも我々が考えるような基本的なインフラ整備もなされてない地区もたくさんあって、そういうところで、商業行為とかを通じて人種とか階級とかを超えた社会的つながりを築くことによって——当然、その場限りのつながりも多いでしょうが——、インフラのブレイクダウン状態を補完しているというよ



写真6 雨季に現れる道路の水たまり
撮影: 難波美芸.

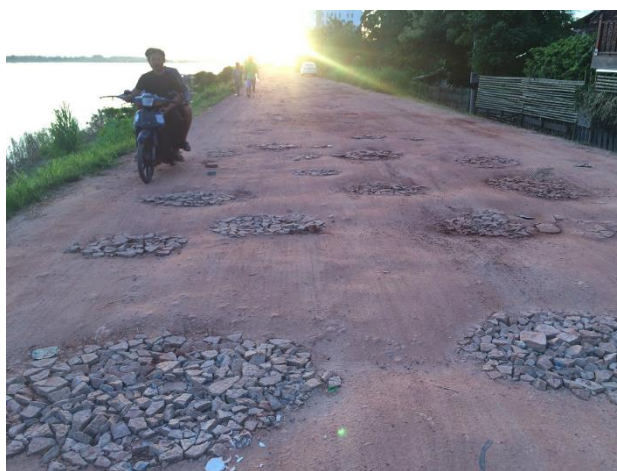


写真7 割れた石材等で穴埋めされた道路
撮影: 難波美芸.

⁹ Haraguchi, Takeshi, 2017, “A Historical Geography of Kamagasaki and the ‘People’s Infrastructure’,” *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 30-37.

¹⁰ Simone, AbdouMalig, 2004, “People as Infrastructure: Intersecting Fragments in Johannesburg,” *Public Culture*, 16(3): 407-429.

うな事例が報告されています。なので、釜ヶ崎の暴動とか、そういうわかりやすい抵抗っていうよりも、抵抗論批判以降の都市人類学の研究¹¹では、「都市を飼い馴らす」、あるいは「狡知」と言えるような実践、つまり既存のインフラを壊すんじゃなくて、うまく利用をしていこうっていう実践に注目してきました。

この釜ヶ崎の三角公園について考えると、ラオスなんかよりもすごくインフラが整っているなっていうか、この三角公園っていう場所によってインフラが物理的に可能にしていることって、すごくたくさんあると思うんですよね。たとえば水道とか使い放題だしトイレもあるし、ただその一方で、やっぱり統治する側っていうのもまた、マテリアルを駆使して対抗しようとしてくるわけですよね。その典型が、排除型アーキテクチャーですよね。横になれないようにする、排除型と呼ばれるオブジェとかベンチとかです。統治のマテリアルな側面を考えるなら、こういう本当に具体的なマテリアルにも注目していかないと、あんまり意味がないと思うんですよね。たとえばこの排除型ベンチって、横になれないようにする物理的なモノなわけですけども、これ、James J. Gibson の affordance 的に言うんだったら、ベンチが横になれないように afford しているし、逆に Bruno Latour 的に言うんだったら、ホームレスを横にならせまいとする行政とか近所の住民の意図っていうのが delegate、代理されているわけです。

Latour の真似で——最近 Latour は現代アートにもものすごい期待をもっているらしいので——、ちょっと余談になりますが、ロサンゼルスで、排除型ベンチで寝るためのクッション入りの衣服を“Archisuits”という作品 (<http://www.insecuritiespaces.net/archisuits.html>) として作った Sarah Ross というアーティストがいます。ロスでも、排除型アーキテクチャーがある時期広まっていった過程があるらしいです。排除型ベンチに限らず、いろんなところで横になれるように、クッションとジャージが一体化しているっていうものなんですね。こういう実践もあるよという紹介にとどめますが、あくまでアート作品なんで、たとえば支援団体とかがこれを大量購入して三角公園で配ったりとかしたら、またこれもひとつのインフラになるのかなという感じでしょうか。

もう1点、ドヤについて考えたいのは、ドヤっていうインフラの機能自体も変わってきている点です。大阪で人類学会とかあるときは、私たちも泊まったりするんですけど、よく知られているように、外国人バックパッカーの受け皿になっているわけです。たとえば、去年の東京のホテルのオキュパンシー・レートって70%超えだったりするんですよね。普通は50%程度がベストなんで、完全にパンク状態なわけです。これってつまり、旅行産業を支えるインフラが破たんしつつあるんで、レイバー・フォースの安定供給のためにできてきたドヤっていうインフラが、観光インフラのパンクのために使われてきているわけです。つまり、先ほどの話に戻ると、誰かにとってのインフラは、誰かにとってのインフラじゃないものかもしれないっていうことです。

インフラは極めて関係的なものである

そこで、森啓輔さんの報告に言及すると、軍備においても同様のことを言えないわけでもないわけですね。ラオスの隣国のタイでは、しょっちゅう軍事クーデターが起きていますが、軍隊は、普段は王様を守るセキュリティ・インフラなわけですが、反政府運動が活発化してく

¹¹ 松田素二，1996，『都市を飼い慣らす——アフリカの都市人類学』河出書房新社；小川さやか，2011，『都市を生きぬくための狡知——タンザニアの零細商人マチングの民族誌』世界思想社。

ると政権交代のためのインフラになる、みたいな。それは、具体的に武器っていうものを持っていて、銃を持って撃つことのできる人間集団がインフラとして存在しているっていうことなわけですね。韓国の民主労総っていう労働組合の集まりのところに行ったときに、彼らが、「日本だと徴兵制ないから革命出来ないよね」って、「俺らは銃をパツて渡されたら撃ち方知ってるから、ある意味いくらでも、いつでも革命できるんだよ」と言っていたのを、今ふと思ひ出しました。日本だと自衛隊が反政府側の市民のために蜂起して戦ってくれるって、あんまり思えないですね。

そう考えると、私たちが生きている世界って、やっぱり恐ろしくがんじがらめに見えてくるわけです。今回の論集全体を見ても、インフラの複雑性によってもたらさる予測不可能性とか意図せざる結果とかっていうものへの注目よりも、いかに我々がインフラによって、インフラを通じて統治されているのかっていうところに注目が置かれているように思うわけです。さらに言うと、インフラを通して統治しようっていう人間のエージェンシーの方が前面に出ていて、あんまりモノ感がないんですね。ちょっと人間中心主義的かなっていう印象を持ちました。やっぱり、モノによって人間が突き動かされているっていうことはあって、それは統治する側もされる側もそうだろうと思うんですね。そこで、やっぱり、単体のある科学技術、道路とかっていうものを見るんじゃなくて、インフラストラクチャに注目するっていうのがどういうことなのかを考える必要があると思います。どのように我々が道路とか水道とか発電所とかっていった具体物を通して統治されているのかっていう側面のみに注目するなら、集合的消費でも *milieu* でもいいんですけど、インフラって言う必要ってあんまりないんじゃないかなと、あんまり旨みがないんじゃないかなと思うんです。

インフラっていうコンセプトの重要な点は、やっぱり関係的なものだっていうことだと思うんですね。たとえばパソコンっていうのは、それが作動するのに必要なインフラの重要なひとつに電力があるわけですけど、電力が生産される発電所っていう現場では、それをコントロールするコンピュータ・システムっていうインフラがあるわけで、どこで切り取るかによって、その関係が反転したりもするわけです。

インフラは人間と非人間の二項対立を超える概念であり具体的対象

ちょっと長くなってきましたけれども、インフラは、極めて関係的なものであるというのに加えて、人間と非人間の境界すらも曖昧にするものだと考えられます。人類学でインフラ研究をやっている人たちは、最近、そういうことを言っていて、たとえば水力発電において川はもはや完全なる自然ではないし、発電施設だって完全なる人工物ではないわけです。インフラっていうのは、この点で実は結構壮大な話とつながっていて、自然と文化とか、人間と非人間とか、主体と客体といった二項対立を超えることができるかもしれない概念であり具体的な対象で、今日のコメントのタイトルにつけましたけど、*Conceptual Analytic* かつ *Empirical Ethnographic* なツールだと考えられます。やっぱり、そこから考えると、Latour とか Michel Callon とかの *Actor Network Theory* などの流れで重要なのは、自然がひとつで文化が複数っていう前提を壊したことだったと思うんです。たとえば、森田敦郎さんの『野生のエンジニアリング』¹²からの引用になりますけれども、「先進国の機械技術が唯一の正しい技術で、タイの技術は文化の影響を受けた逸脱ということになるのだろうか。タイの技術も発展すれば、先進国のよう

¹² 森田敦郎, 2012, 『野生のエンジニアリング——タイ中小工業における人とモノの人類学』世界思想社。

になるのが自然の成り行きなのだろうか」(森田 2012: 18)と問うて、この本の結論としては、そうじゃないと。正しい科学技術の使い方があるのに、文化によって捻じ曲げられて間違った使い方をしているっていう前提を取り払うことで、自然と文化の二項対立っていうのを問い直すわけです。人類学では、ポスト多元主義人類学とかポストヒューマンといった流れです。

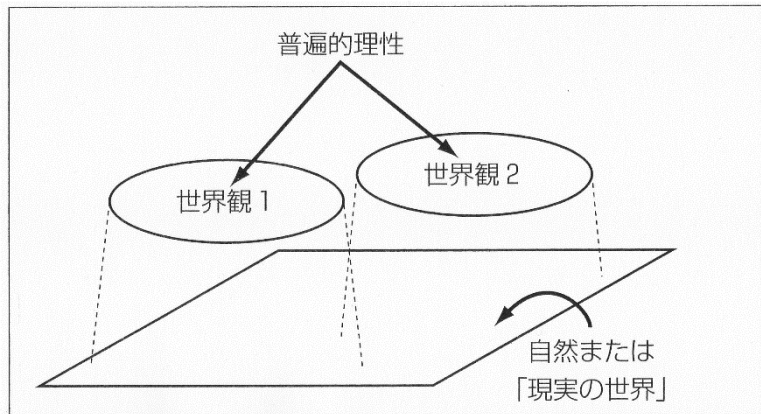


図1 自然と世界観 [Ingold 2000: 15]
出典: 森田(2012)15 頁の図 1-1 を引用。

この図1は、Tim Ingold っていう人類学者の本¹³に載っている図を森田さんが『野生のエンジニアリング』に転載したものです。結構分かりやすく、下の四角が自然または現実の世界、つまり自然科学によって規定される「現実」と一般的に言われるところのもので、それを切り取る世界観——ラオス人の世界観とか日本人の世界観——っていうのがあって、我々研究者は普遍的理性をもってこれらの見方を研究するという図なわけです。これが多元主義です。こういうのをやめましょうよっていうのがポスト多元主義の人類学で、やっぱり Actor Network Theory による影響も非常に強いです。

インフラの複雑性

もう少し先に行きたいんですけども、インフラの非常に重要なポイントってのは、もうひとつあって、やっぱりその複雑性なわけですね。東京ひとつとっても、古い下水道とか地下水道とか送電線とか地下鉄とか、正直どこを通ってるかっていうその全体図を誰も持ってないわけです。建築家の田中智之さんが描いた新宿駅の図を見るとわかりやすいですけど——これが取りあげられている海外のブログ (<http://socks-studio.com/2016/08/27/infinite-infrastructure-drawings-of-tokyo-stations-by-tomoyuki-tanaka/>) では、infinite infrastructure というタイトルが付いていますが——、無限に増えてくわけですね。先ほどの水道配管の話もそうですけど、なんかすごく把握できているように見えて、実際誰も把握できないんですよ。Latour と Emilie Hermant が *Paris: Invisible City*¹⁴ という論文というか本みたいなものを書いていて、そこでも論じられていますが、ここでは panopticon をもじって、oligopticon という分析ツールが導入されています。パリを覆い尽くす電話とかインターネットとか水路とか、道路交通とかっていうさまざまなネットワークがあって——それによって町の機能が安定化されているわけですけど——、表から見えない地下室とかにだいたいあるような、いわゆるコントロールセンターでこれらは監視されているわけなんですけど、それは panopticon のような眺望ではなくて、決してオーバービューを得ることができない、局所的な視点しか持つことができないものだという議論です。

¹³ Ingold, Tim, 2000, *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*, London: Routledge.

¹⁴ Latour, Bruno and Emilie Hermant, 1998, *Paris ville invisible*, Paris: La Découverte-Les Empêcheurs de penser en rond.

たとえばコントロールセンターでは、ライン上に赤く光る場所が事故による渋滞を示していたりとか、アラームが鳴ったりしたら電話回線がパンクしてるとかっていうことを、知らせてはくれるわけなんですけど、そのモニターの前に座っている監視者っていうのは、その全体を掴むことはできないし、異なるネットワーク間に起きた2つのトラブルっていうのが実は関係していたとしても、それを知る由っていうのはないわけです。この Latour の論文は、そういうわけで、コントロールセンターのモニターっていうモノを見るマネージャーっていう、具体的な人間とモノっていうものを通して、都市インフラの複雑性っていうのを気づかせてくれる結構面白い論文だなと思うんで、ぜひ読んでいただきたいと思うんです。

おわりに

最後になるんですが、今回の特集でも指摘されていることですが、インフラ整備を国家は専門家に委託することによって、極めて科学的な営みを通して、都市への介入を目立たなくさせようと頑張っているわけなんですけども、インフラを単に統治のためのツールとしてのみ見ると、やっぱりそれは複雑すぎて全くコントロール不可能なものなんで、あんまり有効じゃないと思うんですね。今回の築地移転問題とかを見ても、知識の専門化と分業がある意味進みすぎた結果、ネットワークが混乱を極めているわけです。近年のインフラ研究の特徴は、そもそもインフラに予測不可能性っていうのが含まれているっていう点に注目しているし、しかも、インフラには完成っていうものが存在しないし、全く新たなインフラっていうものが存在しないっていうところで、概念的にも対象としても面白いんじゃないかと、そういう期待があるわけです。being っていうよりは becoming なものだ、みたいな言い方からしても、その辺が Latour とか Whitehead とか、Deleuze=Guattari とかと相性が良いんでしょうね。そういう点においても、マテリアリティの政治に迫るっていうときに、インフラに注目するっていうのは、非常に有効だし、すごくラディカルなものになるだろうという期待もあります。

あと、モノのエージェンシーについても、二言三言、言いたいことがあるんですけど、先ほど、モノの力、モノに主体性はあるのかみたいな話があったんですけど、人類学では散々されてきた話で、若干うんざりっていうぐらいなんですけど、まず、モノに意思は絶対ないですよ。認められないし、それを観察することもできない。ただ、モノと関わるときに、人間が必ずモノによってどうにか動かされてしまうっていうことがあるわけですよ。こんなペットボトルすらも、ここをこうやって持つしかない、みたいな。モノが人間の行動を規定するところってのは、やっぱりあるわけです。さらに言うと、Latour や Callon らの ANT 的に考えると、もう、どっちが主体でどっちが客体なのかみたいな境界も曖昧になるから、モノに主体性があるっていうような言い方は、たぶんしないんじゃないかなと思うんですよ。ただ、やっぱり、モノによって働きかけられると。things act upon us みたいな言い方になるんじゃないかなと思います。だから、すごく予測不可能なことっていうのが起きるわけですよ。ブレイクダウンもそうですけど。そういうところの期待ってのが、やっぱり大きく持てるんじゃないかなと思っています。そんな感じです。

報告者リプライ

植田：ではまず、今日の報告者の方々、西川さんから順に、リプライをいただければと思います。よろしくお願いします。

西川：西川です。コメントの方、お二方、どうもありがとうございました。まず、順番にお答えしていこうかなということですが、初めに、三浦先生からいただいたコメントのひとつですが、これは質問というか、Michel Foucault で都市研究を見ていくっていうのは、なかなか難しいところがあるっていうお話でして、それに対して何かいいアイデアはないだろうかというところでした。たしかに今回の発表では、都市社会学の部分に関しては削っていて、何で削ったかっていうと、もちろん通り一遍の批判は Foucault の立場からあって、たとえばマルクス主義とかに対する批判の方法はあるんですけど、ただ、それをちょっと言っても、私自身もそれほどちゃんとマルクス主義を学んでいないので、あんまり言うのもあれかなと思ったので、今回、発表の段階では削ったというところなんです。ただ、日本のなかでいうと、もちろん吉見俊哉先生なんかは、比較的早い段階から記号論的な都市の解読みたいなものの限界について述べられていて、当然、マテリアルな次元を含めて考える必要があるんじゃないかっていうようなことは、おっしゃっていたと思います。ただ、私が見る限りでは、その後、あまりその論点は深められなかったのかなというところがあって、都市研究自体も、やはりその後、たとえば北田暁大さんが引き継いだとしても、ネットといいますか、情報空間の方に行っている感じがしています。通信をインフラだととれば、それも含めていろいろ考えようはあるんだと思うんですけども、ただ、都市のマテリアリティみたいな次元は、あまりそれ以降深められなかったのかなという気はしていたので、ちょっとそのあたりで、統治性という観点からものが言えるかなということで、ひとつ見ていっているということがあります。

じゃあ実際に、日本の都市を分析するにあたって、歴史研究にならざるをえないのかというところですけども、そういうわけではない、というところがありまして、ひとつはもちろん、今回ちょっと出ていましたけれども、ネオリベとインフラの話っていうのは相性がいいので、こういった観点から分析していくことはできるだろうというのはあります。つまり、現代的な問題として都市を切っていくっていうことは、十分可能だろうと。そのときに、いろいろ参考になるところがあるかなと思ったのは、ひとつは、今日はあまり話に出てこなかったけど、難波さんの話でちょっと出てきましたが、国境を越えるインフラの話っていうのは、ひとつあるのかなと思っています。島国なので日本だとなかなか見えにくいですが、特にヨーロッパだと、国同士を結ぶ鉄道の話であるとか、国境を越えるインフラの研究っていうのは、わりと蓄積があったりするので、そういった観点から私も一度、戦前日本を切ってみようかと思って、やってみたことがあったんです。たとえば戦前だったら、弾丸列車っていう構想が立てられていたりする。つまり、日本から中国まで、東京発北京行っていう鉄道が作られようとしているとかですね、そういうこともありました。あと、都市計画という意味では、これもすごくよく知られているところですけども、戦前の段階だと、むしろ満州の方がすごく衛生的な都市がつくられている。だから、日本よりも全然水準が高い都市が作られているということがあって、それを逆輸入するかたちで、日本にあてはめていくっていうところがあったりする。で

すので、狭い意味での近代日本という限定を外して考えていくと、いろいろ現代においても見えてくることがあるのかなということは、ひとつ思いました。

それがちょっと後ろ向きだとすると、もっと将来のことを考えてみるというのもひとつかなと思うところがあって、これも私自身ちょっと興味があるんですけども、今後都市っていうのを考えていくうえで、都市の縮小っていうか、逆にたたんでいくっていう面も見えてくるのかなと。つまり、先ほどちょっと言いましたけれども、ローカル線が廃線になっていくことの意味って言ったらいいんですかね。それまで通じていて、ネットワークのなかに組み込まれていた地域が、そこから切断されてしまうというところがあるんじゃないかと。つまり、インフラっていう観点から見ていくと、都市の縮小っていう話を、ひとつできるんじゃないかなと感じました。実際やっぱ、地方とかに行くと、これはあくまでもニュースを通してしか知りませんけれども、予算的に降りないので道路の修復ができないという話がちらほら出てきていて、じゃあどうするかというと、住民の方が道路を作るっていう、そういう動きもあったりするようなんです。そうした観点からいくと、先ほど人類学の方面ではそういうのがあるよっていうのは教えていただいたんですけど、これ、今後の日本を見ていくうえで、そういう視点っていうのは、もしかして見えてくるんじゃないかと。つまり、道路といったモノについて接していくって言ったらいいんですかね、一般住民が道路を作っていくっていう話も、ひとつ何か見えてくるんじゃないかなというのが、ちょっと感じたところですかね。

あと、いくつかあったかと思うんですけども、ちょっと先に、難波さんの方に行きたいと思います。おっしゃっていることはすごく良くわかりました。人類学でインフラ研究がよくあるっていうのは、特にマンチェスターの方ではある意味すごく有名なので、私もいろいろ読んだりはしていて、Penny Harvey のものとかも読んだんですけども、私自身はあんまりそこまで惹かれなかった部分があって。何でだろうというのは考えたりしてたんですけども、先ほどあったように、たとえばミリューという概念を使ったところで、インフラってあんまり見えないんじゃないかっていうところは、たしかに、その通りかなというところがあります。けれども、ただ一点、何で私が統治性をやろうと思ったかっていう理由にもなるんですけど、先ほど、いわゆるホームレスを排除する環境管理型っていうお話があったと思うんですけども、日本で統治性というか Foucault の話が入ってきたときに、最初にあれが結構出てきたんじゃないかなと思ってます。情報管理とか、あるいは環境管理型権力っていう名前が付けられて、たとえばホームレス排除の椅子の話であるとか、マクドナルドの椅子の話ですよ。そういうのが出てきたときに、ちょっとまずいんじゃないかなと思っていて、Foucault がもうちょっと議論していた繊細さみたいな部分が奪われたんじゃないかなっていうところがあったと。で、その繊細さっていうのが何かというと、先ほど言ったように、物質性と、それによって浮かび上がってくる人口、とりわけ集合的な人間っていうところですけども、それとが、もっとぐっちょりしてるって言ったらいいんですかね、うまいこと表現できないんですけど、こう、ねっとりしたなかで浮かび上がってくるっていう、その繊細さみたいなものが失われるのかなと思ったんです。

難波：露骨すぎってことですか。

西川：特に、マクドナルドの椅子とかの話、たとえば大澤真幸さんとか東浩紀さんとか。あれって個人の身体じゃないですか。Foucault が言ってるのは、もちろんそういう面もあるけれども、もうちょっと集合的な主体性って言ったらいいんですかね、ここで言うところの人口なん

ですけれども、そうした話をしたかったんじゃないかな、というところがあったので、日本国内での Foucault の生権力、あるいは環境管理って言われているところを修正する必要があるかなと、したいなというのがあって、敢えてこういう統治性っていうのに踏み込んだっていうのはあります。

あと、もう一点、すごく重要な点をおっしゃっていて、たしかに人類学だと、モノとヒトとの境界線が無くなってきているっていう捉え方、すごく魅力的だし、面白いなとは思っています。実際、そう考えざるを得ないというか、モノの力って言ったらいいいですかね、そうしたものを考える必要があるときはあって、たとえば放射線の話でもいいですし、私のやってることというと、紫外線がそうなんです。紫外線って、人間のスケールとは全然違う水準で影響を与えてくるものなんですね。たとえば皮膚がやけるとか。なので、そういった人間スケールでは測れないところを見る、しかもそれが、こっちとは関係なく、否応なく向こうから作用してくるみたいな現象を考えると、やっぱりモノの力かっていうのは触れたいなとは思っています。けれども、ただ先ほども言ったように、迷ってるところはあって、それは何かというと、Foucault と Gilles Deleuze の間には、かなり大きな差があります。で、今、Actor Network Theory とか Deleuze=Guattari に行ってしまうのがいいのかどうか。つまり、人間中心主義を否定して、モノっていう話をするのはたしかにいいんだけど、ただやっぱり、人間であるとか、言語の水準っていうのは、やっぱりどこかでちょっと残しておくべきなんじゃないかなっていうのが私の立場、今のところの私の立場です。言葉とモノとの関係性の複雑さを、もうちょっと Foucault に拠って、ねっとり考えたいなっていうのが私の立場ですね。なので、インフラの人類学ってすごく面白いですし、私も魅力的には感じているんですけども、そこに踏み込めなかったっていうのは、そういう理由があるというところですかね。とりあえず、以上です。

岩館：コメントありがとうございました。まず、三浦さんの方から答えていきたいと思います。モノ性のことについては、僕も、三浦さんが言いたいことを言ってくれたかなというふうに思っています。エージェンシーというより、モノが何らかの力をもつ、あるいは何らかの形で作用するというのを、これまで社会学や学知が、あまり捉えきれていなかったのではと思っています。災害というのは、まさにそのとおりですね。僕は水道のことを考え続けているのですが、水は、人間がコントロールできているようでいて、実はできないっていうことです。東京都水道局が「こうやって管理しています」とは言っているんだけど、でも実際には、どこにどこの浄水場の水が流れ込んでいるかは、インフラ・テクノクラートであっても、実は把握しきれていない。そのことは、モノのモノ性たるものの象徴なのかなって思っています。では、マテリアリティが統治においてどう効いているかに関しては、僕自身の力不足で、まだ論文には書ききれてないのかなって思いました。具体的な分析についても、まだまだ分かりにくいのはそのとおりで、水道というインフラ・ネットワークが不安定化して再安定化していくプロセスを、もうちょっと丁寧に見ていかないといけないと思っています。

「新しい介入主義」が、ここにどう効いてくるのかに関しては、リスク管理っていうのが、災害を経験した後の水道インフラにとっては、やっぱりすごく大事になってきている。リスクをどれくらい予測するか、あるいは計算可能なものにするかっていうことで、さっき言ったモノも含めて本来インフラは予測不可能なだけで、予測可能な形にして、あるいは予測可能であるというふうな枠組みを作って、それに基づいて資源配分していったり、予測をしていくっていうその次元で、すごく争いだったり、焦点が移ってくる。こうした点で、「新しい介入主義」みたいなものが問題にしてきたところの論点が入ってくるのかなと、思っていま

す。

それから難波さん、コメントありがとうございました。まず印象に残ったのは、3.11 後の近代科学の揺らぎです。最初、僕も論文書いている時に、市民団体がガイガーカウンターを持ち出して、安定化したネットワークを不安定化させている、あるいは、そこには完全には収まりきらないんだっていう論調で考えていたし、そういうふうには報告しました。ただ、最後の最後で、モノのもつ人間の意図には収まりきらない部分っていうのを持ち出したのは、今日の報告を準備しているなかで、モノを管理し測定しようとする点で、同じ地平にあるのかなと思いはじめたからでした。その意味では、こうした市民の測定活動も安定化に寄与していると言えなくもない。ただ、市民による測定活動は、やはりそれは必要だし、もっともっとやんなきゃいけないと一方では思うんです。国家やテクノクラートといったパワフルなアクターたちが、「安全」の基準なんかを定義していくことに対して、科学に抛りながら対抗していく言説を出していくことはもっともっとやんなきゃいけない。運動のレベルにおいてそうなんだろうと思うし、マテリアリティの政治というときには、そのこと自体が大事だと思います。と同時に、モノの予測不可能性みたいなものに立脚した形で、別の議論を同時に立てていく。その意味で、二重の実践というか政治性というか、そういうことを今日の準備をするなかで考えるようになりました。なので、難波さんが言ってくださったように、僕もむしろ、水道に関しては、ハイパー近代がどんどん強まったと思っています。3.11 の後、「東京水」みたいなものがどんどん作られて、東京の水はいかに安全かっていうキャンペーンがすごく張られていく。東京の水道を海外に輸出しようみたいなことも含めて、徹底的に近代科学を押し進めていく力の方が、むしろ強化されたと思えます。そのことと、自分たちの身を守るためにガイガーカウンターを持つといった、使えるものは使っていく実践の動きとは、対立していく部分と、相補的になっていく部分があることに注意が必要だなと、あらためて思いました。

最後に、誰にとつてのインフラかっていうのは、今回あまり言えなかったんですが、「社会と基盤」研究会内部では結構議論をしてきたことでした。つまり、「東京」の「インフラ」の「危機」といった話を繰り返し強調したのは、そういう意味合いがあって、東京といっても近代日本社会のキャピタル・シティたる「東京」、東京の東京性みたいなものを議論したいと思ってきました。電車はいつでも動いていて、ネットワークにはすぐにつながり、水道は蛇口をひねれば出る、あるいはミネラルウォーターはすぐ手に入る。そういうことがあたかも常態かのように思わせていく、そういう力。かつての言葉で言うところの「都市イデオロギー」なのかもしれませんが、そういったものが「壊れ」て「回復」していく過程や動きを、この論集自体はなんとなく念頭には置いているんだけど、たぶんそこまで表現しきれていない・・・

植田：たしかに、その「東京」っていうところは、うまく表現しきれていないですね・・・

岩館：ですね。そういうところは、ちょっと聞きながら思いました。それ以外も、この論集が持っているバイアスとか限界とかを気づかせていただきました。本当に触れていただいてありがとうございました。ひとまず、こんな形で応答したいと思います。

森（元）：三浦さんの質問で、Whitehead と Latour、どんなもんかつちゅうことですよね。もし Whitehead 原理主義者の立場に立てば、Latour なんか馬鹿だろうということになると思います。Latour の言ってることなんかどうでもいいわい。ただ、これは悪しきオタクな哲学研究っていう観点からです。みなさん Foucault とか Deleuze って言っていましたけど、もし哲学研究者が

Foucault を哲学として研究する場合、たとえば bio-pouvoir、生権力っていう概念を研究するとき、それこそ 1960 年代のあの本のなかでの概念しか扱わないと思います。だから、その著作から外に生権力を連れ出して、今現在私たちの生活は生権力に満ちてるでしょっていうことは、悪しきオタク哲学者は絶対に言いません。そういう意味では、ダメです。だけど、さっきも言いましたが、溝にはまっちゃったら面白くない。だから、別にいいんじゃないのと、僕は思います。だって、これだけ生権力なんていう概念が世界中に広まったのって、すごいことですよ。今ここにいるなかで、Foucault という固有名が出てくる人口密度の濃さといったら、すごい。だからなんか、別にいいんじゃないの。だから、その観点をとれば、Latour もいいんじゃないの。あと、Whitehead 自身は、Latour や Stengers さんが論じることを、おそらく喜ぶと思います。なぜなら、Whitehead がいた時代が、先ほどもちょっと言ったかもしれないですけど、19 世紀。Latour もなんかよく、私たちは近代人じゃないって言ったり、たぶん Latour も近代人じゃないんだと思う。もちろん 19 世紀は近代なのかどうなのか、という視点もあるとは思いつつ、まだ 19 世紀って、今みたいな専門分化が激しくない。だから、ああいうことが言えちゃうんじゃないかなという気はします。で、Actor Network Theory (ANT) ってどんなものなのかっていうのは、正直言いますと、よくわかりません。なんか、みんな使えていいんだったら、いいんじゃないですかという以上のことは言えない。それが実証研究としても妥当性があるもの、検証されうるもの、社会学の STS でも ANT の理論のなかで、ある一定の基準を満たして、それが valid ですよと言っているものだったら、いいんじゃないのって思います。ただ、僕は分かりません、その辺。

あと、もう少し、Latour の哲学的な構図と、Whitehead の構図の違いについてですね。さっきもちよこちよこ話題になっていたと思うんですけども、モノ性とモノの力とモノの主体。Latour の場合は、僕も Latour 全部読んだわけではないのでわかんないんですけど、たぶんそれこそ、さっきもおっしゃっていたように、モノに左右されるとか、そういう側面があるだろうなと思っています。その一方で、Whitehead では、人類学では否定されてしまっているかもしれないけども、全部に主体があります。これは、さきほど西川さんがおっしゃっていたように、彼、もともと物理学者だったので、分子レベルとかでモノを考えたりします。そのレベルで、たとえばこのペットボトルも、もちろん意識なんかはないんです。で、人間にも意識があるかっていうと怪しいぞと、Whitehead は言います。であるにもかかわらず、主体がある。それはどういうことかという、もう少し、ほんと即物的なレベルですね。だからこのペットボトルも、動いてないように見えるけど、分子レベルで見たら、むちゃくちゃ動いてるわけですよ。ちょっとずつちょっとずつ劣化していく。このペットボトルさんの主体があって、俺劣化したいって劣化してるわけですよ、わかんないけど。

難波：うーん、微妙・・・

森(元)：私たちも、劣化したいって劣化してる。アンチエイジングなんかダメです。そのレベルを、Whitehead は主体と言います。一応、拙著¹のなかでは、主観と主体という言葉を実は使い分けていて、主観っていうのは、いわゆる一般的な人間の主観ですね。その一方で、人間もマイクも主体ですよって言うときは、同じ subject だけど、僕の場合はですね、ちょっと訳し分けて使ってます。

¹ 森元斎，2015，『具体性の哲学——ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考』以文社。

拙著でも語ってるんですけど、人間だけ意識はあるので、たとえば数学の問題が解けるとか、ロジックが解けるんですよね。真偽が判定できる。ただ、この人たち（ペットボトル）は、あんまりできない。もちろんそれは、科学の側面で切り取ったら、真偽が確定できるような部分があるのかもしれないけど、だいたい分子レベルのものっていうのはランダムな動きをするし、量子力学、量子レベルのものは不確定なので、従来の仕方では真偽が確定できない。で、私たち人間も、実はほとんどそういうふうに動いている。僕も今、何喋ってるのか分からないで喋ってます。大方、ほとんどの領域において、そういった意味で主体性を持っていて、いろんなことを出したり引いたり、飯食って糞してる。結構即物的なレベルでのことを、Whitehead は語っています。そんな即物的なレベルのものにも力があって、なおかつその力でいろんなことするのを prehension という言葉で語っています。抱握と翻訳しました。その一方で、人間がすごい抽象的なレベルで、否定ができますよとかいうのは、apprehension ですね、ap が頭についています。で、apprehension しているのは、だいたい論理学者か数学者ぐらいしかいないんじゃないか。あと、コンピュータぐらいですかね。その意味で、Whitehead からすればコンピュータは意識があります。だから、Latour とはちょっと、ちょっとというか大きく違う。それと、難波さん、僕に何か質問しましたっけ。

難波：質問しましたっけ。

森(元)：してなかったっけ。自分で書いたメモが汚い字で読めません。

難波：なんだっけ。あ、ガイガーカウンターを私が持っても、さっきお話ししてたみたいな、Whitehead が言うところの wisdom は得られないんじゃないのっていう、まあ、質問っていうかなんていうか。

森(元)：これは一個の事例なんですけど、それこそちょっと前に書いたことがあります。『被曝社会年報』だったか『現代思想』か。面白いのが、ガイガーカウンター持ってる私たちって、放射線に関してズブの素人じゃないですか。で、よくわかんないけどピーピー鳴ってるからやべぞ、みたいな感じなんですけど、それで、とりあえず楽しいから測る。で、やっぱ、おとん・おかんが多い。子どもを守るという観点です。で、かれらは道路、特に子どもが通学路で歩く歩道の段差にある黒い藻みたいな、黒いゴミみたいなものに着目します。藍藻類です。あれ測ったらやばかったんですよね。で、なんかやべぞつつって、みんな何か名前分かんないから、それに名前を与えたんですよ。「黒い物質」。これはもう、詩です。これに対して専門家が、これは藻の一種で、普段はカリウムを摂取して大きくなるんだけど、セシウム摂取して生物濃縮されて、ものすごい放射線量を発してんだよと。これはだから、ガイガーカウンターを持ってる人たちも、科学リテラシーに貢献したわけです。私たちのリテラシーを高めるのに貢献した。だからこれは、ちょっとずつしか進まないんだけど、そうやってちょっとずつ、さっきの話じゃないですけど、我々素人が科学的知識をきちんと得ていくことって、すごい時間がかかると思うんだけど、僕はそういうことがあって、ちょっとずつ進展していくと思っています。その意味でも、科学は全然否定されるべきことではない。Whitehead の立場もそうです。だから、科学も取り込んだうえで、少しずつ民衆のレベルでも、いわゆる具体的な生活の観点から、少しずつ科学を得て、科学をある意味で進展させていくようにゆくゆくはなるんじゃないか。何の話だったっけ、忘れちゃったけど。そうそう。その意味では、知恵の進展です。

難波:そこで格差っていうのはあるんですか。やっぱり、科学的真実みたいなものを探求していくっていうこと。しかも溝にはまらない形で。ていうか、溝にはまらなくても、科学的真実ってのに到達できるようなものとして想定されている科学的真実みたいなものがあるっていう感じなんですかね。

森(元):さっきおっしゃってたハイパー近代主義じゃなくて、ハイパーハイパーハイパー近代主義みたいなのは、Whitehead も、これ Deleuze もそうなんですけど、ある。それもある一方で、ハイパーハイパーハイパープレモダン主義みたいなのが、一緒になっているのが、Whitehead の場合。だから、彼にとって望ましいのは、ハイパープレモダンな状態とハイパーモダンな状態が渾然一体となっている。

難波:それがさっき言ってた平衡状態なんですか。

森(元):そう。ちょっとずつ進展していくことが望ましいんじゃないか。進展、進歩みたいなのは言うんですけど、終わりはたぶん無い。Whitehead の場合、面白いのは、始まりも無い。なので、ずっとずぶずぶの世界。これはまたちょっと別の領域での Whitehead の話。

森(啓):ほとんど忘れかけてるんですけど、一応。三浦さんの質問で、自衛隊がインフラをどう作り上げたのかっていうレベルの話は、自分が今すごい面白いなと思っていて、たしかに重要だなと思っています。この書き物、僕が初めて禁欲的に書いた論文なんですけど、みんな避けたくなる事象だなと思っていて、で、書きながら、なんで避けたくなるのかなってところも、同時にいろいろメタ的なレベルで考えてるところはあって、やっぱりそこは、自分自身が、どう考えても自由主義的なものに裏付けられた社会的な教育を受けたからなのかなって思うんですね。たとえばこれが、もう少し抑圧体制の軍事主義的な政府のもとで自分自身が教育を受けてたらどう考えるかと考えると、おそらく違うだろうと。でも、こういう軍事的なものを、ある種、避けて通っていくような思考自体が、自由主義的な統治体制のなかで非常にうまく機能していて、だからこそ、特に日本の戦後を歴史社会学的に見ていくと、そういう部分があるなと思っています。なんか、国家の戦争形成、war making の枠組みのなかに、もう軍事的なものを正面から捉えないでいいみたいな、捉えたらちょっときつみみたいな、そういう心性みたいなものが集散的に作られているのかなっていうのがあるので、それは今後の課題だと思いました。

やっぱり、自衛隊がインフラをどう作り出したかって、基本的にやってるのは初動。直後に、でかいブルドーザーでガッガッってガレキを取り除いたり、壊れた道を作り直したりって、そういうのが基本的には主要な作業で、一回道が導通した後に、コミュニティがもっていた電気インフラだとか、水道インフラですよ、あるいは食料インフラってものを中心に担ってきたわけで、石巻と女川に何回か行きましたが、そういう空間だったわけです。それは、これからの課題にしたいなというのがあります。

もうひとつは警察。軍隊だけじゃなくて、軍事的合理性のなかには警察的なものとか、軍事的合理性自体はたぶん軍事的なものって言うんですけど、それが警察組織とか資本のなかにもやっぱり編入してるっていうのは事実で、特に欧米の都市研究だと、都市における警察の役割がどんどん出てくると言うんです。都市人口がますます増加するグローバルな都市化の展開において、都市の軍事化、あるいは軍事機構の都市化という文脈が、避けられない

現実を構成しつつあります。この新たな都市の軍事化、都市をめぐる軍事化については、Stephen Graham の著作²が鋭い批判を展開しています。

今、やはりアメリカのなかで、特に湾岸戦争以降、1992 年以降に問題になっているのは、アメリカの軍事費は、だいたい日本の国家予算と同等くらい、ちょっと多いのかな、今だとちょっと少ないくらいなんですけども、そのくらいの予算があって、そのうちの 3 割は海外の多国籍企業に流れているんですね。なぜかと言うと、もともと国内に主要な傭兵の会社を持っていたアメリカの大きな軍事会社のブランチが、イラク戦争とかアフガン戦争のなかで現地民をゲームで殺したりとかするわけですね。それが非常に国内世論で問題になった時期があって、2005 年くらいから 2007 年くらいまであるんですけど、この時期に、みんなが知らない国にヘッドクォーターを移し始めるんです。で、結果的にはペンタゴンの予算って、そういうところに流れて、国防予算の 3 割強ですね、36-37% ぐらいが、そういう海外の多国籍企業に流れていると。アメリカの軍事予算の民営化と、多国籍企業のアメリカ外流出の問題については、David Vine の研究³を参照して頂きたいです。こういう会社が、基本的に、アメリカ国内の機動隊が持つ装備とかを開発している会社でもあるので、そういう形で、ある種の資本を媒介としたブーメランのものとして都市に返ってくるってのは間違いないだろうし、このままいくと、おそらく日本もそういう機制になっていくだろうと思います。それはこれから、もうちょっとちゃんと考えていきたいです。

これは、難波さんの方にもつながる話だと思ったんですけど、もうひとつは都市研究。都市の研究で考えてみると、たとえば Actor Network Theory (ANT) とか、都市研究でいう assemblage 学派、新都市社会学の人たちがそう総称して批判する学派があって、植田さんの冒頭の報告にあったと思うんですけど、やっぱり主要な違いっていうのがいくつかあって、そのなかで一番面白いと思ったのは、新都市社会学とかマルクス主義的な構造主義は、基本的には、構造自体が抱える内部の矛盾から変革主体が現れるっていうところを捨てないっていうところなんです。要するに、変革主体は内部に既に矛盾として存在するということなんです。この観点から、Actor Network Theory は外部との接続のなかでしか変革の余地がないんじゃないかと、そこに関してはどう考えるのか、それに対して答えを出してないんじゃないかっていうレベルで、批判理論は ANT を批判するわけですね。この点に関しては Neil Brenner たちが、包括的で緊張感のある論争の整理⁴をしています。それは組織レベルの話なのか、制度レベルの話なのか、あるいは個人レベルの話なのかっていう部分で、たぶんいろいろ別れるとは思いますが、僕自身がいろいろと難しいなと考えているところです。

もうひとつ、すごい方法論的保守主義的なことを言ってしまうんですけど、たとえば社会学のなかで ANT をどう考えるかといったときに、難波さんに提示していただいたように、分析的な理論で、ethnographic に practical なツールであるっていうところは、たぶん都市研究のなかでもある程度合意はある。それは、今までの大きな構造理論とか資本のフローっていうところでは見られなかった複雑な関係性や、ある種の因果的な非決定性みたいなものを明らかにするような可能性があるっていうところは、僕も同意するんです。けれども、社会学の場合、厄介な

² Graham, Stephen, 2010, *Cities under Siege: The New Military Urbanism*, London: Verso.

³ Vine, David, 2015, *Base Nation: How U.S. Military Bases Abroad Harm America and the World*, New York: Metropolitan Books. (=2016, 西村金一監訳・市中芳江・露久保由美子・手嶋由美子訳『米軍基地がやってきたこと』原書房.)

⁴ Brenner, Neil, David J. Madden and David Wachsmuth, 2011, "Assemblage Urbanism and the Challenges of Critical Urban Theory," *City*, 15: 225-240.

のは、じゃあこれを、たとえば計量研究でどうするかとか、たとえば、今 SNS ネットワークとかすごい流行りだと思うんですけど、ソーシャル・ネットワーク分析って基本的には Latour たちが言うようなネットワークとはかなり違う系譜がずっと 100 年くらいあって、方法論的な水準でどうするかというのがある。ネットワークは分かったと。ネットワーク的なもののフローとかノードがどうかとか、そういう話は分かったと。それをどういうふうに実証するかといったときに、どういうデータから明らかにするのかっていう段階で、非常に難しくなるなって考えています。批判理論とか新都市社会学の主要な批判って、たぶんその辺にあって、ANT や assemblage 学派的の言いたいことは分かるし、理論も非常に明晰な部分はあるけれども、しかし、それを方法論的な部分に落とし込むときに、じゃあ、どういうふうなレベルの何を対象にすればいいのかっていうところが明らかではないんじゃないのっていうところが、難しいとこだなと思っています。そこがまだ課題なんですけど、ethnographic な方法論とは異なるレベルで、どういうふうな実証と理論の往復がありうるのかなっていうのが、なんか自分の個人的な悩みを打ち明けただけなんですけど、今の時点ではこの 2 つが気になることです。何かアイデアがあれば、教えていただけたらと思います。ありがとうございます。

植田：ありがとうございました。残り時間が限られているので、フロアにも開きたいと思うんですけど、その前にひとつだけ。難波さんがさっきおっしゃっていた、科学的な知識への信頼は揺らいでないんじゃないかっていうのは、本当にそのとおりで、我々もそこはたぶん共有している話なんですね。近代的な日常生活を送ってきた人たちがインフラに対して持っていた信憑性の感覚は大きく揺らいだかもしれないけれども、でも、それを梃子にして、近代的な知識とか科学知とか、もっと言うと工学的な知ですよね、それが圧倒的な力を持ち始めているんだと。震災の後、むしろ強まっているとさえいえる。だからこそ、そこを問題化したいっていうところがあります。三浦さんがさっきおっしゃってくださったように、植田の問題関心が知にあるっていうのは、そののところとも関係していて、知識とか専門知とか、特に近代社会において工学的な知が持ってきた力の特権性みたいなものを、一度ちゃんと理論的に位置付けたいってところが、僕の場合、基本的な問題関心としてあります。

答えなければならぬことはまだまだいっぱいあるんですけど、時間が迫っていますので、いったんここでフロアに開きたいと思います。もし何かさらにコメントとか、ご質問とかございましたら、できればお名前をいただいたうえで出していただければと思います。よろしくお願いします。いかがでしょうか。

全体討論

牧野：大妻女子大学の牧野智和といいます。自己啓発の言説とかを追っていて、手帳のことを研究していることがあって、そのモノ性みたいなことを考えたくて、今日、ここに来ました。

Actor Network Theory (ANT) のことは勉強の途中なんですけど、だから、さっき森啓輔さんがおっしゃっていたことも僕は気になっていて、Actor Network 観というのは植田さんにも聴いてみたいと思ったんです。マテリアルな次元に注目するとして、それはいったい今までの研究と比べたときに、何を新しく見えていて、あるいは、何かに注目する度合いが、それこそ今までのいろんなエスノグラフィーであったりと比べたときにどう違ってくるのか。あるいは、モノであれば成り立つってような話なのか。その視点を入れたことで、つまり、マテリアルな次元っていうふうに打ち出したことで、今までの研究とどういう点が変わってくるのかっていうのが、僕自身があまりうまく説明できないところがあって、それをちょっと教えてほしいなっていうのが植田さんへの質問です。

岩館さんにも聴いてみたくて、エージェンシーが人間・非人間に同様に配分されてないっていう話は非常によく言われていて、で、周辺の諸分野からも、それはちょっとどうだろうっていう話があって、岩館さんもそういう向きがあったと思います。ANT の知見を使ったとして、これはエージェンシーが均等に配分されているとか配分されていないとかっていう見立てが、実際に研究成果にどう関わってくるのかなっていうところです。さっきの岩館さんの報告にあったネットワークは、エージェンシーが等価に配分されているっていう見立てで行った場合と、等価に配分されていないっていう見立てで行った場合とで、いったい研究のどこに違いがでてくるのか、成果物のどこに違いが出てくるのかなっていうのが気になって、そこをちょっと教えていただけると嬉しいです。

植田：ありがとうございます。おっしゃっていただいた点は、答えが正直出ていないところです。まだ、明確にこれが違いますっていう答えは出せていません。ただ、今までの社会学が、社会学者なのでその文脈で話しますけれども、モノをどう扱ってきたのかというと、たとえばマルクス主義の社会学であれば材料とか、あるいは資源として扱ってきたわけで、その配分や分配の問題として考えられてきたように思うんです。そういう意味で、扱うのか扱わないのかという次元では、別に今までの社会学だっていくらでもモノを扱ってきたし、その意味では、別に何か新しいことをやっているということにはならないのだろうと思っています。

ただ、特に都市っていう文脈で考えた場合に、今までは、モノっていうのは、道路であれ電線であれビルや建物であれ、都市社会のある意味で外側にある入れ物のようなものとして、あるいは、都市社会を成り立たせるための資源だったりとして扱われてきたけれども、そうスッキリ分けられないような現実があるような実感が、たとえば震災のときなんかにはあった。だから何が変わるのかと言われると、まだ難しいところはあるけれども、そういったものも含めた対象の設定の仕方というか、問題領域の設定の仕方として、モノというものを今までと違った形で組み込んで都市というものを考えていけないか、そういう必要があるんじゃないかというようなことを、考えています。

それをやって何が違ってくるのかというと、たぶん因果性のメカニズムを理論的にどう考えて

いくのかっていうモデルの立て方が、だいぶ変わってくるのかなと思っていて、先ほどの三浦さんのコメントにも関連するんですけど、もちろん *assemblage* アプローチと政治経済学の接合というのは、竹に木を継ぐようなところがあるので、どちらかがどちらかの長所を殺しかねないというのは分かっていると。分ったうえで、なんでそんな無謀なことをここで考えているかという、私の場合は、政治経済学的な研究の完全決定の問題というか、経済構造で全部説明してしまうところの間をどうやって埋めていくのかっていうところを考えていて、完全に偶発的でもなく、かといって完全に初期条件に決定されるわけでもない間のところで、どう水路づけを考えるかというところを考えていきたいというのがあります。たとえば、Louis Althusser が重層的決定っていうことを言っているけれども、それは、おそらく哲学の領域ではすごく深められているけれども、社会学はちゃんと引き受けられてないような気がしているわけです。その間を詰めていくときに、モノを含めたネットワークというか、*assemblage*、かたまり、集合体みたいなものを対象に据えることによって、物的な初期条件に完全に規定されるのかそういった議論ではない形でのモデルの立て方ができないかっていうことを思っているということがあります。それが今までの研究とどう違うのかという、その「今まで」に何を代入するかによってだいぶ違ってくると思うんですけども、そのようなことを思いながら、この作業をしているところがあります。何が革新的かって言われると、まだ「これが」っていうところまではいかないんですけども、そういう野心は持っているというところでしょうか。

岩館: 植田さんと同じく、僕もまだ、ご質問に対する答えを明確には出しきれていないのですが、いくらか考えていることはあります。ひとつには、自分が学んでいる都市社会学の文脈でいうと、空間をひとつの切り口にしながら、権力や身体のことを見ようとしてきたと。けれども、やっぱりモノの作用とか、モノの方が先に動いていく事態、都市のなかで水があふれるとか、水道管から水があふれていってどこに流れていくかわからないみたいな事態が進展していくってこと自体は、なんていうか……

＜会場の電気ポットのアラーム音＞

岩館: なんか、モノに主体が……

難波: 訴えてる……

岩館: 実際の身体とか人間が行為するレベルにおいて、モノが動くことによって、人が都市のなかで翻弄されていく動きっていうのは、やっぱり十分追えていなかったんじゃないかなと思うんです。水道のように、人間の生存を基底的な部分で支えているものが動くことによって、人間とか組織の方が、逆に後追いで翻弄されていく動きみたいなものを、もう少しちゃんと描きたいところから、僕の場合はモノへの着目が始まったように思います。なので、今回のインフラ危機分析であれば、インフラのネットワークを構成しているモノの動きを見る必要がやっぱりあって、その時に Actor Network Theory の知見が使えないかと思っています。その意味で、エージェンシーの均等な配分ということには、そこまでこだわっていないのかもしれない。

もうひとつは、僕も植田さんと一緒に、決定論をどう考えるかということが、もう一段抽象的な次元であります。政治経済的なアプローチをとると、最終的には資本の問題であり構造の

ところで決定されている問題となる。他方で、ミクロなアプローチをとると、そこにはそういうネットワークがあったからということになり、その間をどうやって埋めていったらいいのか、という問いがあります。そのときに、モノの統治不可能性の部分が何か手がかりにならないかと思っています。モノを介して思わぬところで人と人がつながる、コンピュータにカビが生えとか、氷土壁作ったら全然動かないとか。いい例ではないのですが、モノが人間の意図を超えていってしまう部分、意識には完全に含みきれない部分に着目することで、社会で生きている人間とかそこで起こっている出来事を、社会学なり学知が豊かに捉えていくためのひとつのポイントがあるんじゃないかと、今日のやりとりを含めながら感じているところです。

植田：いかがでしょうか。まだ、あと少しだけ、時間がありますけれども。

難波：こんなにたくさん、大勢の方がいらしてくださって、すごく嬉しいんですけど・・・

植田：本当に、これでも予想していたよりは、だいぶん。

さっきの *assemblage* アプローチの話にしても、Actor Network Theory (ANT) にしても、社会学が導入しようとしたときには、厳密な形で導入するっていうことは、かなり難しいし、それは今までも Foucault だってなんだって、その通りの形では導入していないところでは、その分野の方から見たらすごくいい加減だし、歪曲していることにもなるんだろうと思うんです。そこは今日の森元齋さんのお話で勇気づけられたとして、けれども、そのときにいったい *assemblage* アプローチとか ANT みたいなものをどういう意味で引き取るのかっていうことは、本当に考えなければいけないと、あらためて思いました。もちろん、それを導入するときには、その分野の方から見れば許されないようなことを、おそらく、いっぱいやることになるわけですね。

引き取り方のひとつには、人から成る社会という対象だけではない、モノも含めたような形の領域というか存在があり得ることを認めて、そこへと社会学の対象を拡張させていくというような引き取り方があるんだろうとは思いますが、それは同時に、因果性とか、何が何を規定するのかっていうモデルだとか、そうしたところをどう考えるのかっていうところでも、ややこしい問題を引き受けることになるわけですね。引き取り方によっては、これまで社会学が蓄積してきたいろいろな概念だとか理論だとか、そういったものが一切合財無効化されるかもしれない。とはいえ、片方だけ引き取って片方は知らない顔をするっていうのは、理論的にはずいぶん話で、飲むなら丸ごとっていうことにはなるんだけど、でも、そこを何かかうまいこと加工して接木していかなければいけないとも思うわけです。その場合、それはいったい何の学問をやっていることになるのかっていうところで、さらにややこしい問題が出てくるわけですが、でも、それも含めて、常に変化を拒まずに考えていかなければいけないと、あらためて思っています。

今日、これだけの方に集まっていたいて、本当にありがたく思います。我々が今編集している *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* という雑誌が、どれほどのバイアスをもっているのかということも、よく自覚したうえで、この先の作業を進めていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

「社会と基盤」研究会・研究代表者 町村 敬志

まず、長時間にわたり、大変ありがとうございました。個人的には、今日の研究会のなかで名前の出てきた AbdouMaliq や Graham といった方とは、以前、ある都市研究の英文雑誌の編集委員会で何年も毎年会っていて、そのなかで、こういう議論が確かにいろいろ闘わされていたことを懐かしく思い出しました。日本だと、どうしても学問単位に仕切られてしまって会話や対話ができないことが多いけれども、今回のこの場合は珍しく、すごく刺激的に、いろいろな分野を超えた議論ができる機会であったことが、とても印象的でした。ちなみに、その編集委員会には、AbdouMaliq と Graham 以外に、政治学の Neil Brenner がいて、さらに Harvey Molotch もいました。Molotch は、ニューヨーク大学のすごく皮肉っぽい社会学者で、もともとはマルクス主義にも近い権力論で有名でしたが、近年はすっかり研究が変わっていて、やはりモノのことをやっていたんですね。ニューヨークで普通に消費されている消費財、日常生活の資材（スタッフ）、まさにモノが、どういうふうに作られたり、あるいは象徴的な機能を持っているかという研究をやっていました。だから、Graham にしても AbdouMaliq にしても、Molotch にしても、分野も出発も全然違うけれども、皆、モノという点に収斂しながらどこかで接点をもつ研究を当時やっていました。ちょうど 2006-2007 年ぐらいだったと思うんですが、今から思うと、やはりそれは時代状況なんですね。9.11 より後っていうことはあるけれども、グローバル化とか新自由主義とか、それから情報化・ICT 化などの議論が出尽くすなかで、都市、さらにもっと広く、いわば社会をどう捉え直すかということをめぐる模索のなかで、異なる分野の研究者たちが、なんとなく流れ寄っていったところが、今でいうとマテリアル、モノであったのだな、ということ、今にして思います。10 年経って議論が非常に煮詰まってきたことが、今日の会でよくわかりました。と同時に、議論が進んだことでかえって見えなくなってしまったものはないのか、といったことを含めて、今日あらためて、いろいろ考えさせられたというのが、感想その 1 です。

感想その 2 は、途中の議論でも紹介されていたとおり、このマテリアルとかインフラについての議論は、日本でも以前からたくさんあったということに関わります。たとえば豊橋のこの地域に来るのが僕は 2 回目になります。愛知大学に来るのは実は初めてなんですが、この少し外の高師ヶ原という旧開拓地で豚を飼っていた農家の方に、10 年くらい前にインタビューに行ったことがありました。なぜかという、当時自分はダム研究をおこなっていました。その方はもともと奈良の吉野の山奥に住んでいたのですが、昭和 30 年頃にダムが出来て、水没のため追い出されてしまったわけです。電源開発（今の J-POWER）が、その当時たくさんダムを作っていたわけですが、豊橋のこの場所は、追い出された村の人びとを開拓地に移住させて、山の人が多いので農業を知らないこともあり、農業の仕方を教える「電源の家」というのを電源開発が作って、それで農業指導を行ったというようなことがあった場所なんですね。さらに言うと、その方はもともと家の次三男だったんで、まだ小さい頃、戦時中に開拓少年義勇軍か何かで満州に行かされ、戦後奈良に戻ってきた。しかし、そこでまた、ダムのために追い出さ

れたためにここに来た、といったことがあったんですね。その人は、社会のインフラ整備（軍事も含め）のために繰り返し犠牲を強いられてきた。犠牲者なんだけれども、昔語りではあるとはいえ、こうしたことを懐かしそうに語ってくださった。その頃はもう付近が都市化してしまったため豚を飼うのをやめていたんですけども、それなりに成功していた。そこで、マテリアルなものが引き起こす犠牲について、むしろ幸せそうなものの語り方をしてくださったのが、印象的でした。こちらは、本当は「怒り」や「悲しみ」といった違う話をむしろ内心期待していたんだけど、話が全然そういう方向に行かなかったことを、なんとなく思い出していました。

マテリアルとかインフラとかが拡張する時代を生きていた人というのは、先ほど難波さんが言われていたようなフェティシズムみたいなものを、もろに受けとめてしまっているところがあって、結果的に、「いろいろ苦勞はしているけども・・・」といった形の語りに収斂していくことが多い。そこが罨といえど罨ではあるけれども、確かにある種のリアルさがある。その後、拡大の時代は終わり、高原状態、プラトー状態を迎え、やがて今度は縮小していく。そんなときに、このインフラの語り方がどう変わっていくのか。このようなことを含めて、まさに今日、マテリアルなものをめぐるさまざまな新しい課題がいろいろ問われ直したと思います。今日の報告者それぞれの方が対象としている社会は違っていたし、マテリアルなものの拡張段階、平衡段階、あるいは縮小段階といった各段階の違いによって語り方は違っていた。しかし、大事なことは、こうした違う段階の社会がグローバルな社会においては現に共存していること、そして、研究者の世界のなかでは同じ概念や思考がトラベリングしていきながら領域の違いを超えて共通のリアリティを作っていくことがあることだと思います。私たちは本当に分かり合えたのか。実際には課題はまだ残っていますね。そのあたりについて、これを機会に、もっと議論を深めていけたら、とてもいいんじゃないかなと感じました。

ということで、とても刺激的な4時間でした。植田さん、それから愛知大学のみなさま、それからもちろん、この場で報告・コメントいただいた皆様方に、あらためて感謝の拍手をお願いし、挨拶にかえさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

登壇者一覧(登壇順)

伊東利勝 愛知大学文学部, 教授 (愛知大学人文社会学研究所・所長)

植田剛史 愛知大学文学部, 助教

西川純司 神戸松蔭女子学院大学文学部, 講師

岩舘 豊 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

須永 咲 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員(DC2)

森 元斎 九州産業大学・国立熊本高等専門学校, 非常勤講師

森 啓輔 日本学術振興会特別研究員(PD)・国際基督教大学

三浦倫平 東京大学大学院人文社会系研究科, 助教

難波美芸 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員(DC2)

町村敬志 一橋大学大学院社会学研究科, 教授 (「社会と基盤」研究会・研究代表者)

注：所属および職名はいずれも 2017 年 3 月 31 日時点。

マテリアリティの政治と「インフラ論的転回」
——社会の近代性を支えるヒト・モノへの問い——
(愛知大学人文社会学研究所 2016 年度ワークショップ報告書)

編 者： 植田剛史

発 行： 2017 年 3 月 31 日

愛知大学人文社会学研究所（代表者 伊東利勝）

〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町 1-1

irhsa@ml.aichi-u.ac.jp

<http://taweb.aichi-u.ac.jp/irhs/>



The Institute for Research in Humanities and Social Sciences, Aichi University